茨城県教育財団文化財調査報告第92集

一般国道6号(日立バイパス)改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

山崎遺跡
滑川浜館遺跡

平成6年9月

建設省
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第92集

一般国道6号(日立バイパス)改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

山崎遺跡
滑川浜館遺跡

平成6年9月

建設省
財団法人　茨城県教育財団

上　山崎遺跡全景（南から），下　滑川浜館遺跡全景（南東から）

序

日立市は，茨城県の北部に位置し，全国有数の工業都市であり，政治・経済・文化の各方面にわたり順調な発展を遂げてきました。しかし，細長い地形的な制約から，慢性的な交通混雑が発生しており，この交通混雑を解消するため，一般国道6号(日立バイパス)の改築工事が，建設省によって計画されました。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である山崎遺跡・滑川浜館遺跡が所在しております。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，建設省から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成5年7月から同年12月にかけて，発掘調査を実施してまいりました。

本書は，山崎遺跡・滑川浜館遺跡の調査成果を収録したものであり，本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育・文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である建設省，茨城県教育委員会，日立市教育委員会をはじめ，関係機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成6年9月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，建設省の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成５年７月から同年12月まで実施した，茨城県日立市に所在する，山崎遺跡，滑川浜館遺跡の発掘調査報告書である。

なお，２遺跡の所在地は次の通りである。

山崎遺跡　　日立市本宮町５丁目504番地ほか

滑川浜館遺跡　　日立市東滑川町２丁目1,097番地の１ほか

2　山崎遺跡，滑川浜館遺跡の調査及び整理に関する教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		角田芳夫	平成３年７月～平成６年３月
		小林秀文	平成６年４月～
専務理事		中島弘光	平成５年４月～
事務局長		藤枝宣一	平成４年４月～
埋蔵文化財部長		安藏幸重	平成５年４月～
埋蔵文化財部部長代理		河野佑司	平成６年４月～
企画管理課	課長	水飼敏夫	平成４年４月～
	係長	根本達夫	平成６年４月～
	主任調査員	川井正一	平成５年４月～平成６年３月
	主任調査員	海老澤　稔	平成６年４月～
	主事	杉山秀一	平成４年４月～平成６年３月
経理課	課長	小幡弘明	平成５年４月～
	課長代理	鈴木三郎	平成５年４月～
	係長	大高春夫	平成６年４月～
	主任	飯島康司	平成４年４月～平成６年３月
	主事	軍司浩作	平成５年４月～
調査課	課長（部長兼務）	安藏幸重	平成５年４月～
	調査第四班長	和田雄次	平成５年４月～平成６年３月
	主任調査員	小高五十二	平成５年７月～平成５年12月調査
	調査員	池田晃一	平成５年７月～平成５年12月調査
整理課	課長	阿久津　久	平成５年４月～
	主任調査員	小高五十二	平成６年４月～平成６年９月整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第３・４章のそれぞれの遺跡の第１節　3「遺構･遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，中世の城跡については，千葉県文化財センター主任技師の柴田龍司氏，中央学院大学商学部専任講師の市村高男氏に御指導をいただいた。

5　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

6　遺跡の概略

ふ り が な	いっぱんこくどう6ごう（ひたちバイパス）かいちくこうじちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	一般国道６号（日立バイパス）改築工事地内埋蔵文化財調査報告書
副 書 題	山崎遺跡・滑川浜館遺跡
巻　　次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第92集
シリーズ番号	
編 著 者 名	小　髙　五十二
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 0292（25）6587
発行年月日	1994（平成６）年９月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山崎遺跡（やまざきいせき）	茨城県日立市（いばらきけんひたちし） 本宮町５丁目（もとみやちょう5ちょうめ） 504番地（504ばんち）ほか	08202－078	36度 36分 10秒	140度 40分 30秒	19930701～ 19931231	1,482m²	一般国道６号（日立バイパス）改築工事に伴う調査
滑川浜館遺跡（なめかわはまたていせき）	茨城県日立市（いばらきけんひたちし） 東滑川町（ひがしなめかわちょう） ２丁目1097番地（2ちょうめ1097ばんち） の１（の1）	08202－076	36度 36分 20秒	140度 40分 40秒		2,446m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎遺跡	集落跡	古墳時代（後期）	竪穴住居跡　3軒	土師器，須恵器	・標高17m
		中世	堀　3条 道路跡　1条	須恵器片，陶磁器片 鉄滓	
滑川浜館遺跡	散布地 城館跡	古墳時代（前期）	方形周溝墓　3基	土師器，石製品， 鉄製品	・標高24m ・銅製の銙帯（巡方）が出土している
		平安時代	竪穴住居跡　1軒	土師器片，須恵器片， 銅製品	
		中世	竪穴住居跡　3軒 道路跡　1条 土坑 10基，溝 1条 掘立柱建物跡　3棟 ピット　231基	土師質土器， 須恵器片，陶磁器片， 鉄滓，古銭	

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　山崎遺跡 …… 11
　第１節　調査方法と遺構・遺物の記載方法 …… 11
　　1　地区設定 …… 11
　　2　基本層序の検討 …… 11
　　3　遺構・遺物の記載方法 …… 12
　第２節　遺跡の概要 …… 12
　第３節　遺構と遺物 …… 13
　　1　古墳時代の遺構と遺物 …… 13
　　(1)　竪穴住居跡 …… 13
　　(2)　竪穴状遺構 …… 24
　　2　中世の遺構と遺物 …… 28
　　(1)　城館跡 …… 28
　　(2)　道路跡 …… 35
　　3　その他の遺構と遺物 …… 36
　　(1)　土坑 …… 36
　　(2)　遺構外出土遺物 …… 39
　第４節　まとめ …… 41
第４章　滑川浜館遺跡 …… 43
　第１節　調査方法と遺構・遺物の記載方法 …… 43
　　1　地区設定 …… 43
　　2　基本層序の検討 …… 43
　　3　遺構・遺物の記載方法 …… 43
　第２節　遺跡の概要 …… 44
　第３節　遺構と遺物 …… 44
　　1　古墳時代の遺構と遺物－方形周溝墓 …… 44
　　2　平安時代の遺構と遺物－竪穴住居跡 …… 50
　　3　中世の遺構と遺物 …… 53
　　(1)　竪穴住居跡 …… 53

(2) 掘立柱建物跡 …… 61
(3) 土坑 …… 66
(4) 溝 …… 72
(5) 道路跡 …… 72
(6) 柱穴跡 …… 74
(7) 城館跡 …… 74
4 その他の遺構と遺物 …… 76
(1) 竪穴住居跡 …… 76
(2) 土坑 …… 76
(3) 溝 …… 81
(4) 遺構外出土遺物 …… 81
第4節 まとめ …… 87

写真図版

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図(1) …… 6
第２図　周辺遺跡分布図(2) …… 7
第３図　遺跡地形図 …… 9
山崎遺跡
第４図　呼称方法概念図 …… 11
第５図　基本土層図 …… 11
第６図　第１号住居跡実測図 …… 14
第７図　第１号住居跡竈実測図 …… 15
第８図　第１号住居跡出土遺物実測図(1) …… 16
第９図　第１号住居跡出土遺物実測図(2) …… 17
第10図　第２号住居跡実測図 …… 18
第11図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 19
第12図　第３号住居跡実測図 …… 21
第13図　第３号住居跡出土遺物実測図(1) …… 22
第14図　第３号住居跡出土遺物実測図(2) …… 23
第15図　第３号住居跡出土遺物実測図(3) …… 24
第16図　第１号竪穴状遺構実測図 …… 25
第17図　第１号竪穴状遺構出土遺物実測図(1) ……26
第18図　第１号竪穴状遺構出土遺物実測図(2) ……27
第19図　第１～３号堀土層実測図 …… 28
第20図　第１号堀出土遺物実測図 …… 29
第21図　第２号堀出土遺物実測図 …… 30
第22図　Ａトレンチ土層実測図 …… 32
第23図　Ｂ・Ｃトレンチ土層実測図 …… 32
第24図　Ｄ・Ｅトレンチ土層実測図 …… 33
第25図　Ｆ・Ｇトレンチ土層実測図 …… 34
第26図　第１・２号堀の傾斜図 …… 35
第27図　第１号道路跡断面・土層実測図 …… 35
第28図　第１号道路跡出土遺物実測図 …… 35
第29図　土坑実測図(1) …… 37
第30図　土坑実測図(2) …… 38
第31図　第６・11号土坑出土遺物実測図 …… 38
第32図　遺構外出土遺物実測図 …… 39
第33図　山崎遺跡要図 …… 42
滑川浜館遺跡
第34図　基本土層図 …… 43
第35図　第１号方形周溝墓実測図 …… 45
第36図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 46
第37図　第２号方形周溝墓実測図 …… 47
第38図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 48
第39図　第３号方形周溝墓実測図 …… 49
第40図　第３号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 50
第41図　第３号住居跡実測図 …… 52
第42図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 52
第43図　第１号住居跡実測図 …… 54
第44図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 56
第45図　第２号住居跡実測図 …… 58
第46図　第４号住居跡実測図 …… 59
第47図　第４号住居跡出土遺物実測図 …… 60
第48図　第１号掘立柱建物跡出土遺物実測図 … 61
第49図　第１号掘立柱建物跡実測図 …… 62
第50図　第２号掘立柱建物跡実測図 …… 63・64
第51図　第３号掘立柱建物跡実測図 …… 66
第52図　第６号土坑出土遺物実測図 …… 67
第53図　第8b号土坑出土遺物実測図 …… 67
第54図　土坑実測図(1) …… 70
第55図　土坑実測図(2) …… 71
第56図　第４号溝断面・土層実測図 …… 72
第57図　第１号道路跡《Ａ》断面実測図 …… 73
第58図　第１号道路跡《Ｂ》断面実測図 …… 73
第59図　第１号道路跡《Ａ》出土遺物実測図 … 73
第60図　第177号ピット出土遺物実測図 …… 74
第61図　Ａトレンチ土層実測図 …… 74
第62図　Ｂ・Ｃトレンチ土層実測図 …… 75
第63図　第５号住居跡実測図 …… 76
第64図　第４号土坑出土遺物実測図 …… 77
第65図　その他の土坑実測図(1) …… 78
第66図　その他の土坑実測図(2) …… 79

第67図　その他の土坑出土遺物実測図 …… 80
第68図　第５号溝断面・土層実測図 …… 81
第69図　遺構外出土遺物拓影図(1) …… 83
第70図　遺構外出土遺物拓影図(2) …… 84
第71図　遺構外出土遺物実測図(3) …… 85
第72図　遺構外出土遺物実測・拓影図(4) …… 86
第73図　中世の遺構配置図 …… 87
第74図　滑川浜館遺跡要図 …… 88
付図１　山崎遺跡全体図
付図２　滑川浜館遺跡全体図

表　目　次

表１　山崎遺跡，滑川浜館遺跡周辺遺跡一覧表… 8
表２　山崎遺跡住居跡一覧表 …… 24
表３　山崎遺跡竪穴状遺構一覧表 …… 27
表４　山崎遺跡土坑一覧表 …… 38
表５　滑川浜館遺跡住居跡一覧表 …… 60
表６　滑川浜館遺跡土坑一覧表 …… 80

写　真　図　版

山崎遺跡
ＰＬ１　調査前遠景，調査後全景(Ａ地区，Ｂ地区)
ＰＬ２　第１号住居跡，第１号住居跡竈掘方土層断面
ＰＬ３　第３号住居跡，第１号竪穴状遺構
ＰＬ４　第１号堀土層断面，第１号堀，第２号堀
ＰＬ５　Ｇトレンチ土層断面，北部調査終了状況
ＰＬ６　第１号道路跡，第１・２号土坑
ＰＬ７　住居跡出土土器（SI-1・2・3）
ＰＬ８　第３号住居跡出土土器
ＰＬ９　出土土器（SI-3,第1号竪穴状遺構）
ＰＬ10　出土土器・土製品（第1号竪穴状遺構,SD-1・2,SF-1,SK-6・11,遺構外）
ＰＬ11　出土石器・石製品(SI-1・3,第1号竪穴状遺構)
滑川浜館遺跡
ＰＬ12　調査前遠景，調査後全景
ＰＬ13　第２号方形周溝墓，土師器壺出土状況，第１号方形周溝墓
ＰＬ14　第３号方形周溝墓，第３号住居跡
ＰＬ15　第１号住居跡，第１号住居跡貯蔵穴Ｂ
ＰＬ16　第２号住居跡，第２号住居跡出入口部石組
ＰＬ17　第４号住居跡，第１号道路跡《Ａ》・《Ｂ》
ＰＬ18　第１・２号掘立柱建物跡，第３号掘立柱建物跡
ＰＬ19　土層断面（SB-1,SB-2,P-16,P-27）
ＰＬ20　第５号土坑，第６号土坑
ＰＬ21　第8a・8b号土坑，第９号土坑
ＰＬ22　第22号土坑，第39号土坑，第27号土坑
ＰＬ23　第40号土坑土層断面，第38号土坑，第４号溝
ＰＬ24　第41号土坑土層断面，第42号土坑
ＰＬ25　Ｂトレンチ土層断面，Ｃトレンチ土層断面
ＰＬ26　調査終了状況（南部，北部）
ＰＬ27　出土土器（TM-1～3,SI-1・3）
ＰＬ28　出土遺物（SI-1・4,SF-1,P-177,SK-38,遺構外）
ＰＬ29　出土遺物（TM-1,SI-1・3・4,SK-4・6・29,SF-1,遺構外）
ＰＬ30　山崎遺跡出土遺物（SI-1,SD-1,遺構外),滑川浜館遺跡出土遺物（TM-1・2,SI-1・3・4,SB-1,SK-8b・13・15・20・41,SF-1,遺構外）

第1章　調 査 経 緯

第1節　調査に至る経過

一般国道6号は，水戸市・日立市・土浦市など主要都市を結んで茨城県を南北に縦断し，並行する常磐自動車道やＪＲ常磐線とともに，県内交通網の中軸をなす道路である。近年の産業・経済の発展，車社会の発展により本国道の交通量の増加は著しく，日立市内においても慢性的な交通渋滞がみられ，早急な対策が待たれる現状にある。この様な状況の中で，建設省は，増大する交通渋滞の緩和を図るため，「日立バイパス」の建設を計画した。

平成元年6月27日，建設省関東地方建設局常陸工事事務所は，茨城県教育委員会に対し，建設用地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し，茨城県教育委員会は，現地踏査を実施し，工事予定地内に山崎遺跡，滑川浜館遺跡の存在を確認した。茨城県教育委員会は，平成元年12月20日，文化財保護の立場から建設省と遺跡の取り扱いについて協議をし，現状保存が困難であることから，発掘調査による記録保存の措置を講じることにし，平成2年1月31日，建設省に調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

当教育財団は，建設省と詳細な調整を重ね，埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託計画を結び，平成5年7月1日から同年12月31日にかけて，山崎・滑川浜館両遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節　調査経過

山崎遺跡，滑川浜館遺跡の発掘調査は，平成5年7月1日から同年12月31日までの6か月にわたって実施された。以下，調査の経過について，その概要を記述する。

7　月　　発掘調査をするための諸準備を行い，倉庫及び休憩所を設置し，12日から山崎遺跡と滑川浜館遺跡の伐開作業を開始した。16日に関係者列席の下，鍬入れ式を挙行し，調査の円滑な推進と安全を祈願した。山崎遺跡は，29日からＢ地区の表土除去を開始した。滑川浜館遺跡は，16日から28日にかけて北部の表土除去を行った。

8　月　　山崎遺跡は，2日にＢ地区の表土除去を終了し，Ａ地区は，4日から9日にかけて上物除去及び表土除去を行った。

　　滑川浜館遺跡は，9日から25日にかけて重機による表土除去を行い，26日から31日にかけて遺構確認作業を行った。

9　月　　山崎遺跡は，1日，2日に，基準杭打ち（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。滑川浜館遺跡は，1日から遺構調査を実施した。

10　月　　山崎遺跡は，5日から12日にかけて，Ａ地区山頂部のトレンチ試掘を実施し，人為的に掘り込まれた堀であることを確認した。滑川浜館遺跡は，引き続き遺構調査を実施した。

11　月　　山崎遺跡Ａ地区は，8日から10日にかけて，遺構確認を行い，9日から遺構調査を実施した。山崎遺跡Ｂ地区は，8日に遺構確認を行い，8日から遺構調査を実施して，18日に道路跡1条，土坑2基の調査を終えた。滑川浜館遺跡は，先月に続いて遺構調査を実施し，16日に竪穴住居跡5軒，土坑36基，溝2条，堀立柱建物跡3棟，方形周溝墓3基，道路跡1条，ピット252基の調査を終えた。

12　月　　2日に両遺跡の航空写真撮影を実施し，4日には現地説明会を開催した。山崎遺跡のＡ地区は，先月

に続いて遺構調査を実施し，16日に竪穴住居跡４軒，土坑14基，堀３条の調査を終えた。これまでに作成した図面類の点検，修正，遺物の洗浄及び注記等を行い，22日に現地調査を終了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

山崎遺跡は，日立市本宮町５丁目504番地ほかに所在する。滑川浜館遺跡は，同市東滑川町２丁目1,097番地の１ほかに所在し，山崎遺跡の北方約300ｍに位置している。

日立市は，茨城県北東部，県都水戸市の北東約30㎞に位置し，面積153.22㎢，人口200,618人(平成６年４月１日現在）の都市である。北は十王町と里美村，西は水府村と常陸太田市，そして，南は久慈川を挟んで東海村，那珂町に接し，東は，南北約25㎞の海岸線をもって太平洋に面している。市の東部をＪＲ東日本常磐線と国道６号，国道245号，常磐自動車道が並行してほぼ南北に通じている。気候は，東に太平洋，西に山地をかかえているため，夏は涼しく，冬は比較的暖かい温暖な気候である。日立市は，明治時代の後期にはじまる日立鉱山や日立製作所をはじめとする鉱工業によって発展してきた都市で，ＪＲの日立，常陸多賀，大甕の各駅付近を中心に市街地が形成されてきたが,現在は,海岸地域全域から丘陵部まで市街地が延びている。

地形的にみると，日立市は多賀山地，海岸台地，久慈川下流低地，里川流域の４地域に区分することができる。多賀山地は，阿武隈高地の南端にあたり，古生代の花崗岩質岩石や変成岩で構成され[(1)]，頂上部が比較的なだらかで，ドーム状の山地である。日立市域の約３分の２を占める多賀山地は，高鈴山の標高623ｍを最高峰に，平均標高300ｍ程の高原状山地で，日立鉱山をはじめとする各種鉱物の採鉱所が点在している。

海岸台地は，太平洋に沿って南北に帯状に広がり，第三紀層（凝灰質砂質泥岩）の基盤の上に，第四紀層の洪積層と関東ローム層によって形成されている[(1)]。台地の幅は1.5～３㎞，標高は多賀山地と接する西側で約120ｍ，東端は約20ｍで太平洋に臨んでいる。多賀山地から流出する小河川によって開析され，ひとつひとつが舌状の様相を示す台地が北から南へ連続しており，それらが海岸では波に削られ標高20ｍ前後の海食崖となっている。この海岸台地は,日立市の産業・経済・文化の中心で，工場や住宅が密集している。

久慈川下流域は，関東平野の最北部にある沖積低地[(1)]で，広い水田地域である。また，重要港湾の日立港がある。里川流域は，多賀山地と久慈山地にはさまれた谷間の地域で，谷幅は約500ｍである。

山崎遺跡は，ＪＲ常磐線日立駅の北東約２㎞，太平洋に面する標高約20ｍの台地上に位置している。台地の東側は，高さ約14ｍの海食崖となり，南側と北側には，谷が入り込んでいる。今回の調査地点は，台地の北東端に当たり，現況は山林，畑，荒地である。滑川浜館遺跡は，山崎遺跡の北方約300ｍ，山崎遺跡と同様に，太平洋に面する標高約20ｍの台地上に位置している。台地の東側は，高さ約20ｍの海食崖となり，南側と北側には，谷が入り込んでいる。今回の調査地点は，台地の東端に当たり，現況は山林，荒地である。

注

(1) 蜂須　紀夫　「茨城県　地学のガイド」1986年

第2節　歴史的環境

山崎遺跡，滑川浜館遺跡の所在する地域は，人々に格好の居住環境を提供して，原始，古代においても生活の場となり，数多くの遺跡が残っている。特に，海岸台地には多くの遺跡がみられ，発掘調査の行われた遺跡も多い。ここでは，当地域の主な遺跡について，時代をおって述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては，ネバ山遺跡〈3〉，堂の下遺跡〈5〉，橋の作遺跡[1]〈32〉，鹿野場遺跡[2]〈46〉，泉前遺跡[3]〈63〉，六ツヶ塚遺跡[4]〈66〉などがある。鹿野場遺跡は，多賀山地の高鈴山麓にあり，9つのユニットが確認され，掻器，敲き石などが鹿沼層の直上の地層から出土している[2]。

縄文時代では，砂沢遺跡[5]〈4〉，遠下遺跡[6]〈5〉，下の内遺跡[7]〈11〉，横内遺跡〈13〉，北静遺跡〈19〉，田尻上の代遺跡[8]〈22〉，豊後原遺跡[9]〈24〉，曲り松遺跡〈30〉，ケロ内遺跡〈37〉，蔵前遺跡〈38〉，向畑遺跡[10]〈40〉，金木場遺跡[10]〈41〉，寺台遺跡〈43〉，諏訪遺跡[11]〈54〉，久保遺跡[12]〈55〉などが知られている。田尻上の代遺跡からは，中期中葉から終末の集落跡が確認されている[8]。諏訪遺跡からは，袋状土坑30基が確認され，阿玉台式や大木(7b,8a)式などの土器とともに，石器や炭化したオニグルミの破片が多数確認されている[11]。

弥生時代では，八幡平遺跡[13]〈9〉，横内遺跡[6]，大沼遺跡[14]〈61〉などが知られている。横内遺跡では再葬墓と考えられる2基の合わせ口の壺棺が確認されている[7]。大沼遺跡は，海岸台地が多賀山地に接するあたりの標高100～130mの中位段丘に立地し，遺構は確認されていないが，初期弥生式土器片が数点出土している[14]。山崎遺跡，滑川浜館遺跡の北北東約8kmの地点は「十王台式土器」(後期後半)で知られている十王台遺跡(多賀郡十王町)があり，八幡平遺跡や横内遺跡では十王台式土器が出土している。

古墳時代では，宿東遺跡〈16〉，田尻上の代遺跡，太田尻遺跡〈35〉，山崎遺跡[15]〈1〉などが知られている。古墳は，日立市の北部と南部に多く，北部では高磯古墳群〈25〉(円墳3基)，田尻浜古墳群〈34〉(円墳9基)，滑川浜古墳〈42〉(円墳)，浜の宮古墳群〈47〉(円墳3基)が知られ，横穴群ではかんぶり穴横穴群〈7〉(27基)，長峰横穴群〈26〉(3基)，太田尻横穴群〈36〉(3基)，滑川横穴群〈44〉(4基)，坂下横穴群[17]〈69〉(30基)が知られている。山崎遺跡は，既に2回の調査が行われ，昭和30年の県立日立第一高等学校史学部による発掘調査では後期の住居跡1軒が確認され，昭和63年の日立市埋蔵文化財発掘調査会の調査[15]では後期の竪穴状遺構2軒と土坑1基が確認されている。昭和63年に確認された土坑からは，付近の住居跡から投棄されたと考えられる竈の構築に用いた凝灰岩が出土している。かんぶり穴横穴群には，並列三角文が線彫され，赤く塗彩した痕跡をもつ横穴がある。

奈良・平安時代では，山崎遺跡[15]，滑川浜館遺跡，遠下遺跡[6]，下の内遺跡，横内遺跡[7]，小木津山遺跡，宿東遺跡，御蔵前遺跡〈18〉，北静遺跡，南静遺跡〈20〉，天神前遺跡〈23〉，豊後原遺跡[8]，立下遺跡[18]〈28〉，曲り松遺跡，モガキ平遺跡〈31〉，太田尻遺跡，ケロ内遺跡，蔵前遺跡，舞台遺跡[19]〈39〉，向畑遺跡[10]，金木場遺跡[10]，寺台遺跡，鹿野場遺跡[2]，大沼遺跡[14]，志々前遺跡[20]〈62〉，泉前遺跡[3]などが知られている。遠下遺跡は奈良時代から平安時代にかけての集落跡[6]，横内遺跡は奈良時代から平安時代にかけての集落跡[7]，泉前遺跡は古墳時代末から奈良時代にかけての集落跡[3]，志々前遺跡は奈良・平安時代の竪穴住居跡[20]がそれぞれ確認されている。滑川浜館遺跡の北方約500mの地点には，当財団が調査した向畑遺跡と金木場遺跡があり，向畑遺跡からは，竪穴住居跡2軒，掘立柱建物跡1棟が確認された。金木場遺跡からは竪穴住居跡88軒，掘立柱建物跡1棟が確認され，凝灰岩の切石を利用して構築した竈をもつ住居跡が多数確認され，猿投系の短頸壺や緑紬陶器片，銅製の銙帯(巡方)が出土している[10]。なお，遠下，横内，豊後原，泉前，志々前の各遺跡では，金木場遺跡と同様に，凝灰岩の切石を袖部の芯材として使用している竈が確認されている。『常陸国風土記』によれば，日立市域の南部は久慈郡，北部は多珂郡にあたり，山崎遺跡と滑川浜館遺跡の所在する地は，多珂郡道口郷にあたるものと推定される。

中世では，滑川浜館遺跡〈２〉，蓼沼館跡〈48〉，新城館跡〈50〉，相賀館遺跡[22]〈52〉，要害城跡[22]〈56〉，大窪遺跡〈57〉，大窪天神山城跡[22]〈58〉，大窪愛宕山城跡[22]〈59〉，金沢館跡[22]〈60〉，大橋城跡〈68〉，南高野館遺跡〈72〉等の城館跡がある。日立市史によると，源義家の弟義光の子孫である佐竹氏の家臣であった小野崎直通が，15世紀の末頃に居館としていた滑川館（別称－小幡館）があった。その後，直通は滑川館を出て相賀館に移っている[22]。日立地方は，佐竹氏にかかわる戦い（甕の原の戦い，孫沢原の戦い）の舞台となったところで，それにかかわる遺跡も多い（要害城等）。

近世では，助川海防城跡[22]〈49〉，初崎砲台跡[22]〈51〉，暇修館[22]（水戸藩の郷校の一つで，大窪遺跡内に建設された）がある。

注

(1) 日立市教育委員会　「橋の作遺跡　北の台横穴墓」1982年５月

(2) 日立市教育委員会　「日立市鹿野場遺跡発掘調査報告書」1979年４月

(3) 日立市教育委員会　「泉前遺跡（第一次）」1982年３月「泉前遺跡（第二次）」1982年11月

(4) 日立市教育委員会　「日立市六ツヶ塚遺跡発掘調査報告書」1978年３月

(5) 日立市教育委員会　「砂沢遺跡発掘調査報告書」1992年12月

(6) 日立市教育委員会　「日立市遠下遺跡発掘調査報告書」1975年３月

(7) 日立市教育委員会　「日立市小木津町横内遺跡発掘調査報告書」1979年３月

(8) 茨城県　「茨城県史料　先土器・縄文時代」1979年３月

(9) 日立市教育委員会　「豊後原遺跡発掘調査報告書」1990年９月

(10) （財）茨城県教育財団　「金木場遺跡・向畑遺跡」1990年３月

(11) 日立市教育委員会　「諏訪遺跡発掘調査報告書」1980年３月

(12) 日立市教育委員会　「久保遺跡発掘調査報告書」1991年３月

(13) 日立市教育委員会　「八幡平遺跡発掘調査報告書」1993年３月

(14) 日立市教育委員会　「日立市大沼遺跡発掘調査報告書」1978年２月

(15) 日立市教育委員会　「山崎遺跡発掘調査報告書」1989年３月

(16) 日立市教育委員会　「瓜ボッコ横穴墓　吹上３号墳」1992年３月

(17) 日立市教育委員会　「坂下横穴墓群」1991年９月

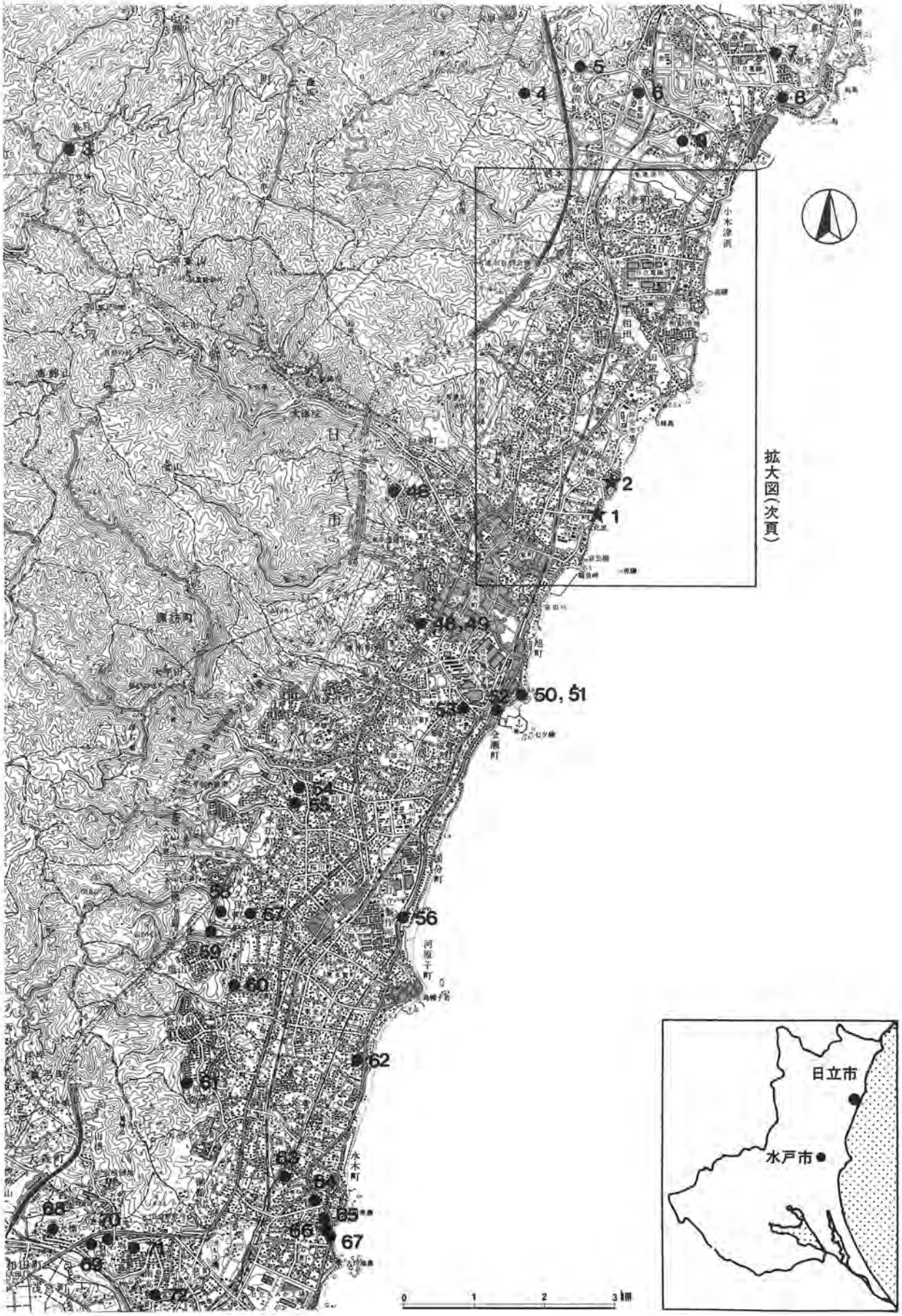
(18) 日立市教育委員会　「立下遺跡発掘調査報告書」1992年３月

(19) 日立市教育委員会　「舞台遺跡発掘調査報告」1985年11月

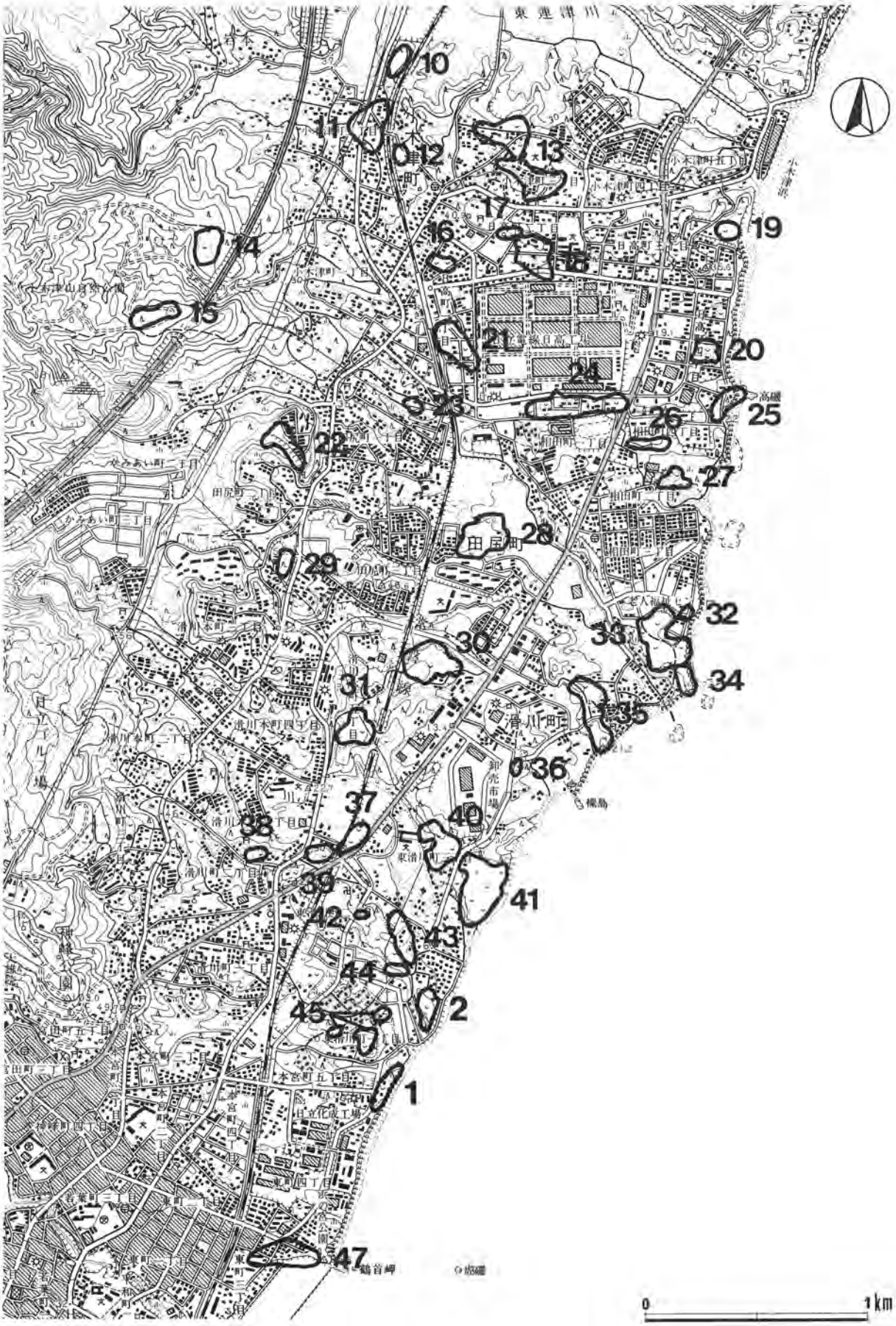
(20) 日立市教育委員会　「志々前遺跡発掘調査報告書」1993年２月

(21) 茨城県　「茨城県史料　古代編」1968年11月

(22) 日立市　「日立市史」1959年２月



第１図　周辺遺跡分布図(1)



第２図　周辺遺跡分布図(2)

表１　山崎遺跡，滑川浜館遺跡周辺遺跡一覧表

番号	県遺跡番号	名称	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世以降
1	864	山崎遺跡		○		○	○	○	
2	867	滑川浜館遺跡		○			○	○	
3	3247	ネバ山遺跡	○						
4		砂沢遺跡		○		○			
5	834	堂の下遺跡	○	○			○		
6	3242	遠下遺跡		○			○		
7	1037	かんぶり横穴群				○			
8	4892	館山神社館							
9	831	八幡平遺跡		○	○		○		
10	4082	弓下台遺跡		○					
11	830	下の内遺跡		○			○		
12		塙屋敷遺跡					○		
13	871	横内遺跡		○	○		○		
14	3239	前山遺跡		○					
15	3775	小木津山遺跡					○		
16	4900	宿東遺跡				○	○	○	
17	892	安良宿古墳群				○			
18	3284	御蔵前遺跡					○		
19	3283	北静遺跡		○			○		
20	3282	南静遺跡					○		
21	4904	杉合遺跡					○		
22	832	田尻上の台遺跡		○		○			
23	4905	天神前遺跡					○		
24	4906	豊後原遺跡		○			○		
25	890	高磯古墳群				○			
26	3307	長峰横穴群				○	○		
27	3285	下相田遺跡		○			○		
28	4085	立下遺跡		○			○		
29	3778	上田沢古墳群				○			
30	3234	曲り松遺跡		○			○		
31	3232	モガキ平遺跡		○			○		
32	3286	橋の作遺跡	○						
33	865	北の台遺跡					○		
34	888	田尻浜古墳群				○			
35	3238	太田尻遺跡				○	○		
36	3304	太田尻横穴群				○	○		
37	4911	ケロ内遺跡		○			○		
38	4910	蔵前遺跡		○			○		
39	3253	舞台遺跡	○		○		○		
40	3233	向畑遺跡		○			○		
41	828	金木場遺跡		○			○		
42	886	滑川浜古墳				○			
43	868	寺台遺跡		○			○		
44	887	滑川横穴群				○	○		
45	3251	明神越遺跡			○	○			
46	3228	鹿野場遺跡	○				○		
47	885	浜の宮古墳群				○			
48	898	蓼沼館跡						○	
49	895	助川海防城跡							○
50	4914	新城館跡						○	
51	896	初崎砲台跡							○
52	897	相賀館跡						○	
53	862	瓜ボッコ横穴墓				○			
54	2739	諏訪遺跡		○			○		
55	3227	久保遺跡		○			○		
56	3310	要害城跡						○	
57	3311	大窪遺跡						○	
58	4923	大窪天神山城跡						○	
59	4924	大窪愛宕山城跡						○	
60	4926	金沢館跡						○	
61	3783	大沼遺跡			○		○		
62	4931	志々前遺跡		○		○	○		
63	816	泉前遺跡	○	○	○	○		○	
64	3302	水木古墳群				○			
65	883	甕の原古墳群				○			
66		六ツケ塚遺跡	○						
67	3303	田楽鼻古墳				○			
68	3769	大橋城跡						○	
69	3771	坂下横穴群				○	○		
70	878	西の妻古墳群				○			
71	3255	原の内遺跡		○	○	○	○		
72	4936	南高野館遺跡						○	

東清川町三丁目
東清川町二丁目
清川町一丁目
東清川町一丁目
本宮町五丁目
本宮町四丁目
東町四丁目
清川浜館遺跡
山崎遺跡A地区
山崎遺跡B地区

第3図　遺跡地形図

山　崎　遺　跡

第3章　山崎遺跡

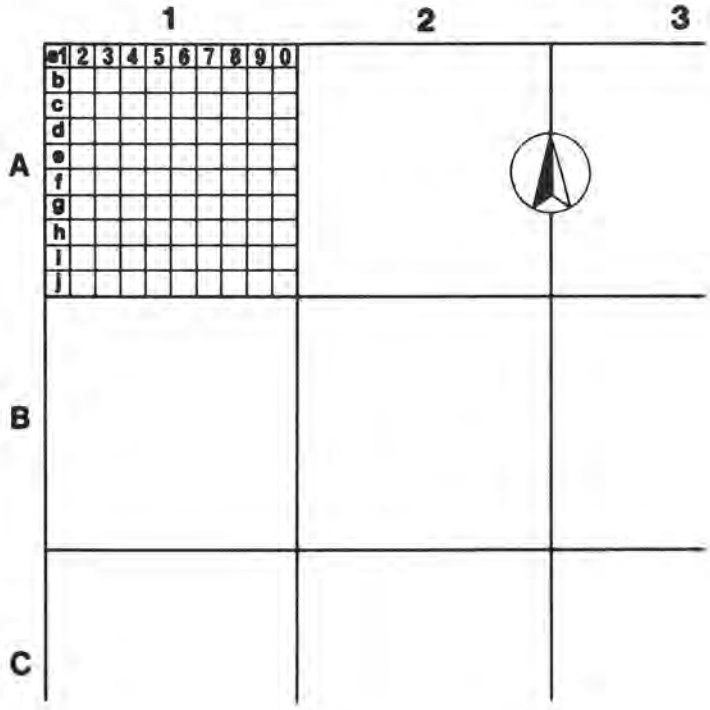
第1節　調査方法と遺構・遺物の記載方法

1　地区設定

山崎遺跡の発掘調査を実施するに当たり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は，日本平面直角座標第IX系，X軸（南北）・Y軸（東西）を基準点として，40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区（大グリッド）とした。さらに，この大調査区を東西，南北に各々十等分して，4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。

調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず，大調査区の名称は，北から南へ「A」・「B」・・・，西から東へ「1」・「2」・・・とし，その組み合わせで「A1区」，「B2区」・・・のように呼称した。さらに，大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に，北から南へ「a」・「b」・・・「j」，西から東へ「$_1$」・「$_2$」・・・「$_9$」・「$_0$」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせて，「A1a_1」区・「B2b_2」区のように呼称した（第4図）。



第4図　呼称方法概念図

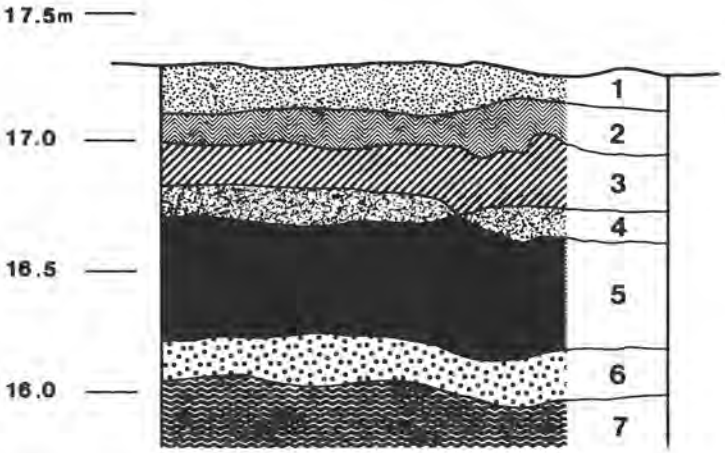
基準点の座標は，次のとおりである。

山崎遺跡　　（B4a_1）　X軸（南北）＋67,160m，Y軸（東西）＋75,520m

2　基本層序の検討

山崎遺跡においては，調査A地区中央部B3e_3区にテストピットを設定し，第5図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は黒褐色の耕作土であり，厚さは10～20cmである。第2層は褐色のソフトローム層への漸移層であり，厚さは10～20cmである。第3層は褐色のソフトローム層であり，厚さは20～30cmである。第4層は鈍黄褐色のローム層であ



第5図　基本土層図

り，鹿沼浮石を含み，厚さは10～15cmである。第５層は褐色のローム層であり，白色の砂粒と小礫を少量含み，厚さは40～50cmである。第６層は明黄褐色であり，小礫を少量含み，厚さは15～25cmである。第７層は鈍黄褐色層であり，礫を多量に含み，厚さは15～20cmである。

山崎遺跡の遺構は，表土下10～20cmの第２層上面から確認されている。

3　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は，以下のとおりである。

(1)　使用記号

遺構	住居跡－ＳＩ	土　坑－ＳＫ	堀－ＳＤ	道 路 跡－ＳＦ
遺物	土　器－Ｐ	土製品－ＤＰ	石器－Ｑ	金属製品－Ｍ

(2)　遺構及び遺物の実測図中の表示

(3)　土層の分類

土層観察における色相の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄　日本色研事業株式会社）を使用した。

(4)　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

①　山崎遺跡の遺跡全体図は縮尺400分の１，遺構図は縮尺60分の１にした。

②　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，Ｓ＝１/２等と表示した。

(5)　出土遺物観察表の計測値

計測値は，Ａ・・・口径，Ｂ・・・器高，Ｃ・・・底径，Ｄ・・・高台径，Ｅ・・・高台高とし，（　）は現存値，〔　〕は復元推定値を表す。

第２節　遺跡の概要

山崎遺跡は，日立市本宮町の太平洋に面する標高約20mの台地上に位置し，台地の東側は高さ約14mの海蝕崖となり，南側と北側には小さな谷が入り込んでいる。現況は，山林，畑，荒地で，調査区は２地区（Ａ地区・Ｂ地区）に分かれ，面積は，1,482㎡である。

今回の調査によって確認された遺構は，古墳時代後期の竪穴住居跡３軒，竪穴状遺構１軒，中世の堀３条，道路跡１条，及び時期不明の土坑14基である。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に14箱出土している。古墳時代の遺物は，土師器の甕，甑，坏及びその破片，須恵器の破片が出土している。中世の遺物は，土師質土器，陶磁器片，鉄滓が出土している。

第3節　遺構と遺物

1　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代では，A地区から竪穴住居跡と竪穴状遺構が確認されている。

(1)　竪穴住居跡

確認された竪穴住居跡は，3軒である。住居跡の規模については，すべての住居跡に削平された部分があったり，調査エリア外へ延びるために，確認できなかった。

第1号住居跡（第6・7図）

位置　B3h_2区。

重複関係　本跡は，第3・4・5・18号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.40m，短軸（5.70）mの方形と推定される。

主軸方向　N－58°－W。

壁　壁高は22cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いて硬く締まっている。南東壁寄りに梯子ピット（P_4）が確認された。

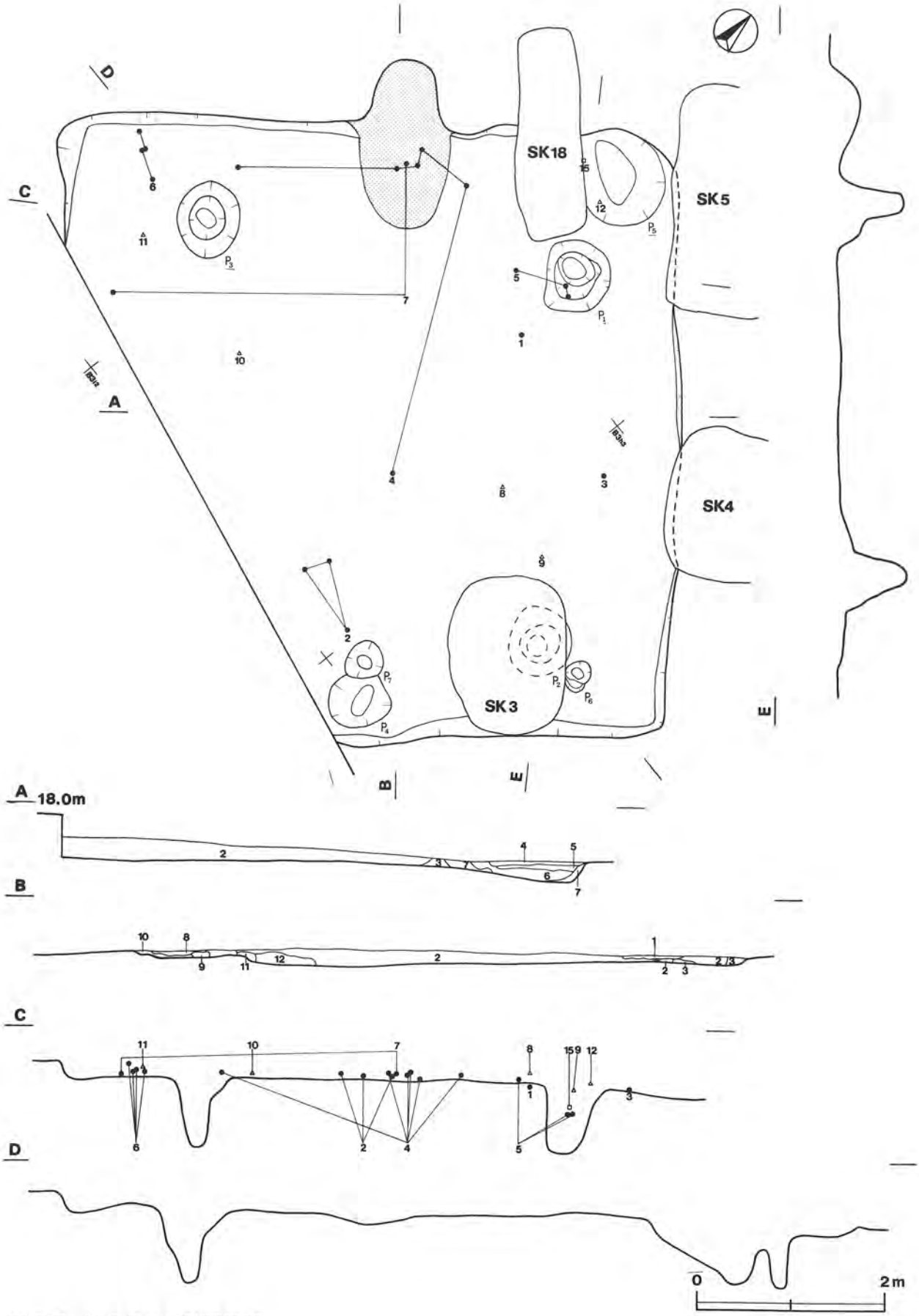
ピット　7か所。P_1は，長軸75cm,短軸65cmのほぼ隅丸長方形で，深さは68cm，P_2は長径85cm，短径68cmの楕円形で深さは70cm，P_3は，長径85cm，短径65cmの楕円形で，深さは75cmである。これらP_1～P_3は，主柱穴と考えられる。P_4は，長軸64cm，短軸54cm，深さは30cmで，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_5～P_7の性格は不明である。

竈　北西壁中央部を約70cm壁外に掘り込み，粘土で構築されている。規模は，長さ180cm，幅100cmで，天井部は崩落している。袖部は，凝灰岩の切石を芯材として構築され，切石を立てるための掘方が確認できた。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子，粘土ブロック，粘土粒子が堆積している。火床は，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から外傾して立ち上がっている。

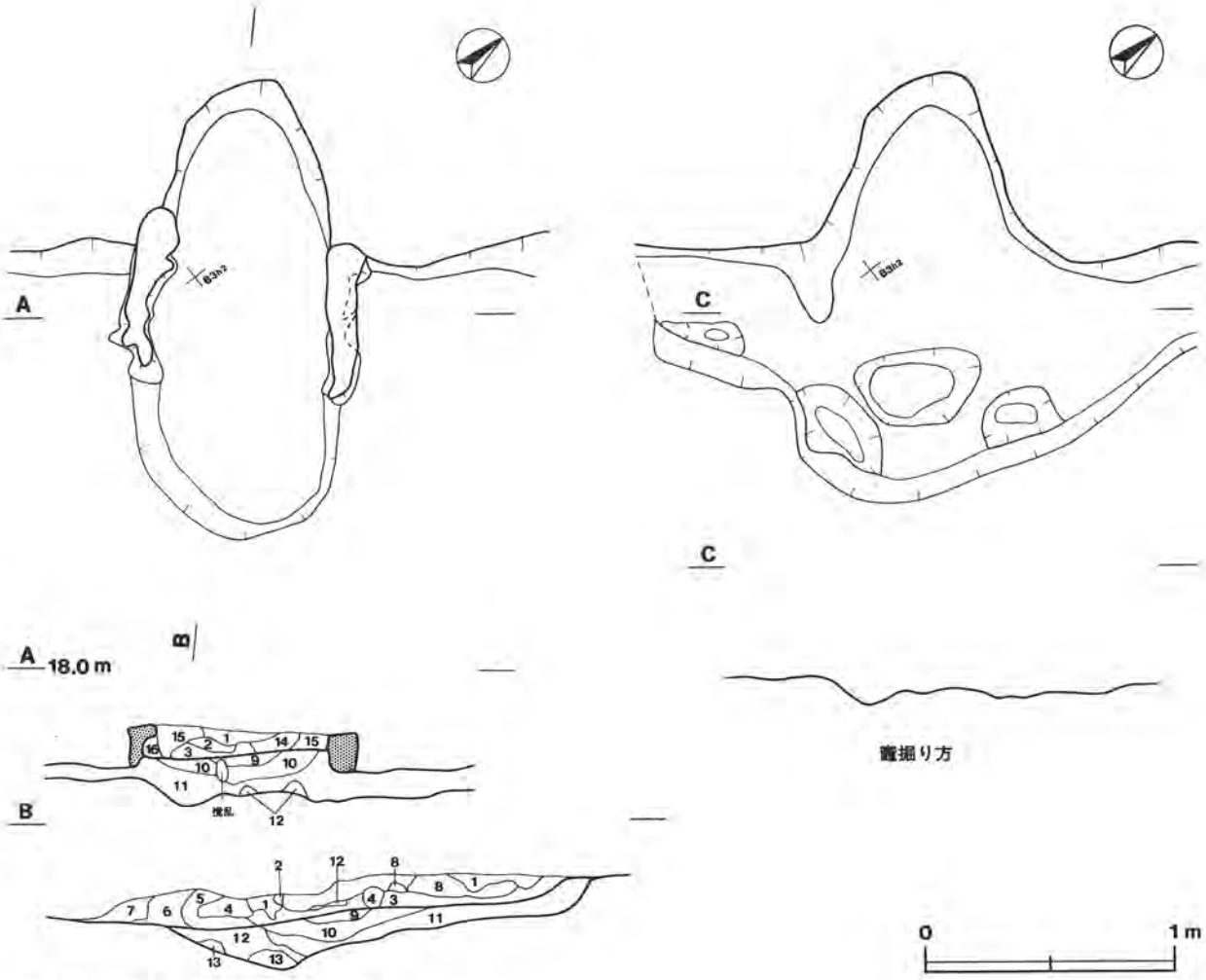
竈土層解説

1層	赤褐色	焼土大・中・小ブロック少量，粒子中量。炭化物少量，粒子中量。ローム粒子中量。
2層	明赤褐色	焼土大ブロック多量。
3層	赤褐色	焼土大・中・小ブロック・粒子多量。
4層	暗赤褐色	焼土大・中・小ブロック・粒子多量。灰白色の灰中量。
5層	褐色	焼土大・中ブロック少量，小ブロック・粒子中量。ローム粒子中量。粘土粒子少量。
6層	暗褐色	焼土中ブロック少量，小ブロック・粒子中量。炭化粒子中量。ローム小ブロック中量，粒子多量。粘土粒子中量。
7層	暗褐色	焼土中ブロック少量，小ブロック・粒子中量。炭化粒子中量。ローム小ブロック中量，粒子多量。粘土ブロック中量。
8層	暗赤褐色	焼土大・中・小ブロック・粒子多量。炭化物・粒子少量。ローム粒子少量。
9層	赤褐色	焼土大ブロック少量，中ブロック中量，小ブロック・粒子多量。ローム粒子少量。
10層	赤褐色	焼土大・中・小ブロック多量。ローム粒子少量。粘土粒子少量。
11層	褐色	焼土大ブロック少量，粒子中量。ローム粒子多量。
12層	褐色	焼土大ブロック少量，中・小ブロック・粒子中量。炭化物中量。ローム大ブロック・粒子少量。粘土小ブロック少量。
13層	明褐色	焼土大ブロック少量，中・小ブロック・粒子中量。
14層	赤褐色	焼土大ブロック少量，中・小ブロック中量，粒子多量。炭化物少量。
15層	にぶい赤褐色	焼土大ブロック中量，中・小ブロック・粒子多量。炭化物少量。粘土小ブロック少量。
16層	赤褐色	焼土中・小ブロック少量，粒子多量。炭化物少量。粘土粒子中量。

覆土　12層からなり，自然堆積と思われる。第1・2・4層は暗褐色土で，焼土粒子，炭化物，ローム小ブロックを少量含む層であり，特に第4層は焼土中・小ブロック及び粒子を多量に含んでいる。11層は，焼土中ブロック少量，小ブロック少量，ローム小ブロック中量含み，白色砂粒及び粘土粒子を多量に含むにぶい黄褐色土である。その他の層はすべて褐色土である。3・5・6・7層は，ローム中・小ブロック及び粒子を多量に含み，特に6層は，焼土中・小ブロックを中量，粒子を多量含んだ層である。8層は，焼土小ブロック及び粒子を中量含み，炭化物及び粒子を少量含み，ローム小ブロックを中量，粒子を多量含み，白色砂粒を含む層である。9層は，



第6図　第1号住居跡実測図

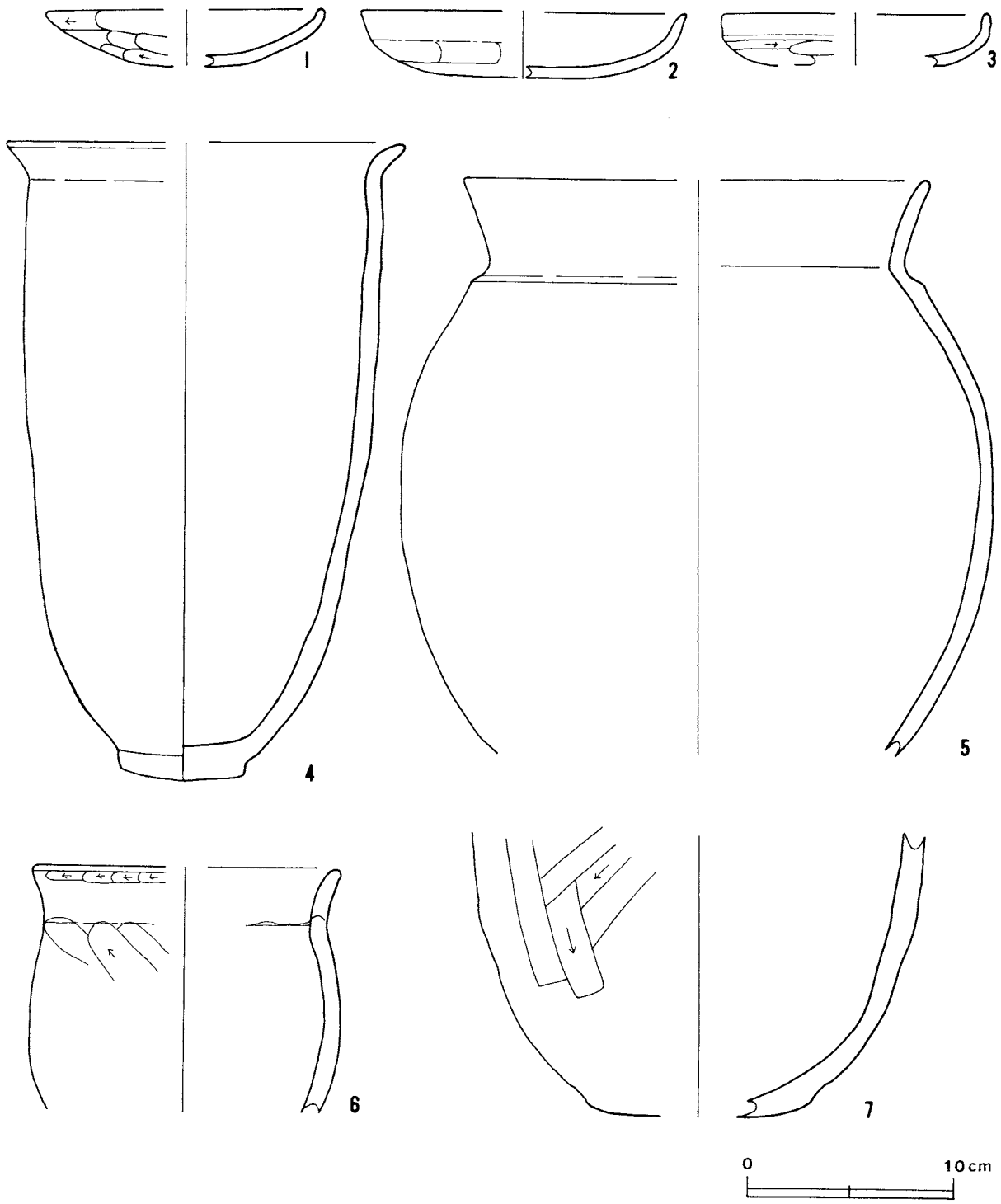


第７図　第１号住居跡竈実測図

焼土小ブロックを中量及び粒子を多量含み，ローム粒子及び粘土粒子を中量含む層である。10層は焼土小ブロックを中量，焼土粒子を多量に含み，炭化物及び粒子，ローム粒子を中量含む層である。12層は，焼土中ブロックを中量，小ブロック及び粒子を多量含み，炭化物及び粒子を中量含み，ローム小ブロックを中量，粒子を多量含み，白色砂粒及び粘土を中量含む層である。遺物は主に中層及び２層から出土している。

遺物　土師器片及び礫が住居跡のほぼ全域から出土している。１の坏は，中央部の覆土下層から出土している。４の甕は，破片が住居跡の中央部・北西壁付近及び竈の内・周辺の中層から下層にかけての覆土から出土している。５の甕は，破片が北コーナー近くの覆土下層及びP_1の覆土中から出土している。７の甕は，破片が西コーナー近くの覆土下層及び竈内から出土している。８，９，12の磨石及び15の鉄製品は床面から出土している。本跡の覆土からは，300個弱の大・小礫が出土している。そのうちの63個（850g）は半花崗岩礫であり，地元産ではなく搬入されたものと思われるが，製品化されたものではなく，使用目的等は不明である。

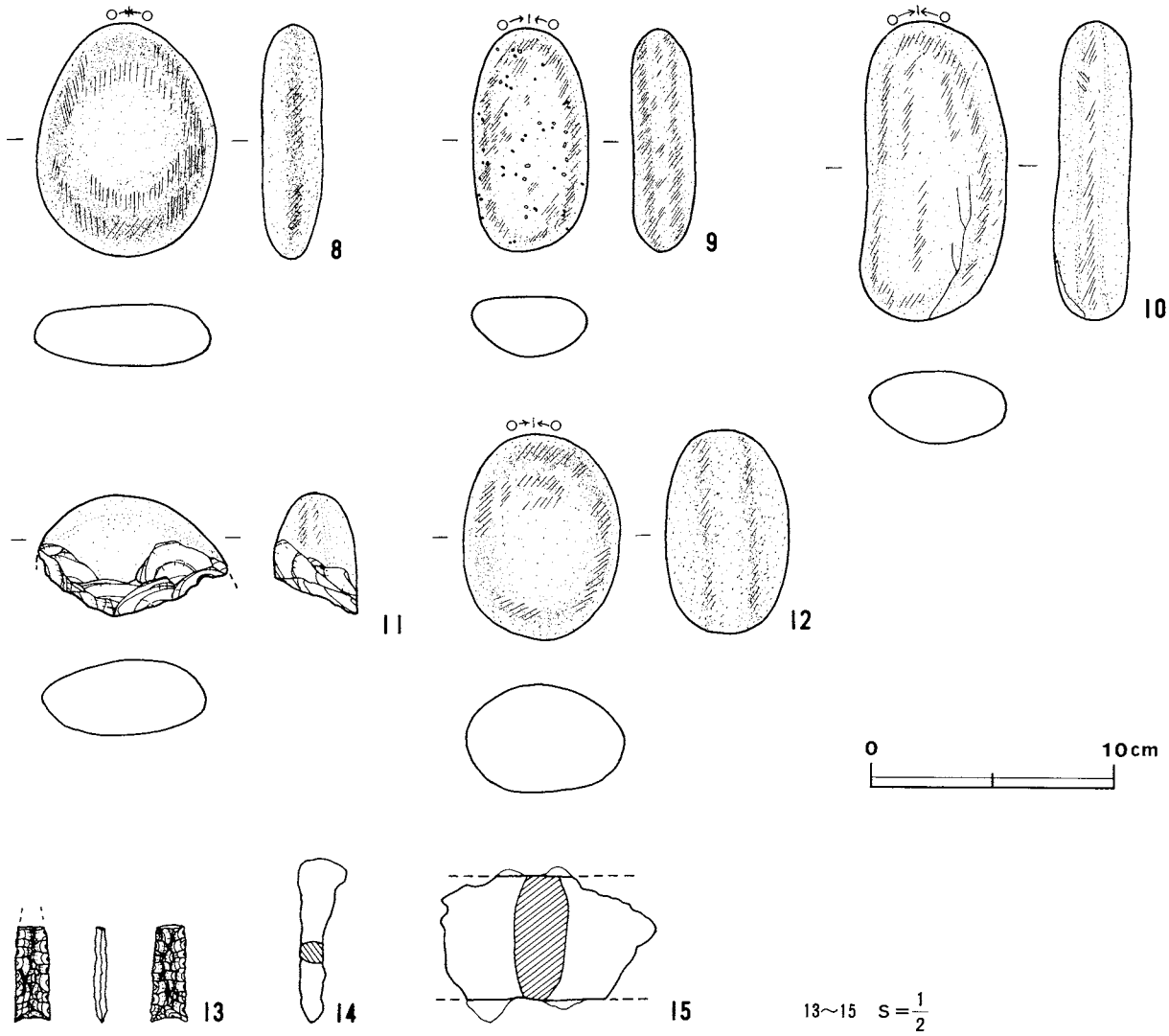
所見　本跡は，出土遺物から古墳時代後期（７世紀前半）のものと考えられる。



第８図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値 (cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第８図 1	坏 土 師 器	A〔13.2〕 B（ 2.7）	底部及び体部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は僅かに外傾する。	口縁部ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	Ｐ１ 70% 中央部覆土下層
2	坏 土 師 器	A〔15.4〕 B（ 2.2）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石 黒褐色 普通	Ｐ２ 30% 南東壁付近覆土下層



第9図　第1号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器　種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第8図 3	坏 土師器	A〔12.6〕 B（2.5）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 3 15% 北東壁付近覆土下層
4	甕 土師器	A〔19.2〕 B 35.0 C 5.8	口縁部及び体部一部欠損。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がり，上位はほぼ直立する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 灰褐色 普通	P 4 70% 竈内及び竈周辺の覆土中層～下層
5	甕 土師器	A〔22.2〕 B〔27.6〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部に稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部及び体部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P 5　25% 北コーナー付近覆土下層及びP_1覆土中
6	甕 土師器	A〔14.3〕 B（11.8）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部は弱く括れる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部及び体部外面ヘラ削り，ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P 6　10% 西コーナー際覆土上層～下層
7	甕 土師器	B（13.5） C〔10.4〕	底部から体部にかけての破片。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面及び底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 7　15% 西コーナー付近覆土下層及び竈内

図版番号	器　種	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
8	磨　石	9.8	7.4	2.6	267.9	凝灰岩	中央部床面	Q 1
9	磨　石	9.3	4.8	2.7	173.9	安山岩	北東壁寄り床面	Q 2
10	磨　石	12.5	6.1	3.1	365.1	凝灰岩	中央部覆土下層	Q 3
11	磨　石	(5.1)	(7.9)	3.2	(141.7)	安山岩	西コーナー付近覆土下層	Q 4
12	磨　石	8.6	6.5	5.0	414.9	凝灰岩	北コーナー付近床面	Q 5
13	石　鏃	(2.6)	1.0	0.4	(1.1)	頁　岩	南西コーナー付近覆土中	Q 6

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
14	釘	(4.5)	1.3	0.6	(6.6)	覆土中	M 2
15	不明鉄製品	(5.9)	(3.6)	1.5	(43.3)	北コーナー際床面	M 1

第2号住居跡（第10図）

位置　B3f_3区。

規模　長軸（4.20）m，短軸（2.00）m。

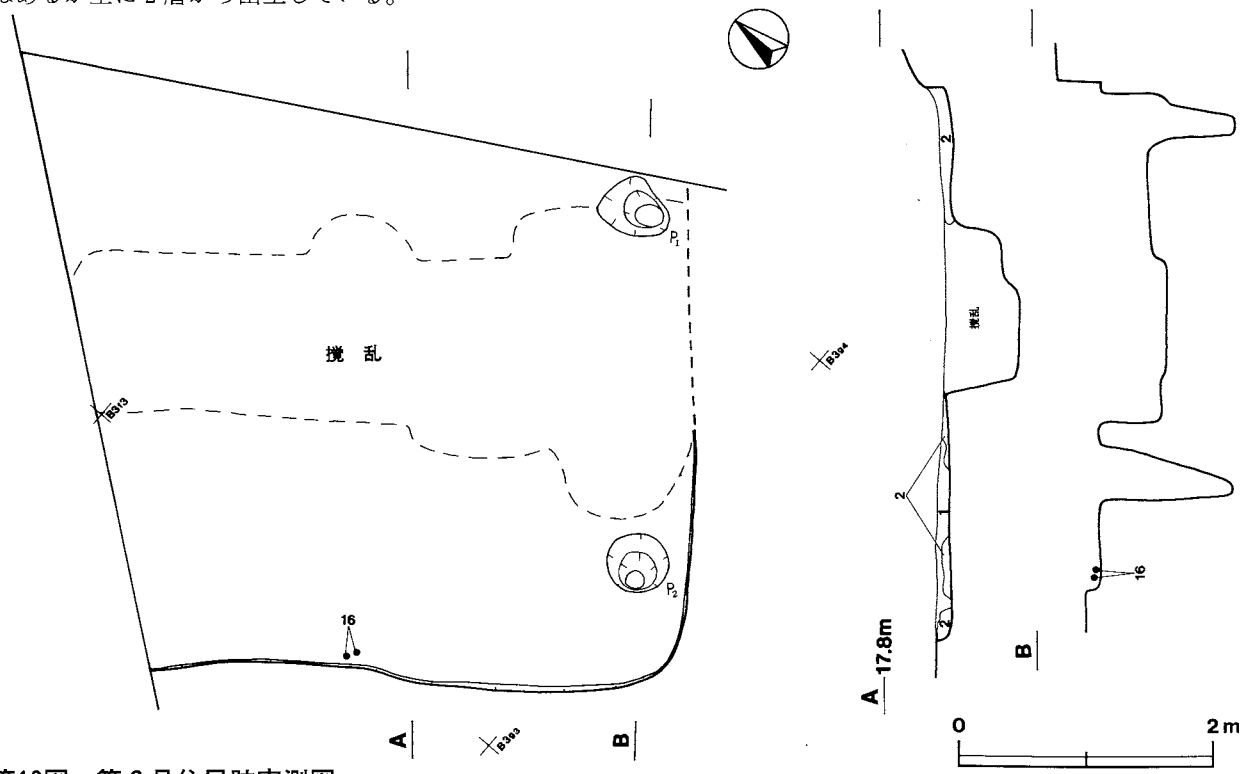
主軸方向　[N－40°－W]。

壁　壁高は12cmでほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，踏み固められた面はみられない。中央部は，耕作等による撹乱を受けている。

ピット　2か所。P_1は，長径60cm，短径45cmの不正円形で，深さは105cm，P_2は長径48cm，短径45cmの円形で，深さは105cmである。これらP_1，P_2は，主柱穴と考えられる。

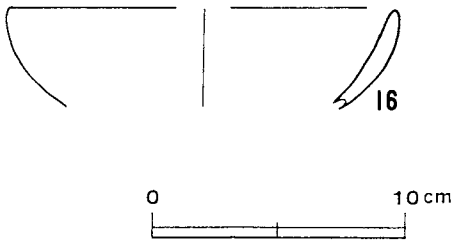
覆土　2層からなり，自然に堆積したものと思われる。1層は，焼土粒子，炭化粒子，ローム中ブロックを少量含み，ローム小ブロックを中量，ローム粒子を多量に含み，黒色土粒子を少量含む褐色土である。2層は，ローム大・中・小ブロック及び粒子を多量に含み，焼土粒子及び炭化粒子を微量含む黄褐色土である。遺物は少量ではあるが主に2層から出土している。



第10図　第2号住居跡実測図

遺物　土師器の破片を中心に少量出土している。16は南西壁際の覆土下層から破片の状態で出土している。本跡の覆土からは，100個余りの大・小礫が出土している。そのうちの13個（280g）が，半花崗岩であり，製品化されていない。

所見　本跡は，出土遺物から古墳時代後期（7世紀前半）のものと考えられる。



第11図　第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 16	坏 土師器	A〔15.1〕 B（4.0）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 明褐色 普通	P8 20% 南西壁際覆土下層

第3号住居跡（第12図）

位置　B3d_0区。

規模　長軸（3.62）m，短軸（4.35）m。

主軸方向　［N－25°－W］。

壁　壁高は30cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，踏み固められた面はみられない。南東部は，削平されている。

ピット　3か所。P_1は，直径20cmの円形で，深さは38cm，P_2は長径18cm，短径15cmの楕円形で，深さは65cm，P_3は，直径18cmの円形で，深さは37cmである。これらP_1～P_3の性格は不明である。

竈　北西壁中央部を約30cm壁外に掘り込み，粘土で構築されている。規模は，長さ122cm，幅118cmで，天井部は崩落している。袖部は，凝灰岩の切石が芯材とされ，切石を立てた掘り方を確認した。燃焼部には，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子，粘土ブロックが堆積している。火床は，床面を12cm掘り窪めており，熱をうけて赤変硬化している。煙道は火床から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1層　赤　色　焼土と灰白色の粘土が縞状に堆積。
2層　赤　褐　色　焼土大・中・小ブロック・粒子多量。炭化物中量。
3層　褐　色　焼土大・中ブロック中量，小ブロック多量。炭化物中量。小礫少量。
4層　明黄褐色　焼土小ブロック少量。小礫少量。
5層　褐　色　焼土小ブロック多量。炭化物中量。
6層　にぶい黄褐色　焼土粒子，炭化物，ローム中ブロック少量。
7層　褐　色　焼土粒子微量。炭化物少量。
8層　黒　褐　色　焼土中ブロック少量。炭化物多量。
9層　黒　褐　色　焼土大ブロック，炭化物多量。
10層　にぶい黄色　炭化物微量。小礫少量。
11層　暗　褐　色　焼土中・小ブロック中量，粒子多量。粘土ブロック少量。

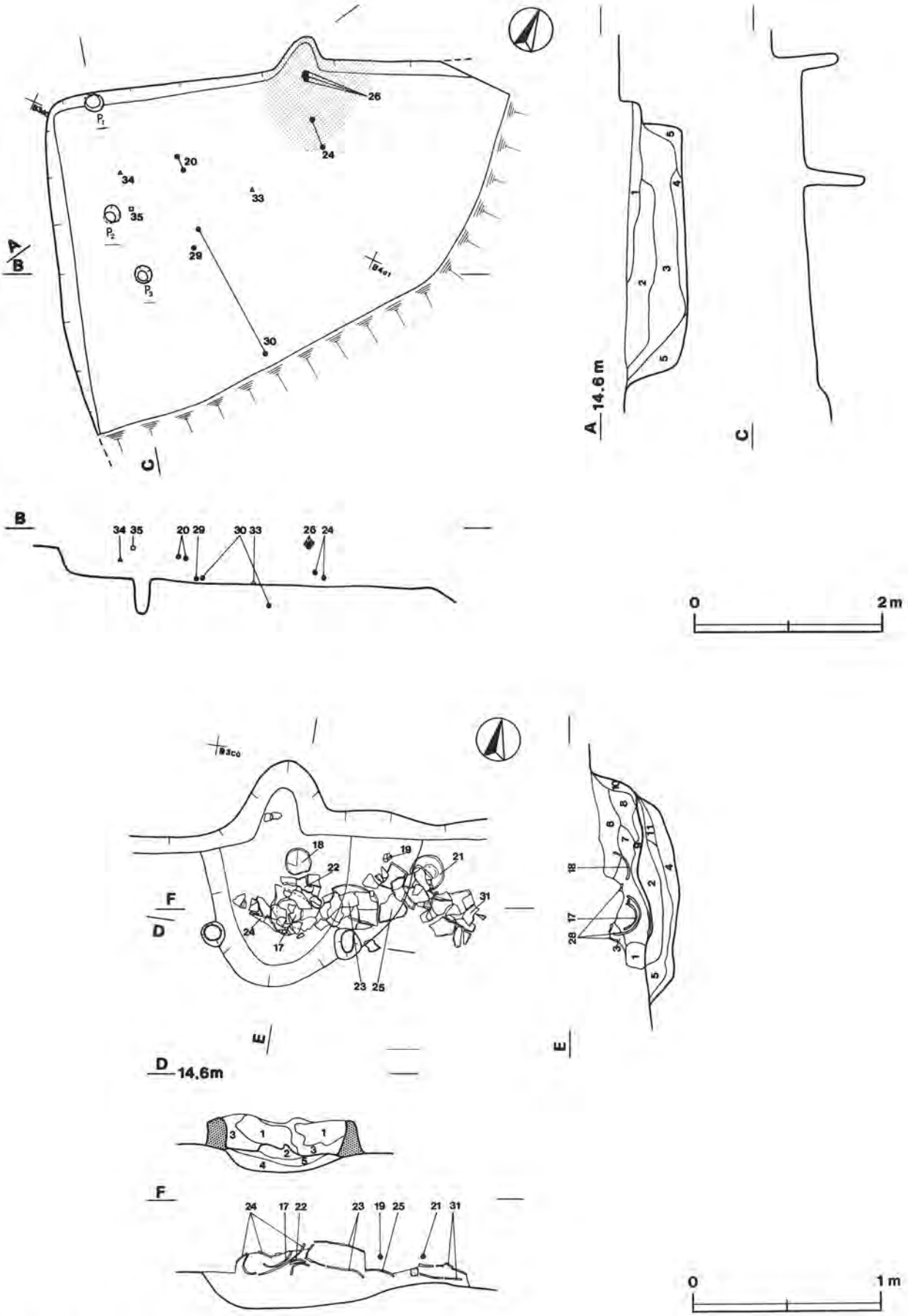
覆土　5層からなり，自然に堆積したものと思われる。1層は，焼土粒子を微量，炭化物を少量，ロームの中・小ブロック及び粒子を多量に含む暗褐色土であり，粘性及びしまりともに強い層である。2層は，焼土の小ブロック及び粒子を少量，炭化粒子を中量，ロームの大ブロックを少量及び小ブロック・粒子を多量に含む褐色土である。3層は，焼土の中ブロック及び粒子を少量，炭化物を中量及び粒子を多量含み，ロームの大ブロックを少量，小ブロックを中量，粒子を多量に含み，小礫を少量含むにぶい黄褐色である。4層は，炭化物を少量，ローム粒子を多量，小礫及び粘土中ブロックを少量含む褐色土で，粘性及びしまりともに強い層である。5層は，炭化物を微量，小礫・粘土中ブロック・砂粒を少量含むにぶい黄褐色土で，粘性及びしまりともに強い層である。遺物は，床面及び各層から出土している。

遺物　竈とその周辺を中心として，多数の土師器が出土している。竈内からは，17，18の坏が正位状態で中層から，23，24の甕が横位の状態で中層から出土している。21の鉢は竈の脇の覆土上層から正位の状態で，31の甑は竈近くの覆土下層から横位の潰れた状態で出土している。33の磨石は竈近くの覆土下層から，34の磨石は北西壁近くの覆土中層から出土している。本跡の覆土からは，100個余りの大・小礫が出土している。そのうちの4個(115g）が，半花崗岩であり，製品化されていない。

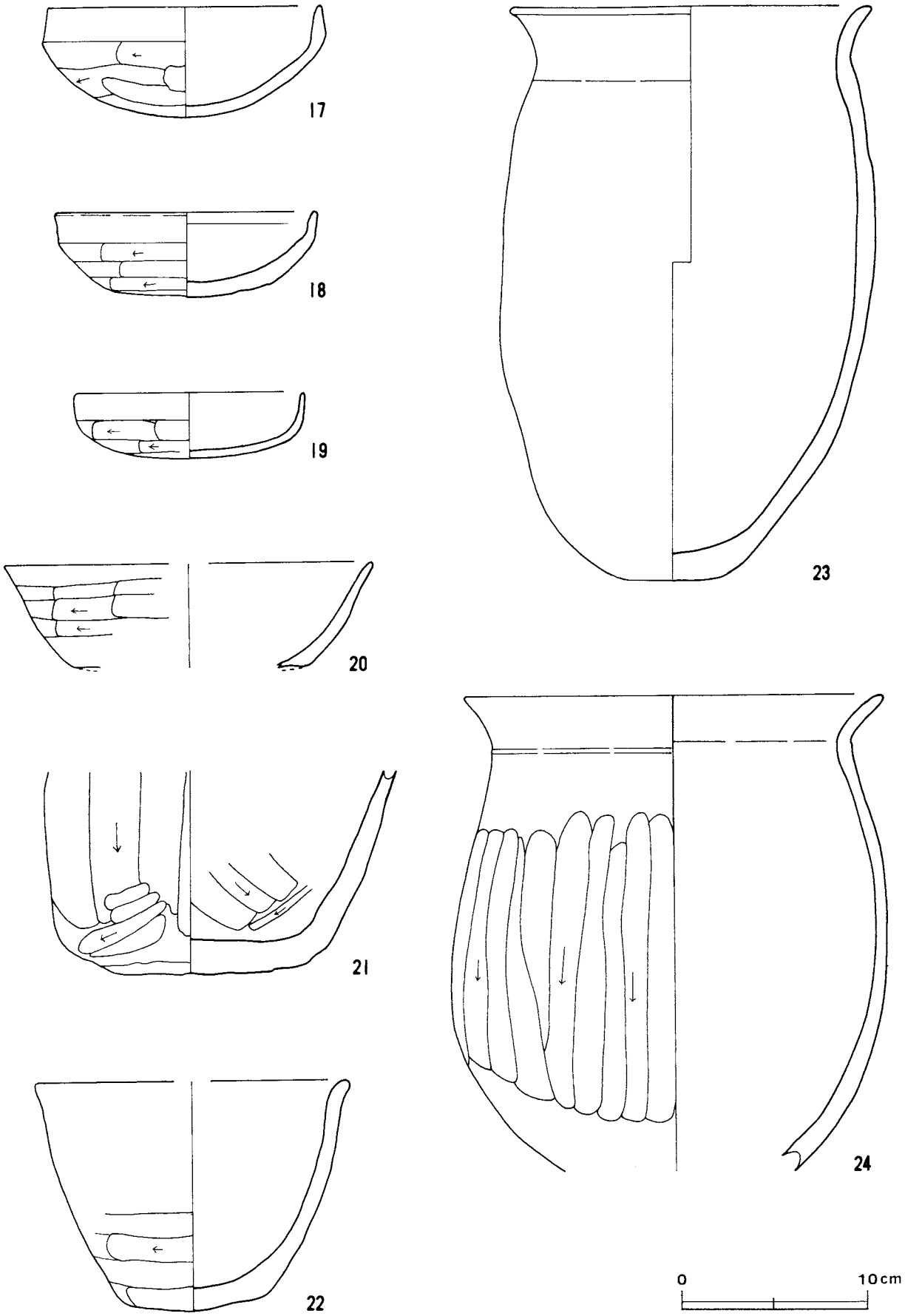
所見　本跡は，出土遺物から古墳時代後期（7世紀前半）のものと考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

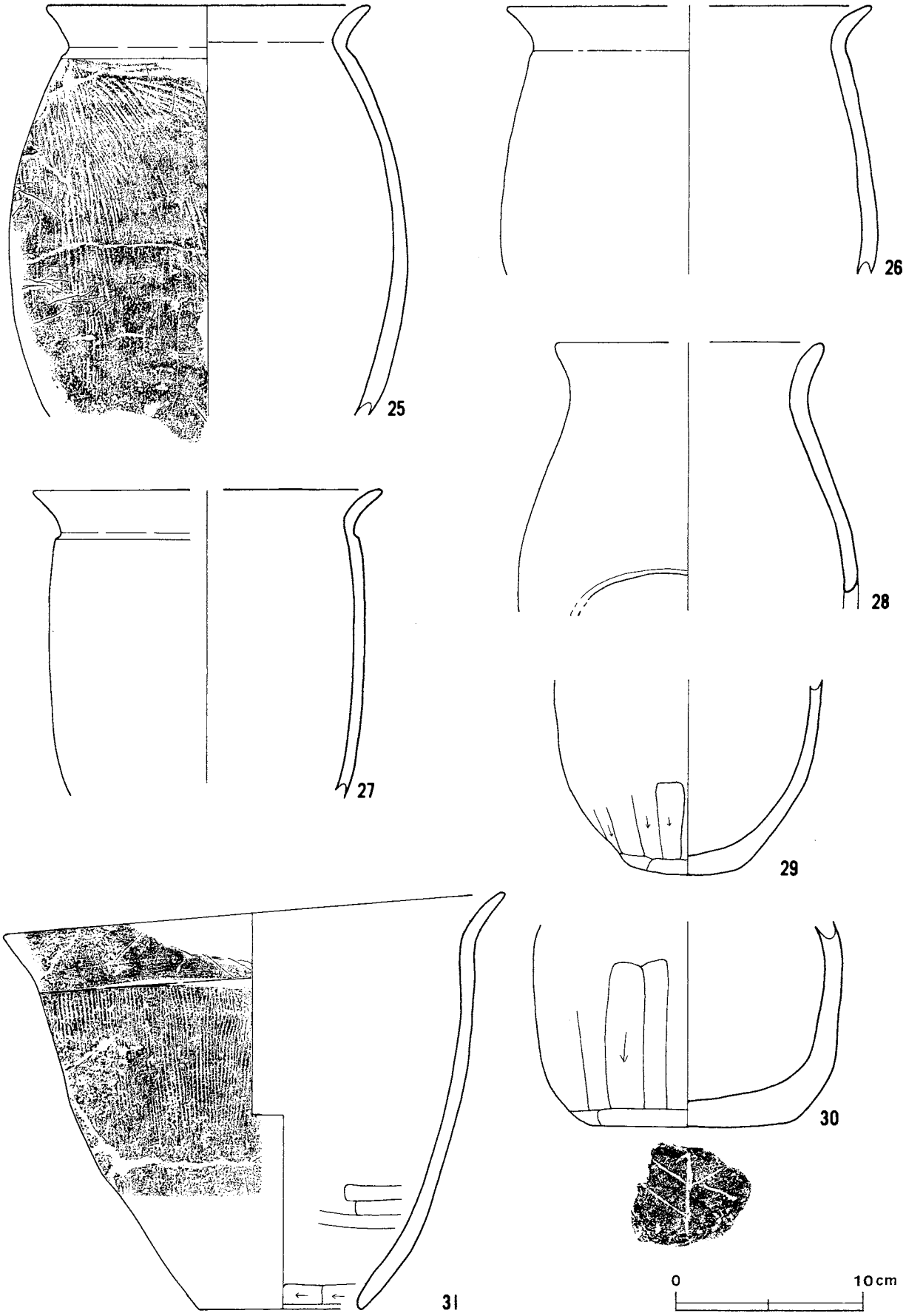
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 17	坏 土師器	A 14.7 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に僅かな稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 9 100% 竈内覆土中層
18	坏 土師器	A 13.6 B 4.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に僅かな稜をもつ。口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P10 95% 竈内覆土中層
19	坏 土師器	A 12.2 B 3.6	丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は僅かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P11 85% 竈内覆土中層
20	鉢 土師器	A〔19.6〕 B（5.5）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P12 20% 西コーナー付近 覆土上層
21	鉢 土師器	B（10.2） C 8.4	口縁部欠損。平底。体部は，外傾して立ち上がる側とほぼ直立する側とがある。	底部及び体部外面ヘラ削り後，ナデ。体部外面下端ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P19 80% 竈脇覆土上層
22	鉢 土師器	A〔16.5〕 B 12.4 C 7.6	底部から口縁部にかけての破片。平底で突出気味。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部・体部外面・底部ヘラ削り後，ナデ。体部内面ナデ。	砂粒・石英 橙色 普通	P22 20% 竈内覆土中層
23	甕 土師器	A 19.2 B 30.8 C 5.4	平底。体部は内彎して立ち上がり，上位はほぼ直立する。頸部は僅かに括れる。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。体部外面及び底面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P13 95% 竈内覆土中層
24	甕 土師器	A 22.4 B（25.4）	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり，頸部に僅かな稜をもつ。口縁部は外傾する。	体部外面縦位のヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P14 60% 竈付近覆土中層
第14図 25	甕 土師器	A〔17.0〕 B（21.9）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部に僅かな稜をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P15 30% 竈付近覆土下層
26	甕 土師器	A〔19.3〕 B（14.4）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎して立ち上がり，頸部は弱く括れる。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P16 30% 竈内覆土上層
27	甕 土師器	A〔18.6〕 B（16.6）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，頸部との境に僅かな稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部及び体部ナデ。	砂粒・雲母・長石 明褐色 普通	P17 20% 竈内覆土下層
28	甕 土師器	A〔14.0〕 B（14.3）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，円窓をもつ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部及び体部ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P18 5% 竈内覆土中層
29	甕 土師器	B（10.5） C 6.1	底部から体部にかけての破片。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面及び底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P20 20% 中央部覆土下層



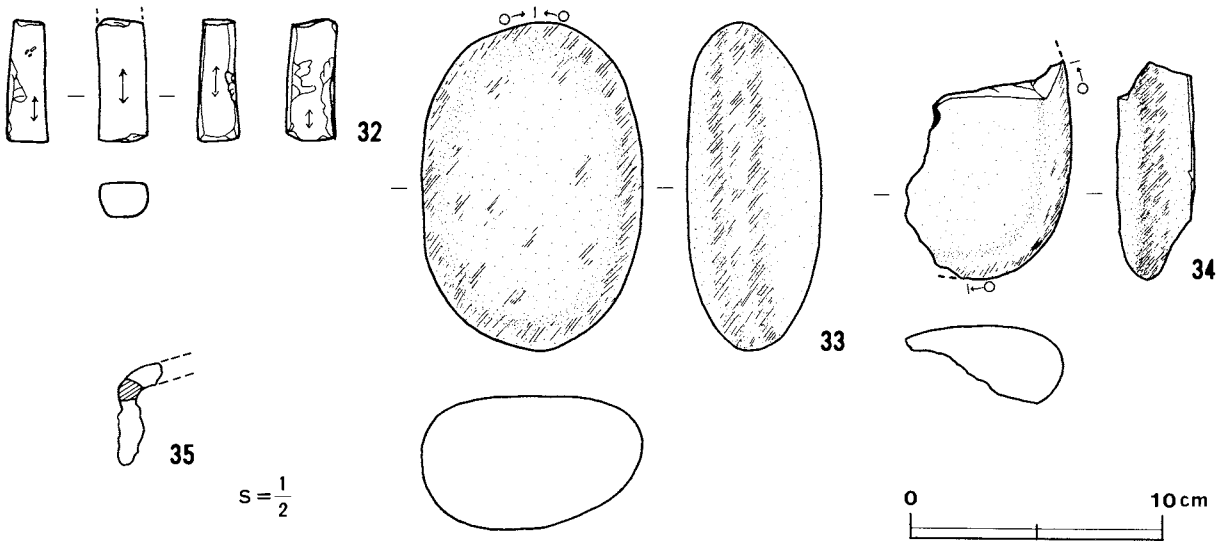
第12図　第３号住居跡実測図



第13図　第３号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図　第３号住居跡出土遺物実測図(2)



第15図　第3号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 30	甕 土師器	B (11.2) C 10.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦位ヘラ削り後，ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P21 20% 中央部覆土下層
31	甑 土師器	A 26.8 B 22.3 C 8.6	無底式。体部は僅かに内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ削り後，ナデ。体部外面ハケ目状のヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・石英・小礫 明褐色 普通	P23 95% 竈付近覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
32	砥石	(4.9)	2.1	1.7	(23.7)	砂岩	覆土中	Q 7
33	磨石	13.1	8.7	5.3	895.3	大理石	竈付近覆土下層	Q 8
34	磨石	(8.7)	(6.3)	(3.1)	(174.4)	安山岩	北西壁付近覆土中層	Q 9

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
35	不明鉄製品	(2.7)	(0.6)	(0.6)	(1.6)	北西壁際覆土上層	M 3

表2　山崎遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 (m) (長軸 × 短軸)	壁高 (cm)	床面	ピット数			貯蔵穴	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
							総数	主柱穴	入口ピット					
1	$B3n_2$	N−58°−W	[方形]	6.40 ×(5.70)	22	平坦	7	3	1	…	竈	自然	土師器，磨石	SK-3・4・5・18と重複　A地区
2	$B3f_3$	[N−40°−W]	不明	(4.20)×(2.00)	12	平坦	2	2	…	…	…	自然	土師器	A地区
3	$B3d_6$	[N−25°−W]	不明	(3.62)×(4.35)	30	平坦	3	…	…	…	竈	自然	土師器，砥石，磨石	A地区

(2)　竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第16図）

位置　$B3d_6$区。

規模　長軸（2.93）m，短軸（1.65）m。

主軸方向　[N−45°−W]。

壁　壁高は24cmで，外傾して立ち上がっている。

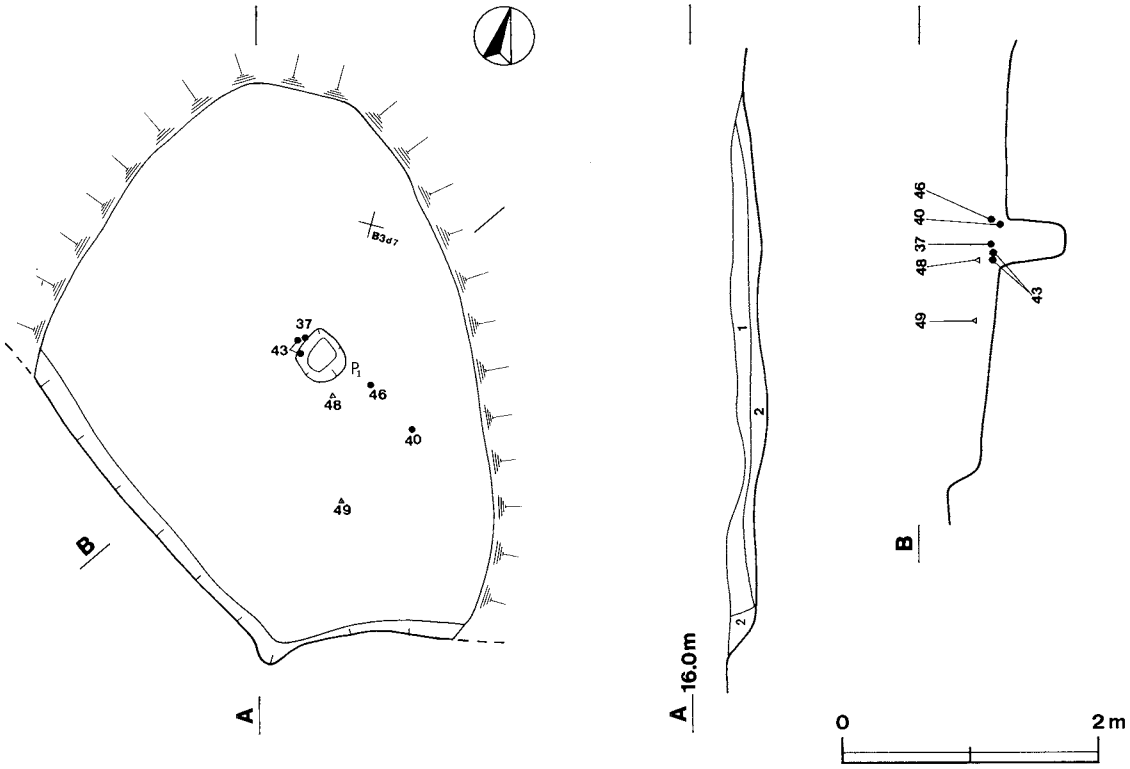
床　ほぼ平坦で，北東方向に緩やかに傾斜し，踏み固められた面はみられない。東，北，西の隅部は，削平されており，南隅部のみを残している。

ピット　1か所。P_1は，長軸40cm，短軸35cmの隅丸長方形で，深さは48cmである。性格は不明である。

覆土　2層からなり，自然に堆積したものと思われる。1層は，炭化粒子及びローム中ブロックを微量含む褐色土である。2層は，粘性が強い明褐色土である。遺物は，そのほとんどが2層から出土している。

遺物　P_1の周辺から土師器を中心に多数出土している。37，40の坏，43の甕，48の磨石は中央部の覆土下層から出土し，46の甕は中央部の覆土中層から出土している。49は中央部の南コーナー寄り覆土上層から出土している。本跡の覆土からは，21個の大・小礫が出土している。そのうちの4個（68g）は，半花崗岩で，製品化されたものではない。

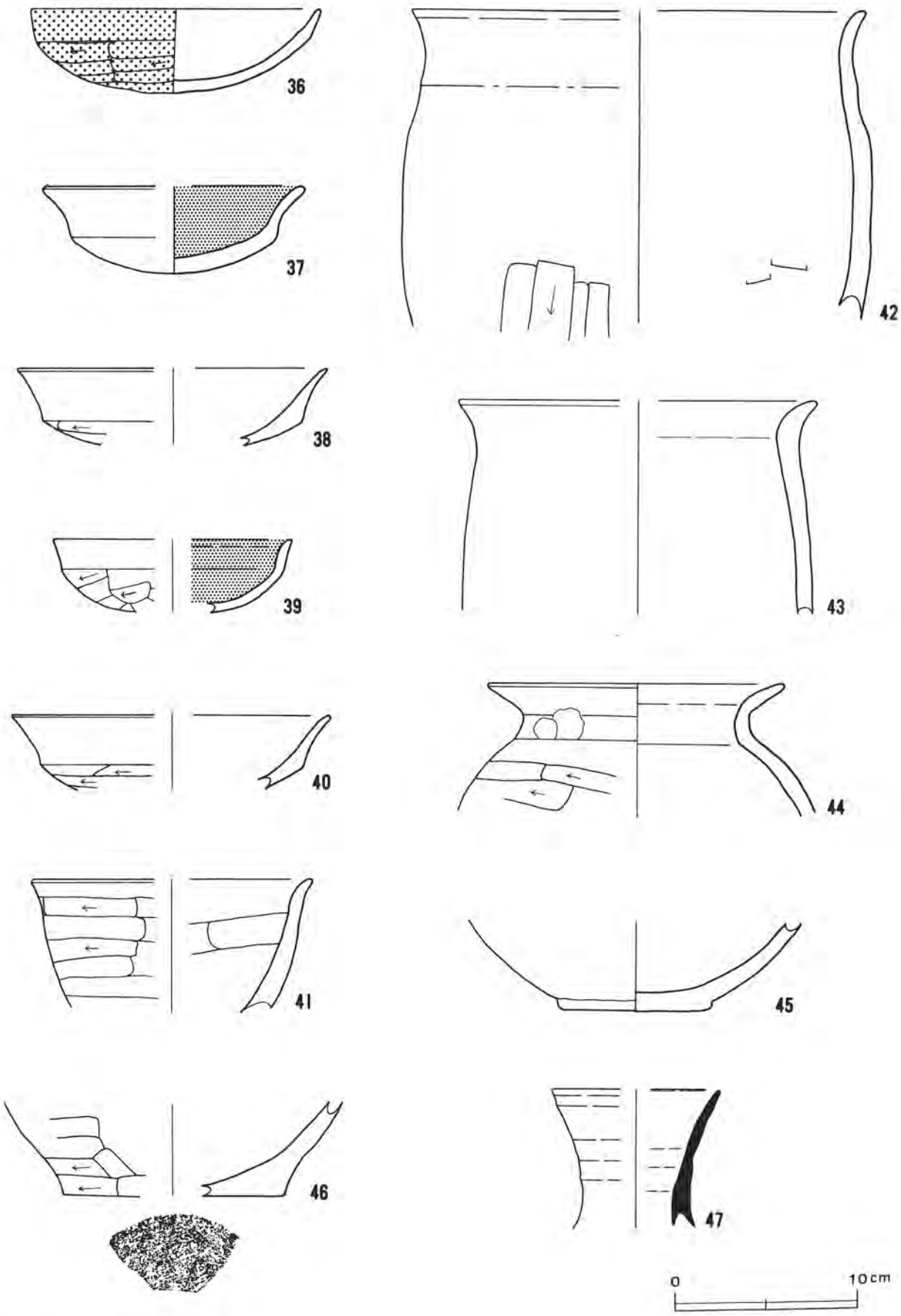
所見　本跡は，炉，竈がないので，竪穴状遺構とした。本跡は，出土遺物から古墳時代後期（6世紀後半）のものと考えられる。



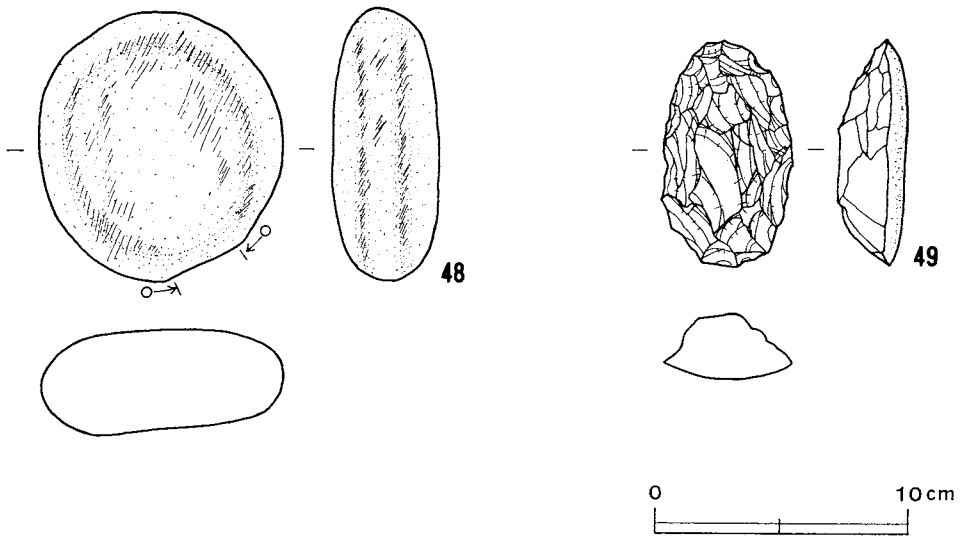
第16図　第1号竪穴状遺構実測図

第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第17図 36	坏 土師器	A　15.3 B　4.7	体部及び口縁部の一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。体部外面赤彩。	砂粒・雲母・長石・石英 明赤褐色 普通	P24 70% 覆土中
37	坏 土師器	A〔13.6〕 B　4.8	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P25 20% 中央部覆土下層
38	坏 土師器	A〔16.6〕 B（4.2）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P26 20% 覆土中
39	坏 土師器	A〔12.7〕 B（3.9）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 灰黄褐色 普通	P27 20% 覆土中



第17図　第１号竪穴状遺構出土遺物実測図(1)



第18図　第１号竪穴状遺構出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 40	坏 土師器	A〔17.0〕 B（4.0）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	P28 20% 中央部覆土下層
41	埦 土師器	A〔14.8〕 B（7.2）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・石英・小礫 淡赤橙色 普通	P29 30% 覆土中
42	甕 土師器	A〔24.4〕 B（17.1）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。頸部は弱く括れ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P30 25% 覆土中
43	甕 土師器	A〔18.8〕 B（11.5）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。頸部は弱く括れ，口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。体部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P31 25% 中央部覆土下層
44	甕 土師器	A 15.8 B（7.1）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，頸部に至る。口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。頸部外面に指頭痕。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・小礫 明赤褐色 普通	P32 15% 覆土中
45	甕 土師器	B（4.8） C 8.2	底部から体部にかけての破片。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P33 15% 覆土中
46	甕 土師器	B（5.1） C〔11.8〕	底部から体部にかけての破片。平底で突出している。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面及び底部ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 褐色 普通	P34 10% 中央部覆土中層
47	長頸壺 須恵器	A〔9.0〕 B（7.5）	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は僅かに外反しながら立ち上がり，口縁部に至る。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P35 10% 覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
48	磨石	10.8	9.5	4.2	622.4	砂岩	中央部覆土下層	Q10
49	石斧	9.1	5.2	2.6	127.1	安山岩	南コーナー寄り覆土上層	Q11

表３　山崎遺跡竪穴状遺構一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 (m) (長軸 × 短軸)	壁高 (cm)	床面	ピット数 総数	主柱穴	入口ピット	貯蔵穴	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
1	B3d$_6$	[N−45°−W]	不明	(2.93)×(1.16)	24	平坦	1	…	…	…	…	自然	土師器，須恵器，磨石	A地区

2　中世の遺構と遺物

(1)　城館跡

当遺跡A地区は，北側に小河川が流れ，東側に海がせまり，低地との比高約17mの台地上にあり，北・東の二方は自然の要害をなしている。

当遺跡からは，城館跡に伴う堀3条，道路跡1条が確認されている。

堀

第1号堀（第19図，付図1）

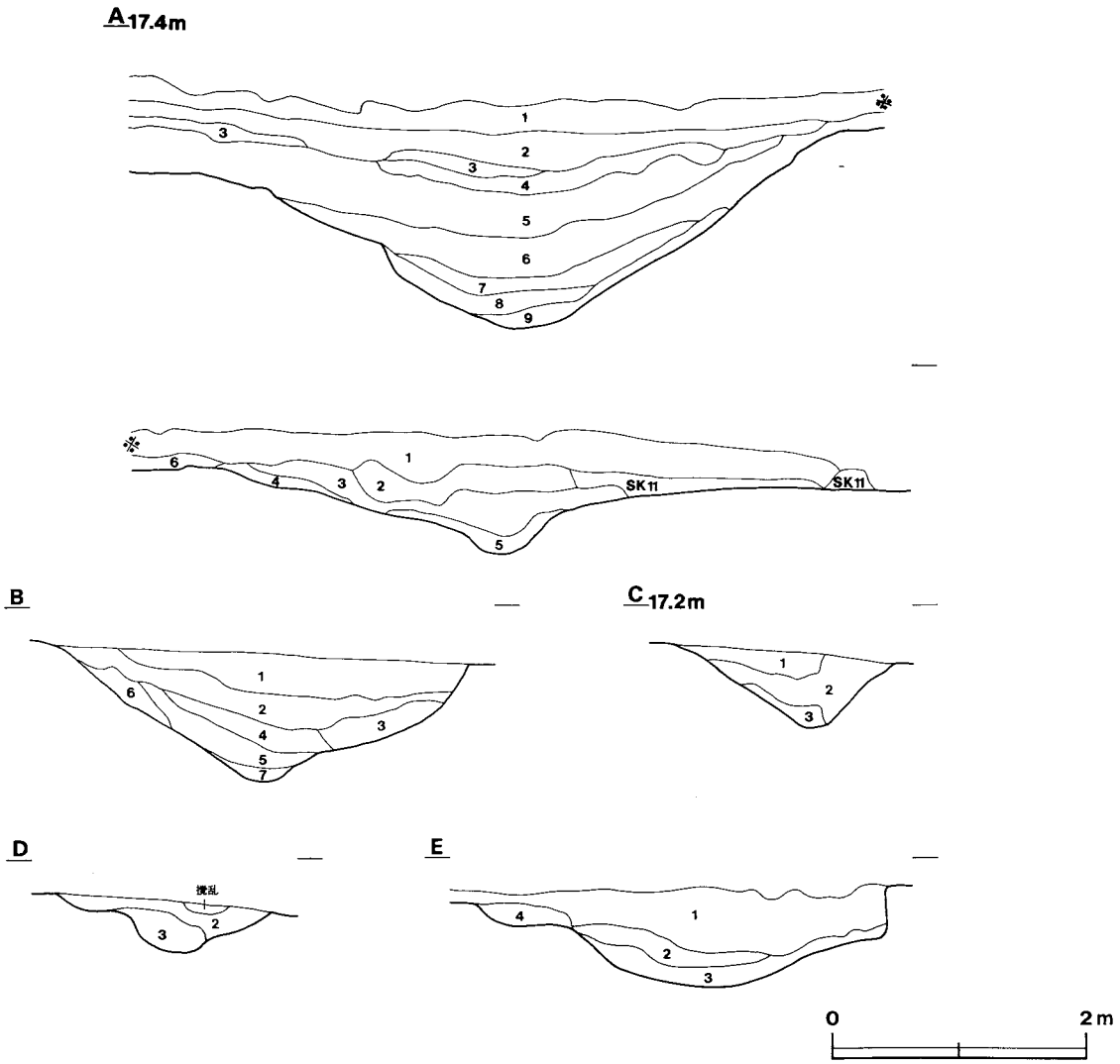
位置　A地区の南西平坦部，B$3i_5$区～C$3a_5$区。

重複関係　本跡は，第14，15，16号土坑によって掘り込まれている。

規模と形状　全長(10.60)m，発掘できた範囲で上幅5.50m～2.40m，下幅0.60m～0.26m，深さ1.82m～0.55mである。断面は，南部は皿状で，北方に進むにしたがって緩やかな薬研堀状になる。

方向　B$3i_5$区から北方向へ，緩やかに傾斜しながら延びている。

底部　小礫を密に敷き詰めた状態で，非常に硬く踏み締められている。

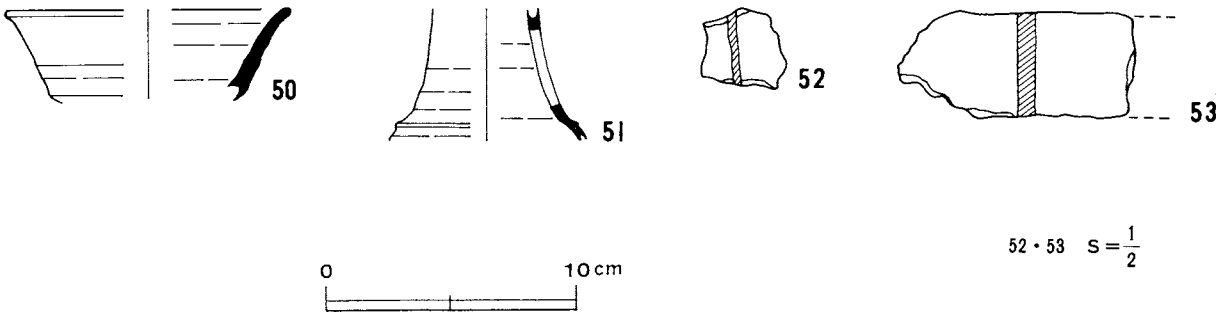


第19図　第1～3号堀土層実測図

覆土　9層からなり，8・9層の堆積の後は自然に堆積していったものと思われる。ただし，4層の形成にあたっては，何らかの人為的なものがあったものと思われる。1層は焼土粒子及びローム粒子を中量含む黒褐色土，2層は炭化物及びローム小ブロック・粒子を中量含む暗褐色土，3層はロームの大ブロックを中量，中・小ブロック及び粒子を多量に含むにぶい黄褐色土である。4層は，ローム小ブロックを中量，ローム粒子を多量に含み，踏み硬められたように強いしまりのある黒褐色土である。5層はローム小ブロック及びローム粒子を多量に含む暗褐色土，6層はローム中・小ブロック及びローム粒子を多量に含み，鹿沼層の中ブロックを少量含むにぶい黄褐色土，7層はローム粒子を中量含む暗褐色土である。8層は，ローム中・小ブロック及びローム粒子を中量含み，白色砂粒及び小礫を少量含む暗褐色土であり，粘性が強く，しまりが非常に強い層である。9層は，ローム大ブロック及び大・中・小礫を多量に含む褐色土で，粘性が強く，非常に硬化した層である。遺物は，少量ではあるが各層から出土している。

遺物　陶器の細片が2点，鉄製品が2点，その他流れ込みと思われる土師器片，須恵器片等が出土している。50の坏，51の高坏はいずれも流れ込んだものと思われる。

所見　本跡は，第2号堀の西側に位置し，北北東方向に緩やかに下っていく。また，南西方向の調査エリア外へも延びていく。本跡は，断面形から城館跡の北側に位置する竪堀の可能性がある。時期は出土遺物から中世と考えられる。



第20図　第1号堀出土遺物実測図

第1号堀出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 50	坏 須恵器	A〔11.2〕 B（3.7）	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P39 10% 覆土中
51	高坏 須恵器	B（5.3）	脚部片。脚部はラッパ状に開く。裾部は外面に1条の凸帯をもち，僅かに内下方に屈曲する。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P40 10% 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
52	不明鉄製品	(2.2)	(2.2)	0.3	(2.8)	覆土中	M5
53	不明鉄製品	(6.3)	2.8	0.6	(30.1)	覆土中	M6

第２号堀（第19図，付図１）

位置　Ａ地区の南西平坦部，Ｂ$3j_7$区～Ｃ$3a_5$区。

重複関係　本跡は，第３号堀・第11号土坑によって掘り込まれている。

規模と形状　全長（11.00）m，発掘できた範囲で上幅1.82～1.50m，下幅0.40～0.18m，深さ0.90～0.38mである。断面は，南部は皿状で，北方に進むにしたがって緩やかな薬研堀状になる。

方向　Ｂ$3j_7$区から北方向へ，緩やかに傾斜しながら延びている。

底部　小礫を密に敷き詰めた状態で，非常に硬く踏み締められている。

覆土　５層からなり，自然に堆積したものと思われるが，２層は人為的な何らかの作用によって硬化したものと思われる。遺物は少量ではあるが各層から出土している。

土層解説

1層　黒　褐　色　焼土粒子中量。炭化粒子少量。ローム大・中ブロック微量，小ブロック少量，粒子中量。

2層　暗　褐　色　焼土粒子少量。炭化物少量。ローム小ブロック少量，粒子中量。しまり強し。

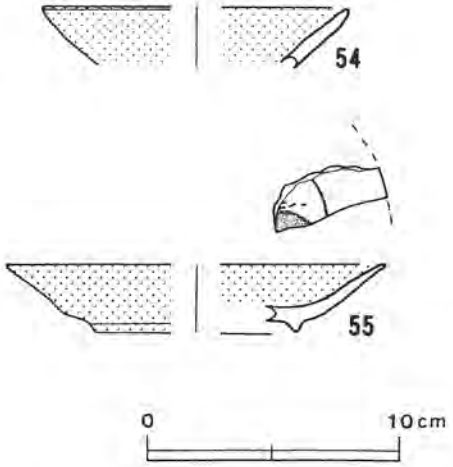
3層　暗　褐　色　炭化物少量。ローム中ブロック少量，小ブロック中量，粒子多量。

4層　褐　色　焼土小ブロック少量。ローム大ブロック少量，中ブロック中量，粒子多量。

5層　黒　褐　色　ローム小ブロック少量。白色砂粒粒子微量。小礫中量。

遺物　陶磁器片が２点，その他流れ込みと思われる土師器片，須恵器片等が出土している。54の碗，55の染付皿は，それぞれ北東部の覆土中から出土している。

所見　本跡は，第１号堀の東側に位置し，北東方向に緩やかに下り，標高15m辺りで二股に分かれる。一方は，北東に向かって下り，もう一方は，はぼ真北に向かって下っていく。本跡は，断面形から城館跡の北側に位置する竪堀の可能性がある。時期は出土遺物から中世と考えられる。



第21図　第２号堀出土遺物実測図

第２号堀出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 54	碗 陶器	A〔12.0〕 B（2.4）	口縁部片。口縁部は外傾する。	水挽き成形。釉は灰白色で，光沢がある。	長石 （胎土）灰黄色 （釉）灰白色 普通	P41 5%　瀬戸産 北東部覆土中
55	染付皿 磁器	A〔14.8〕 B（2.8） D〔8.0〕 E　0.5	底部から口縁部にかけての破片。高台部は直立し，底部は平底で，体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	全面施釉。	（胎土）灰白色 （釉）明緑灰色 良好	P42 5%　肥前産 北東部覆土中

第３号堀（第19図，付図１）

位置　Ａ地区の南西平坦部，Ｂ$3j_7$区～Ｃ$3a_5$区。

重複関係　本跡は，第２号堀を掘り込んでいる。

規模と形状　全長（0.77）m，調査エリア外へ延びていくところで，上幅3.25m，下幅1.10m，深さ0.78mである。断面は皿状である。

方向　Ｃ$3b_5$区から南東方向へ，延びていくものと思われる。

底部　小礫を敷き詰めた状態で，非常に硬く踏み締められている。

覆土　4層からなり，自然に堆積したものと思われる。

土層解説

1層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量，中ブロック少量，小ブロック中量，粒子中量。

2層　黒　褐　色　ローム粒子少量。黒色土ブロック少量。

3層　黒　褐　色　炭化粒子微量。ローム小ブロック微量。小礫中量。しまり非常に強し。

4層　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，粒子少量。

遺物　流れ込みと思われる土師器・須恵器の細片が出土している。

所見　本跡の底部の様子は，第1・2号堀と同様の構造をしている。本跡の南東方向は海の侵食により削平されているが，本跡は海岸方向へ延びていくものと思われる。本跡は，断面形から城館跡の北側に位置する竪堀の可能性がある。時期は出土遺物から中世と考えられる。

トレンチ調査

Aトレンチ（第22図，付図1）

B3e_3区～B3e_9区に，1.0mの幅で設定した。

西側谷部は，大きく開いた薬研堀状に掘り込まれ，西側斜面に対して約25度，中央頂部に対して約28度の傾斜がある。斜面の傾斜は，途中で角度を上げ，再び緩やかになって頂に向かっていく。

中央頂部は，基本的に水平に堆積していたと考えられる地山を，ほぼ垂直に掘り込んだ跡が西側と東側の両方で確認できた。したがって，この頂部は，西側と東側を削平されたために取り残される形で形成された頂であるといえる（この時に，第1号竪穴状遺構が削平されたものと思われる）。

東側谷部は，小さな凹凸を持った皿状に掘り込まれ，中央頂部に対して約32度，東側斜面に対して約30度の傾斜がある。斜面の傾斜は，西側谷部と同様に，途中で角度を上げ再び緩やかになって頂に向かっていく。

土層解説

1層　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子中量。小礫少量。

2層　褐　色　ローム大・中・小ブロック少量。小礫少量。

3層　にぶい黄褐色　ローム粒子少量。小礫少量。白色砂粒子少量。

4層　褐　色　鹿沼粒子少量。小礫少量。粘土小ブロック少量。

5層　黄　褐　色　粘土小ブロック少量。

6層　にぶい黄褐色　大礫多量。

7層　にぶい黄褐色　ローム中・小ブロック・粒子多量。小礫少量。砂粒子中量。

8層　褐　色　ローム粒子多量。中・小礫多量。砂粒子中量。鹿沼粒子少量。

9層　褐　色　炭化物少量。小礫中量。砂粒子中量。

10層　にぶい黄色　粘土中ブロック多量。

11層　にぶい黄褐色　粘土中ブロック多量。小礫中量。

12層　褐　色　炭化物少量。ローム粒子中量。

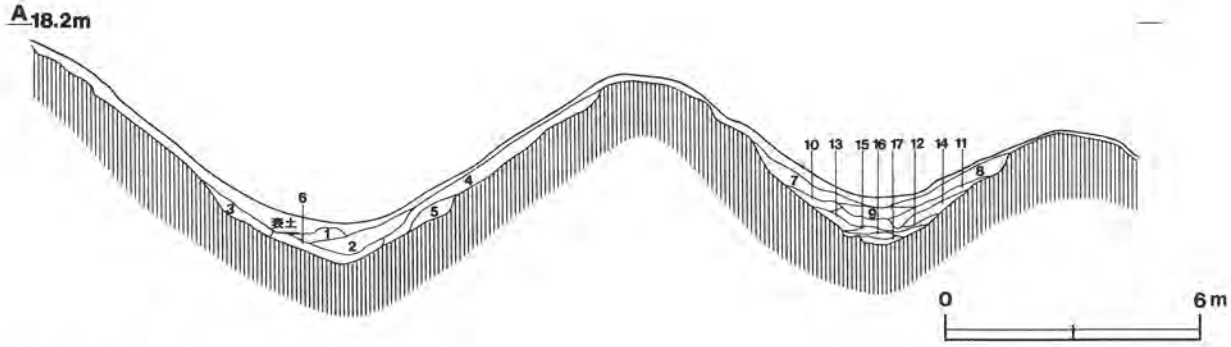
13層　褐　色　粘土粒子少量。

14層　黄　褐　色　粘土中ブロック多量。小礫中量。

15層　浅　黄　色　炭化物少量。粘土小ブロック多量。

16層　にぶい黄色　粘土中ブロック多量。小礫中量。

17層　浅　黄　色　粘土中ブロック多量。中・小礫中量。



第22図　Aトレンチ土層実測図

Bトレンチ（第23図，付図1）

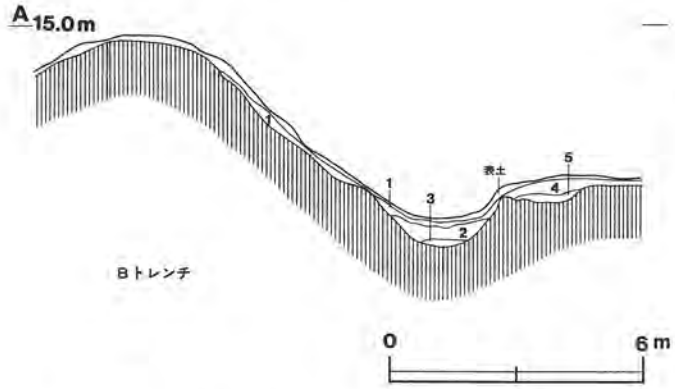
B3c_0区～B4c_3区に，1.0mの幅で設定した。

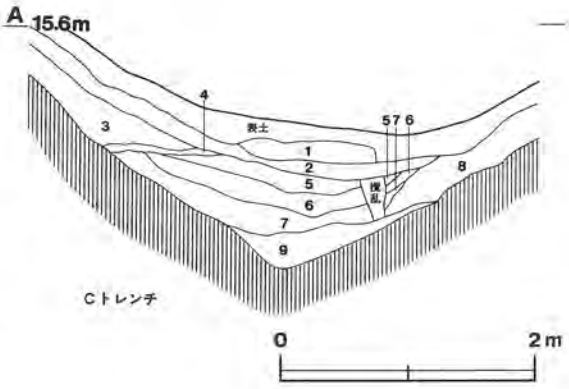
西側頂部は，基本的に水平に堆積していたと考えられる地山を，ほぼ垂直に掘り込んだ跡が東側で確認できた（西側では確認できなかった）。したがって，この時に第3号住居跡が削平されたものと思われる。

東側谷部は，皿状に掘り込まれ，西側斜面は約50度の傾斜をもち，途中で緩やかになり，再び角度を上げて西側頂部へ向かう。東側斜面は約55度の傾斜で立ち上がり，途中で凹凸をもつ緩やかな皿状の窪みをつくってエリア外へ延びていく。

土層解説

1層　暗　褐　色　ローム中ブロック微量。小礫少量。
2層　褐　　色　小礫微量。
3層　オリーブ褐色　ローム小ブロック微量。小礫少量。
4層　褐　　色　ローム小ブロック微量。
5層　オリーブ褐色　ローム粒子微量。





第23図　B・Cトレンチ土層実測図

Cトレンチ（第23図，付図1）

B3g_5区に，1.0m幅に設定した。

大きく開いた薬研堀状に掘り込まれ，西側斜面は約30度，東側斜面は約25度の傾斜をもっている。

土層解説

1層　黒　褐　色　炭化粒子少量。ローム小ブロック少量，粒子中量。
2層　黒　褐　色　炭化粒子少量。ローム粒子中量。
3層　暗　褐　色　炭化粒子少量。ローム粒子中量。粘土小ブロック少量。
4層　暗　褐　色　ローム粒子中量。粘土大ブロック多量。
5層　暗　褐　色　焼土粒子少量。炭化物少量。ローム中ブロック少量，小ブロック・粒子中量。
6層　暗　褐　色　ローム大・中ブロック少量，小ブロック・粒子多量。
7層　暗　褐　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量。
8層　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量。粘土中ブロック，小礫少量。
9層　褐　　色　粘土中ブロック中量。中・小礫多量。

Dトレンチ（第24図，付図1）

B3c_4区～B3c_5区に，1.0mの幅で設定した。

大きく開いた薬研堀状に掘り込まれ，西側斜面は約20度，東側斜面は約35度の傾斜をもっている。両斜面の傾斜は，途中で角度を上げ，再び緩やかになっていく。

土層解説

1層 暗 褐 色 焼土粒子少量。炭化粒子少量。ローム中・小ブロック少量，粒子中量。小礫少量。
2層 明 黄 褐 色 粘土大ブロック中量。鹿沼粒子少量。
3層 にぶい黄褐色 炭化粒子微量。小礫少量。
4層 褐 色 中・小礫中量。
5層 にぶい黄褐色 炭化物微量。
6層 黄 褐 色 焼土粒子微量。小礫少量。
7層 にぶい黄褐色 炭化物少量。小礫少量。

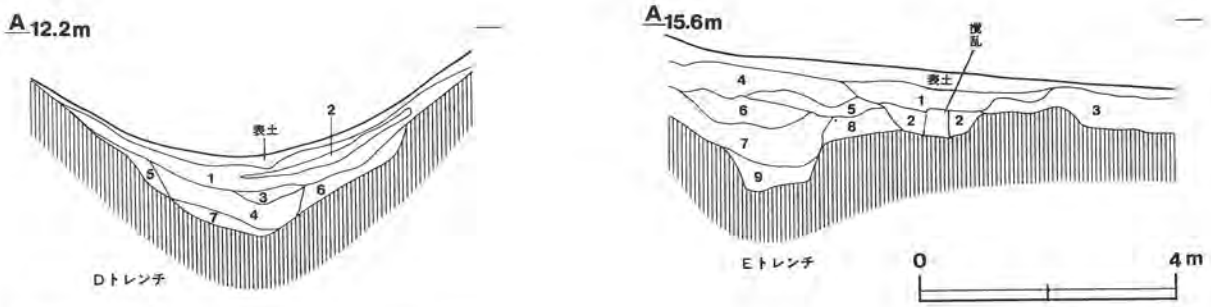
Eトレンチ（第24図，付図1）

B3g_7区～B3h_7区に，1.0mの幅で設定した。

やや北西側にかたむいた箱堀状に掘り込まれ，北西斜面は約70度，南東斜面は約75度の傾斜をもっている。

土層解説

1層 暗 褐 色 焼土粒子少量。炭化物中量。ローム小ブロック少量，粒子中量。砂粒子・小礫少量。
2層 褐 色 ローム粒子多量。砂粒子中量。小礫少量。
3層 にぶい黄褐色 ローム粒子中量。砂粒子中量。粘土大ブロック多量。
4層 暗 褐 色 炭化物中量。ローム粒子中量。砂粒子中量。小礫中量。
5層 褐 色 炭化物少量。ローム粒子中量。砂粒子少量。
6層 にぶい黄褐色 ローム粒子中量。砂粒子・小礫少量。
7層 褐 色 炭化物少量。ローム粒子中量。粘土大ブロック少量。砂粒子多量。小礫中量。
8層 褐 色 中・小礫多量。
9層 明 黄 褐 色 粘土中・小ブロック多量。中・小礫，砂粒子多量。



第24図　D・Eトレンチ土層実測図

Fトレンチ（第25図，付図1）

B3b_8区に，1.0mの幅で設定した。

浅い皿状に掘り込まれている。

土層解説

1層 褐 色 ローム小ブロック・粒子多量。粘土中・小ブロック多量。
2層 褐 色 炭化粒子微量。ローム小ブロック中量。粘土小ブロック少量。
3層 黄 褐 色 炭化粒子少量。ローム小ブロック少量。粘土小ブロック多量。
4層 褐 色 ローム大・中・小ブロック，粒子多量。粘土小ブロック少量。
5層 にぶい黄褐色 大・中・小礫多量。

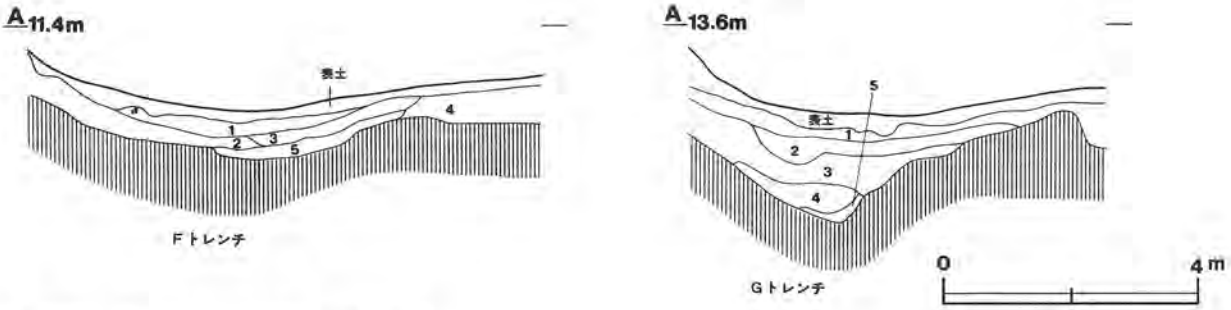
Gトレンチ（第25図，付図１）

B3d_0区～B4e_1区に，1.0mの幅で設定した。

緩やかな薬研堀状に掘り込まれている。北西斜面は約25度の傾斜をもっている。南東斜面は約55度の傾斜で，途中で角度をゆるめたり上げたりしながら立ち上がっている。

土層解説

1層　黒　褐　色　ローム粒子中量。砂粒子少量。
2層　褐　　色　ローム粒子多量。砂粒子少量。
3層　黄　褐　色　ローム粒子中量。砂粒子多量。
4層　暗　褐　色　砂粒子多量。
5層　褐　　色　中・小礫多量。



第25図　F・Gトレンチ土層実測図

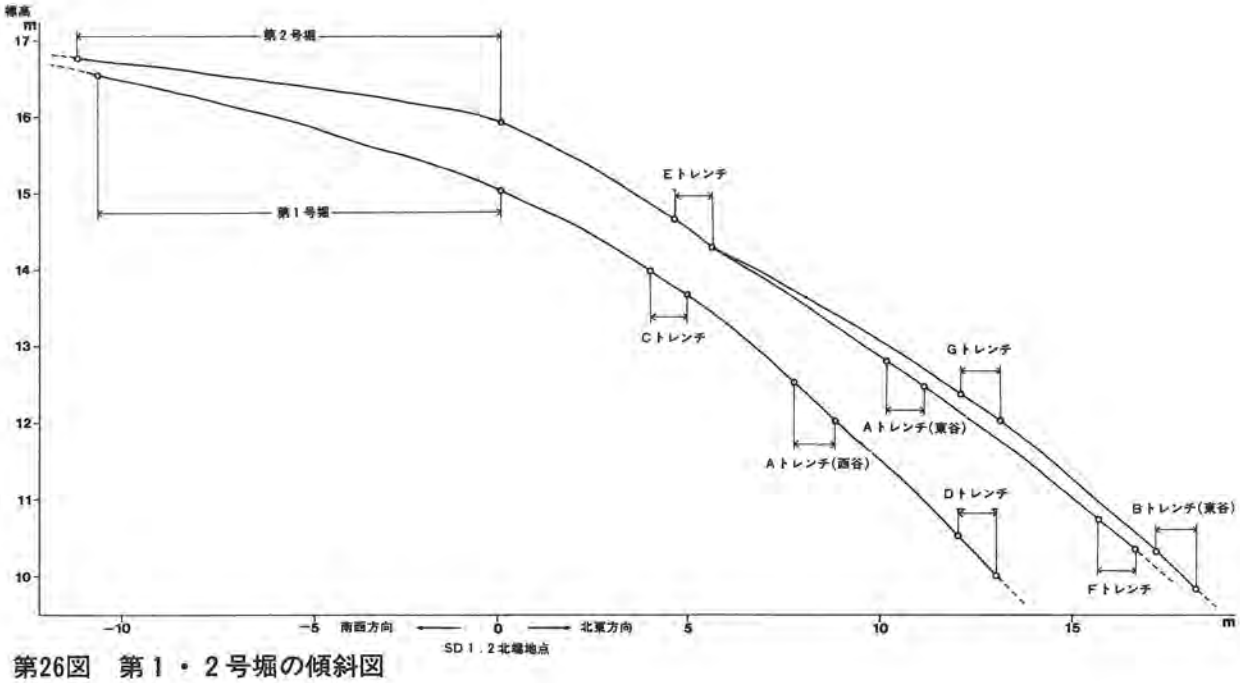
ここで，第１～３号堀と各トレンチで確認された掘り込みとの関係をまとめておきたい。

まず，A地区の南部に位置する第１～３号堀に共通する事柄は，(1)標高の高いところの断面は皿状で，低いところは緩やかな薬研堀状（第３号を除く）であり，(2)堀の下幅部分は，小礫を敷き詰めた状態で確認され，硬く踏み締められていることである。したがって，３条の堀は同時期のものと考えられる。

A地区の中央部及び北部の比高は約６mに及ぶ。各トレンチを観察した結果を見ると，人為的に造り出されたものである。古墳時代に第３号竪穴住居跡や第１号竪穴状遺構を構築した標高15～16mの高さの平坦地は，最高で約６m掘り込まれて堀が造られ，その際に２軒の住居跡が削平されている（古墳時代におけるA地区の地形を想定してみると，南西部から北東部に向かって緩く傾斜した地形と思われる）。

堀とトレンチとの関係は，次のように考えることができる。第１号堀は，調査エリア南西部から北北東方向に緩やかに下っていき，Cトレンチを通り，Aトレンチ西側谷部，Dトレンチを通って下っていくものと思われる。C，A，Dの各トレンチの最下層は，大・中・小礫を多量あるいは少量含む層であり，小礫を密に敷き詰めた状態で確認された第１号堀の下幅部分と共通する状況である。第26図は，第１号堀とC，A，Dの各トレンチの底部の標高を結んで作成したものである。調査をした範囲で約６mの比高があり，Aトレンチ西側谷部からDトレンチにかけての勾配が一番大きく，約25度である。

第２号堀は，調査エリア南西部から北東方向に緩やかに下っていき，Fトレンチを通り，二股に分かれて，一方は北東に向かって下り，Gトレンチ，Bトレンチ東側谷部を通っていくものと思われる。もう一方は，ほぼ真北に向かって下っていき，Aトレンチ東側谷部，Fトレンチを通って下っていくものと思われる。E，G，B，A，Fの各トレンチの最下層は，大・中・小の礫を多量～少量含む層であり，小礫を密に敷き詰めた状態で確認された第２号堀の下幅部分と共通する状況である。第26図は，第２号堀と各トレンチの標高を結んで作成したものである。調査をした範囲で，北東へ向かう堀は，比高が約6.8m，GトレンチからBトレンチにかけての勾配が一番大きく，23度である。真北へ向かう堀は，比高が約6.3m，AトレンチからFトレンチにかけての勾配が一番大きく，21度である。



第26図　第1・2号堀の傾斜図

(2) 道路跡

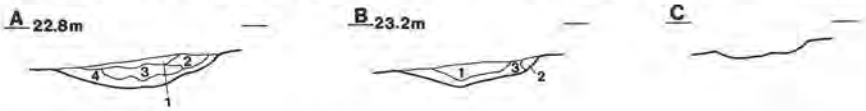
当遺跡からは1条（B地区）の道路跡が確認されている。

第1号道路跡（第27図，付図1）

位置　B地区北部の緩やかな傾斜地，E$3d_5$区～E$2g_2$区。

規模と形状　全長（16.60）m，発掘できた範囲で上幅1.35～0.50m，下幅0.58～0.27m，深さ0.22～0.05mである。断面は皿状で，南西端は削平されている。

方向　E$2g_2$区から北東方向へ緩やかに傾斜しながら延び，E$2d_5$区で調査エリア外へ延びていく。

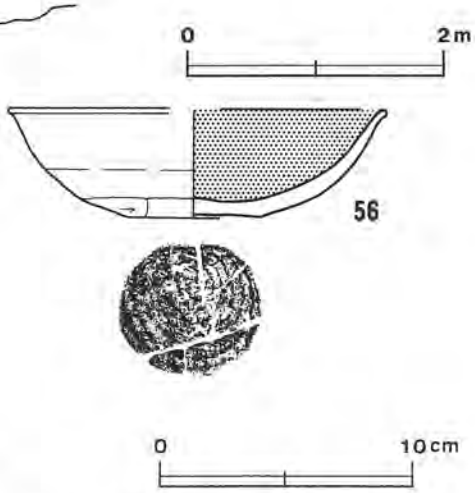


第27図　第1号道路断面・土層実測図

覆土　4層からなり，自然に堆積したものと思われる。遺物は中層からごく少量出土している。

土層解説

1層　暗　褐　色　ローム粒子中量。
2層　褐　　色　焼土粒子微量。ローム粒子中量。
3層　黒　褐　色　焼土粒子微量。ローム小ブロック・粒子少量。砂粒子少量。
4層　にぶい黄褐色　ローム小ブロック中量，粒子多量。



第28図　第1号道路跡出土遺物実測図

遺物　出土したのは56の坏と須恵器の細片1点である。56は流れ込みと思われるが，南部の覆土中から出土している。

所見　本跡は，非常に硬く踏み締められており，かなりの期間，道路として利用されたものと思われる。遺物は，流れ込みの可能性があり，時期を決定することはできなかった。しかし，調査エリア外の海岸方向に延びていくこと等を考慮すると，A地区の堀と共通する時期のものではないかと思われる。

第１号道路跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値 (cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第28図 56	坏 土 師 器	A〔14.8〕 B　4.4 C　5.4	口縁の一部欠損。上げ底気味。体部は内彎して立ち上がる。口唇部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 褐色 普通	P50 70% 南部覆土中

3　その他の遺構と遺物

(1)　土坑

当遺跡からは，14基の土坑が確認されたが，出土遺物が少なく時期や性格について不明な点が多い。ここでは，土坑のうち特徴がある第２号土坑について説明し，その他については一覧表（表４）にした。

第２号土坑（第29図）

位置　Ｂ地区北部の緩やかな傾斜地，Ｅ$2d_4$区。

重複関係　本跡は，第１号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸（1.68）m，短軸1.32mの長方形で，深さは0.65mである。

長軸方向　Ｎ－3°－Ｅ。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面　大きく開いた「Ｖ」字状である。

覆土　４層からなり，自然に堆積したものと思われる。４層は，粘土ブロック層で，にぶい黄褐色土であり，壁から落下したものと思われる。

土層解説
１層　黒　褐　色　ローム中ブロック微量，粒子少量。
２層　暗　褐　色　ローム粒子少量。
３層　黒　褐　色　ローム小ブロック微量，粒子少量。

遺物　土師器と須恵器の細片が出土しているが，実測できるものはなかった。

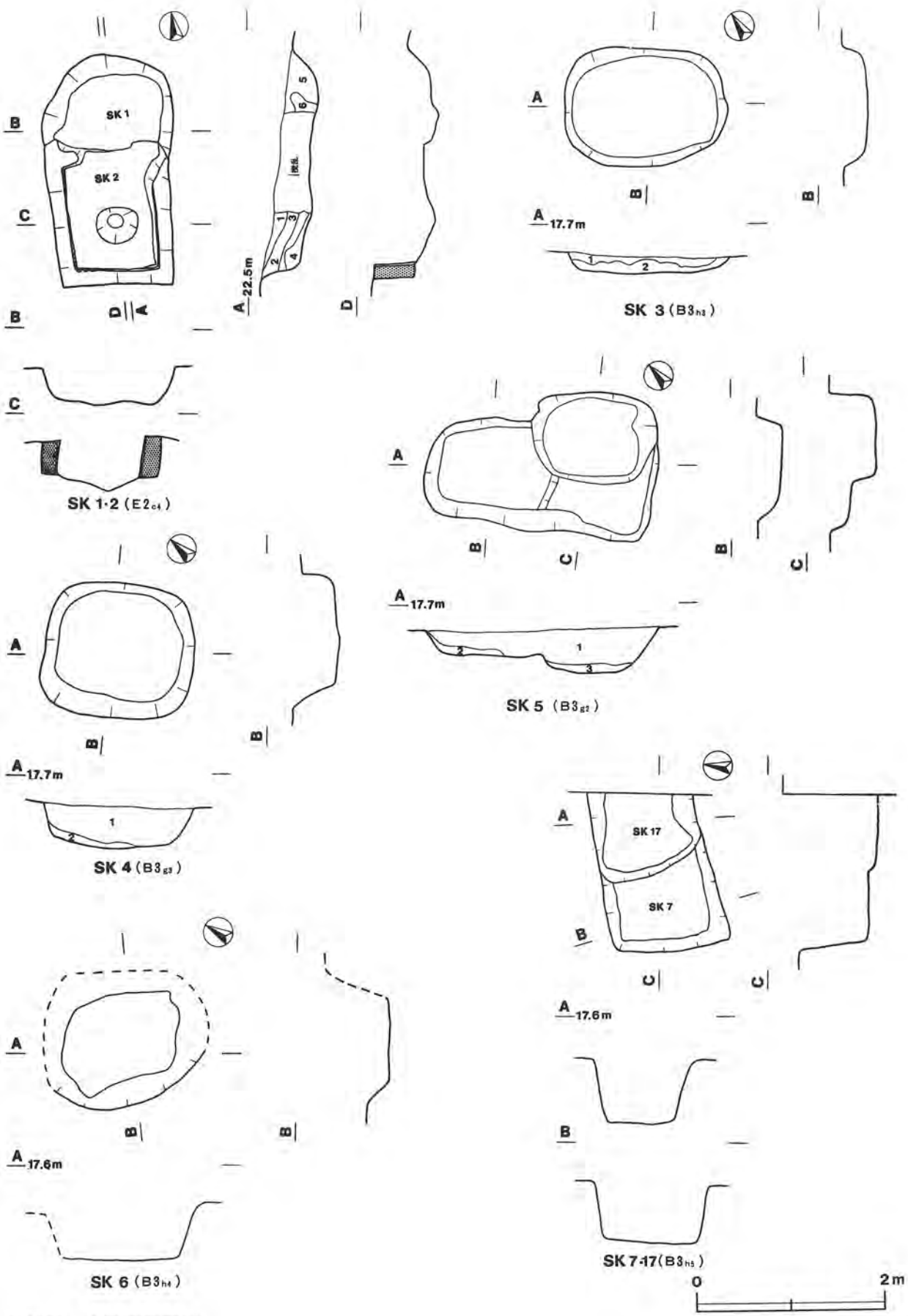
所見　壁面に粘土が見られ，さらにその内側に厚さ１cm程の白色の漆喰が貼られていた。漆喰の裏面には，×のような凸部があり，粘土面とのかみ合いが図られていた。一部の漆喰は崩落して覆土中に堆積していた。土坑の中央部には径40～46cmの楕円形状の窪みがあり，その部分は焼けて赤く硬化していた。周辺にピット等の上屋のあった痕跡は認められず，どのような使い方がなされたのか不明であり，性格についても不明である。

第６号土坑出土遺物観察表

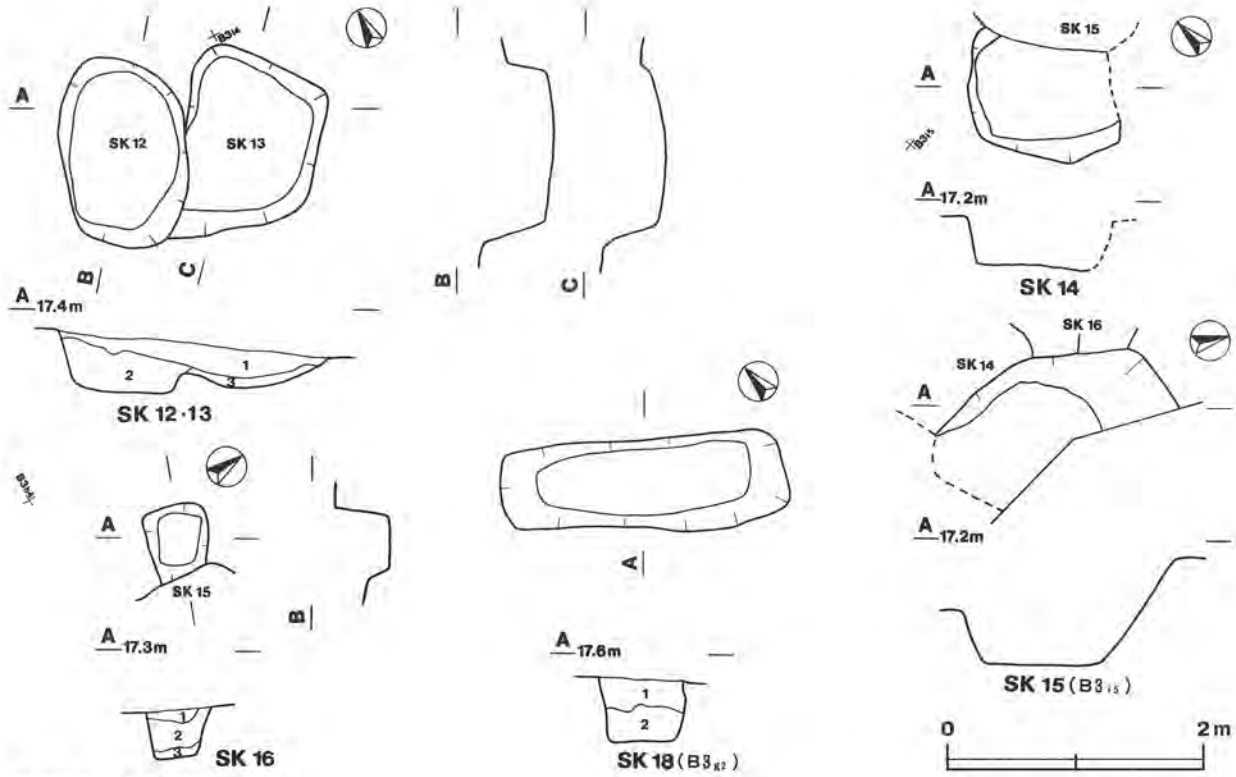
図版番号	器　種	計測値 (cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第31図 57	坏 土 師 器	A〔12.4〕 B（3.0）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P36 10% 覆土中

第11号土坑出土遺物観察表

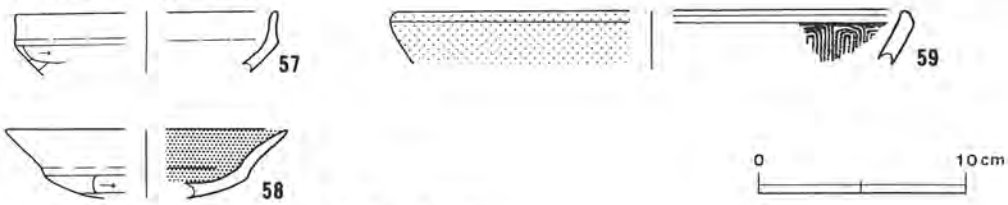
図版番号	器　種	計測値 (cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第31図 58	坏 土 師 器	A〔13.4〕 B（3.3）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に段をもつ。口縁部は大きく開き，やや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P37 20% 覆土中
59	擂　鉢 陶　器	A〔24.6〕 B（3.8）	口縁部片。口縁部は外傾する。内面に１条の弱い凹線が巡る。	水挽き成形。透明釉施釉	砂粒 灰褐色 良好	P38 5% 覆土中


SK 1
SK 2
SK 1·2 (E2c4)
SK 3 (B3h3)
SK 4 (B3g3)
SK 5 (B3g2)
SK 6 (B3h4)
SK 17
SK 7
SK 7·17 (B3h5)
A 22.5m
A 17.7m
A 17.6m
0
2m

第29図　土坑実測図(1)



第30図　土坑実測図(2)



第31図　第6・11号土坑出土遺物実測図

表4　山崎遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考		
1	E2c₄	N－2°－E	[円　形]	1.30 × 1.04	40	緩斜	皿状	人為	土師器の細片	SK－2と重複	B地区	第29図
3	B3h₃	N－52°－W	楕円形	1.72 × 1.28	24	緩斜	皿状	自然	土師器の細片	SI－1と重複	A地区	第29図
4	B3g₃	N－42°－W	隅丸方形	1.58 × 1.42	43	緩斜	平坦	自然	土師器の細片	SI－1と重複	A地区	第29図
5	B3g₂	N－54°－W	不定形	2.30 × 1.16	30	緩斜	平坦	自然	土師器の細片	SI－1と重複	A地区	第29図
6	B3h₄	N－32°－W	[不定形]	3.52 × 4.44	71	緩斜	平坦	不明	縄文式土器・土師器の細片		A地区	第29図
7	B3h₅	N－71°－E	[長方形]	(0.60)×(1.44)	74	垂直	平坦	不明	…	SK－17と重複	A地区	第29図
8	C3a₆	N－48°－E	[長方形]	2.18 ×(1.00)	(40)	緩斜	平坦	自然	縄文式土器・土師器・須恵器の細片	SK－9と重複	A地区	付図1
9	C3a₇	N－48.5°－E	[長方形]	(0.70)×(0.56)	(36)	緩斜	平坦	自然	縄文式土器・土師器・須恵器の細片	SK－8・10と重複	A地区	付図1
10	C3a₇	N－27°－W	[長方形]	1.78 ×(0.74)	(18)	緩斜	平坦	自然	土師器の細片	SK－9・11と重複	A地区	付図1
11	B3j₇	N－47°－E	[方形]	(0.80)×(0.75)	18	緩斜	平坦	不明	土師器・須恵器の細片	SK－10と重複	A地区	付図1
12	B3i₃	N－25°－E	楕円形	1.46 × 1.00	42	緩斜	平坦	自然	…	SK－13と重複	A地区	第30図
13	B3i₃	N－40°－E	台形	1.78 ×(1.04)	30	緩斜	皿状	自然	土師器の細片	SK－12と重複	A地区	第30図
14	B3i₅	N－39°－W	[楕円形]	(1.12)× 0.88	38	垂直	凹凸	不明	…	SK－15と重複	A地区	第30図
15	B3i₅	N－34°－W	[楕円形]	(4.00)×(0.14)	70	緩斜	平坦	不明	…	SK－14・16と重複	A地区	第30図
16	B3h₅	N－64°－W	台形	(0.58)× 0.48	43	垂直	平坦	自然	縄文式土器の細片	SK－15と重複	A地区	第30図
17	B3h₅	N－70°－E	[方形]	(0.88)× 1.13	69	垂直	平坦	不明	…	SK－7と重複	A地区	第29図
18	B3g₂	N－55°－E	楕円形	2.26 × 0.68	35	緩斜	平坦	不明	土師器・須恵器の細片	SI－1と重複	A地区	第30図

第1・2号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム中ブロック微量・粒子少量。

2層　暗　褐　色　ローム粒子少量。

3層　黒　褐　色　ローム小ブロック微量・粒子少量。

4層　鈍黄褐色　粘土ブロック層。

5層　黒　褐　色　焼土粒子微量。ローム中ブロック微量・小ブロック中量・粒子中量。

6層　暗　褐　色　焼土粒子少量。ローム中ブロック少量・小ブロック中量・粒子多量。

第3号土坑　土層解説

1層　暗　褐　色　焼土粒子少量。炭化粒子少量。ローム中ブロック中量・粒子中量。

2層　黒　褐　色　焼土粒子少量。炭化物少量・粒子少量。ローム中ブロック少量・粒子中量。

第4号土坑　土層解説

1層　褐　　色　焼土中・小ブロック少量，粒子少量。炭化物少量，粒子少量。ローム大ブロック少量・中ブロック中量・小ブロック多量・粒子多量。

2層　暗　褐　色　焼土粒子少量。炭化粒子少量。ローム大ブロック少量・粒子中量。黒色土粒子少量含む。

第5号土坑　土層解説

1層　褐　　色　炭化物微量。ローム大ブロック中量，中・小ブロック多量，粒子多量。スコリア粒子少量含む。

2層　暗　褐　色　焼土粒子微量。炭化物少量。ローム中・小ブロック少量，粒子中量。小礫を少量含む。

3層　暗　褐　色　ローム中・小ブロック中量，粒子多量。

第12・13号土坑　土層解説

1層　暗　褐　色　炭化物微量。ローム大ブロック少量・中ブロック中量。小ブロック多量・粒子多量。

2層　褐　　色　ローム大・中・小ブロック多量・粒子多量。ロームがブロック状に堆積した層。

第16号土坑　土層解説

1層　褐　　色　ローム大ブロック中量・小ブロック少量・粒子少量。

2層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量・中ブロック中量。

3層　暗　褐　色　ローム中ブロック少量・粒子少量。

第18号土坑　土層解説

1層　褐　　色　炭化粒子微量。ローム大・中ブロック微量，粒子少量。

2層　暗　褐　色　ローム中ブロック微量・粒子少量。

(2)　遺構外出土遺物

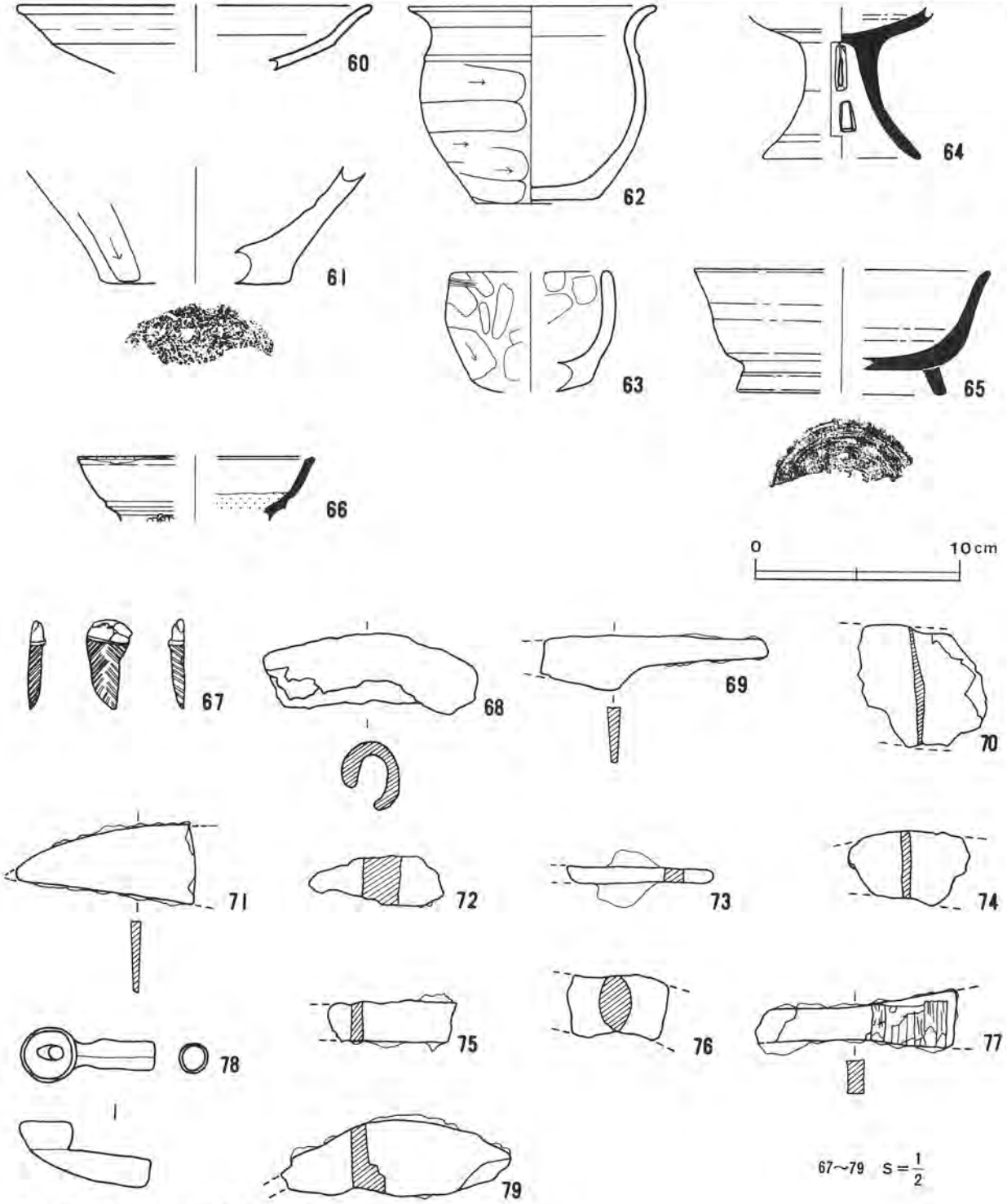
当調査区の遺構外から出土した遺物について，一覧表で紹介する。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値 (cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第32図 60	高　坏 土師器	A〔17.0〕 B（3.2）	坏部片。坏部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	P43 20% 表採
61	甕 土師器	B（5.5） C〔9.2〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P44 5% 表採
62	小形甕 土師器	A　12.0 B　9.7 C　6.0	体部及び口縁部の一部欠損。上げ底気味。体部は内彎して立ち上がり，頸部との境に稜をもつ。頸部は括れ，口縁部は外反する。	口縁部及び頸部の内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P46 60% Iトレンチ覆土中
63	手捏土器	A〔7.5〕 B　5.8	底部から口縁部にかけての破片。底部突出。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部及び体部の内・外面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P47 40% Iトレンチ覆土中
64	高　坏 須恵器	B（7.4） D〔7.8〕 E　5.9	脚部及び坏部下位の破片。脚部は，ラッパ状に開き，二段のスカシ窓が二方向に刻んである。	内・外面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P48 45% Iトレンチ覆土中
65	高台付坏 須恵器	A〔14.4〕 B（6.1） D〔10.0〕 E　1.5	底部から口縁部にかけての破片。平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	内・外面横ナデ。高台貼付け後，ナデ。	砂粒・長石 灰黄色 普通	P45 40% 表採
66	瓶 須恵器	A〔11.3〕 B（3.1）	口縁部片。口縁部分は内彎して立ち上がり，下位に強い稜をもつ。稜の下方に櫛描波状文を施している。端部は内削状で僅かに凹面をなす。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 黒褐色 良好	P49 5% 表採 内・外面の一部に自然釉

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
67	不明土製品	2.9	1.4	0.6	1.5	表採	DP1
68	不明鉄製品	(7.0)	2.6	0.5	(38.9)	表採	M7
69	刀　子	(7.3)	1.8	0.8	(16.1)	東部表土中	M9
70	不明鉄製品	(4.2)	(4.0)	0.3	(11.2)	東部表土中	M10
71	鎌	(5.9)	(2.7)	0.3	(13.2)	東部表土中	M11
72	不明鉄製品	(4.4)	(1.6)	1.2	(15.6)	東部表土中	M13

図版番号	器　種	計　測　値				出　土　地　点	備　　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
73	不明鉄製品	（4.7）	0.5	0.6	（8.4）	東　部　表　土　中	M14
74	不明鉄製品	（4.0）	（2.5）	0.4	（5.9）	東　部　表　土　中	M15
75	不明鉄製品	（4.2）	1.9	0.4	（8.8）	東　部　表　土　中	M16
76	不明鉄製品	（3.3）	（2.2）	1.3	（20.1）	東　部　表　土　中	M18
77	刀　　子	（6.6）	（2.1）	0.5	（16.4）	東　部　表　土　中	M19
78	煙　　管	（4.3）	（2.0）	1.8	（5.8）	東　部　表　土　中	M20
79	不明鉄製品	（7.4）	（2.8）	（1.0）	（47.1）	Aトレンチ覆土中	M21



第32図　遺構外出土遺物実測図

第4節　まとめ

今回の調査によって，当遺跡は古墳時代後期と中世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは，各時期ごとに概観し，まとめとしたい。

古墳時代

第1～3号住居跡，第1号竪穴状遺構が当該期の遺構で，すべてA地区で確認された。日立市等で実施された過去2回の調査でも当該期の遺構が確認されており，山崎遺跡は，古墳時代後期に大きな集落を形成していた可能性がある。

第3号住居跡と第1号竪穴状遺構は，頂部で確認され，周囲を削平されている。この2遺構の標高の差は小さく，他の第1・2号住居跡との標高差も小さい。このことから，この時期のA地区の現況を復元すると，南西部から北東部に向かって僅かに高低差をもつ平坦地であったものと思われ，A地区北部の大きな起伏部は古墳時代後期以降に造られたものと思われる。

遺物は，各遺構から後期のものが出土している。出土した遺物から，第1～3号住居跡は7世紀前半の遺構，第1号竪穴状遺構は6世紀後半の遺構と考えられる。

中　世

A地区の第1～3号堀，及びそれらに続く堀，B地区の第1号道路跡が当該期の遺構である。A地区の堀は，古墳時代後期の第3号住居跡や第1号竪穴状遺構が削平された状態で確認されたこと，及び各トレンチの土層断面を観察した結果，人為的に掘り込まれたものであると確認した。第1～3号堀，及びそれらに続く堀は，古墳時代後期の遺構を削平するかたちで造られたもので，(1)6mに及ぶ比高差を人為的に造り出していることは軍事的な目的によるものと考えられることや，(2)断面形から判断して，城館跡の北側に位置する竪堀と思われる。竪堀の本来の形状は，直線であるが，ここでは蛇行させた竪堀が構築されている(日立市内の大窪愛宕山城跡では，小規模ながら蛇行した竪堀が確認されている)。しかし，(1)直線ではなく，緩く曲線を描くこと，(2)二股に分かれること，(3)底部には小礫が敷き詰められ，非常に硬く踏み締められていることから判断すると，海岸へ向かって延びる通路としても使用されたものと考えられる。平時は通路，戦時は竪堀として使用した可能性も考えられる。

第33図は，市村高男氏が作成した縄張り図である。

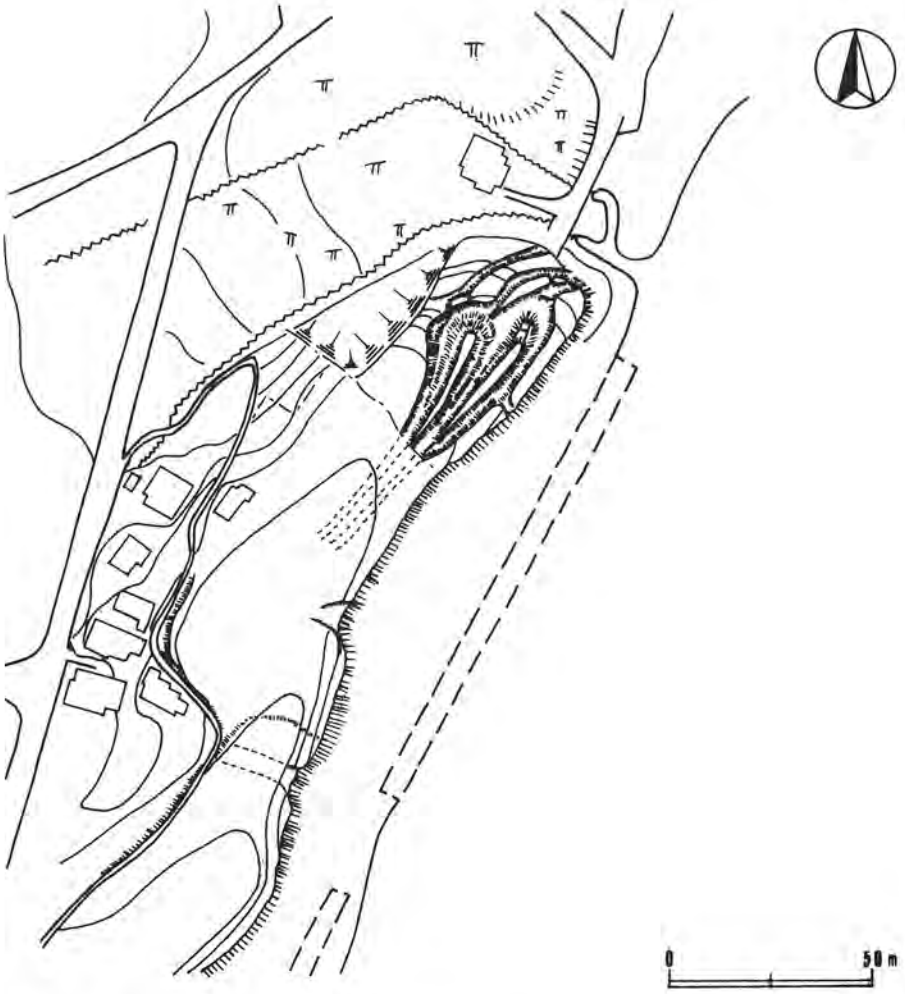
日立市史によると，滑川の小幡に館があり，小野崎直通が延徳年間(1489～1492年)に住んでいたという。そして，直通が南方の相賀館に移ってからは，同族の小野崎左衛門が居館としたようである。現在，滑川地内で館跡として確認されているのは滑川浜館遺跡と当遺跡である。2遺跡ともに海に面する所に位置しており，小幡という小字は海岸から500m程入った所であるので，小幡館がこの2遺跡である可能性は薄い。しかし，新編常陸国誌には「‥(館は)海濱ニアリ‥」とあるので，この2遺跡のどちらかである可能性もあり，あるいは，小幡館と何らかの関連をもつ遺跡である可能性もある。

また，当遺跡と滑川浜館遺跡の関係も明らかにしなければならないが，明確にはならなかった。

参考文献

(1)　日立市　「日立市史」 1959年2月

(2)　宮崎報恩会版　「新編常陸国誌」 1979年12月



第33図　山崎遺跡要図（市村高男氏作図）

滑川浜館遺跡

第４章　滑川浜館遺跡

第１節　調査方法と遺構・遺物の記載方法

１　地区設定

滑川浜館遺跡の発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。調査区の設定及び名称は，山崎遺跡と同様である（Ｐ.11　山崎遺跡 第３章 第１節 １を参照)。

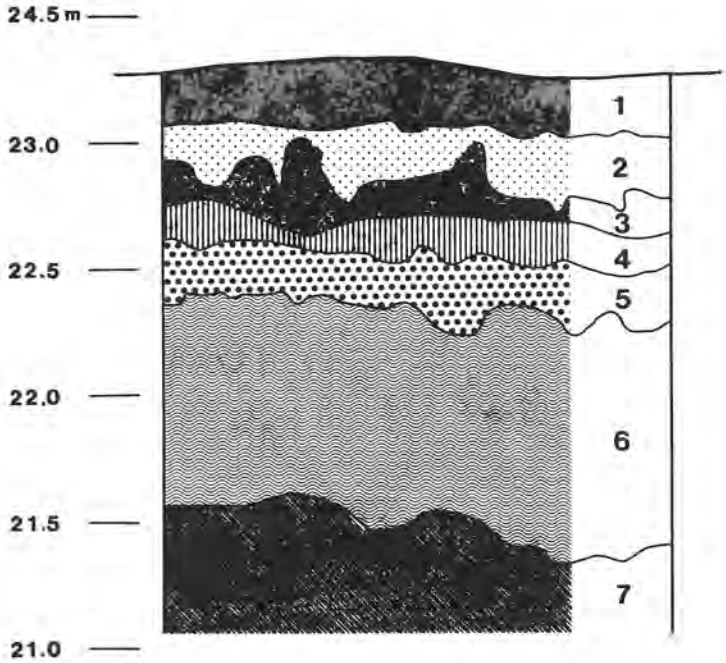
基準点の座標は，次のとおりである。

滑川浜館遺跡　（Ｃ$3a_1$）Ｘ軸（南北）＋67,400m，Ｙ軸（東西）＋75,680m

２　基本層序の検討

滑川浜館遺跡においては，調査区中央部Ｂ$2g_6$区にテストピットを設定し，第34図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第１層は黒褐色の耕作土であり，厚さは20～30cmである。第２層は褐色のソフトローム層であり，厚さは５～30cmである。第３層は褐色のハードローム層であり，小礫を少量含み，厚さは５～40cmである。第４層は鈍黄褐色の鹿沼浮石層であり，厚さは５～20cmである。第５層は褐色のハードローム層であり，鹿沼粒子を少量含み，厚さは15～30cmである。第６層は褐色の層であり，砂粒を中量，小礫を少量含み，厚さは70～90cmである。第７層は褐色の層であり，砂粒を多量，小礫と大礫を少量含む層である。



第34図　基本土層図

滑川浜館遺跡の遺構は，表土下20～30cmの第２層上面から確認されている。

３　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は，以下のとおりである。

(1)　使用記号

遺構　住居跡－ＳＩ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　ピット－Ｐ　方形周溝墓－ＴＭ
　　堀立柱建物跡－ＳＢ　道路跡－ＳＦ

遺物　土器－Ｐ　石器－Ｑ　金属製品－Ｍ

(2) 遺構及び遺物の実測図中の表示

(3) 土層の分類

土層観察における色相の判定は,『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄　日本色研事業株式会社)を使用した。

(4) 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

滑川浜館遺跡の遺跡全体図は縮尺400分の1，遺構図は縮尺60分の1にした。

遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり,それらについては,S＝1/2等と表示した。

(5) 出土遺物観察表の計測値

計測値は，A・・・口径，B・・・器高，C・・・底径，D・・・高台径，E・・・高台高とし，(　)は現存値，〔　〕は復元推定値を表す。

第2節　遺跡の概要

滑川浜館遺跡は,日立市東滑川町の太平洋に面する標高約20mの台地上に位置し,山崎遺跡の北方約300mにある。台地の東側は，高さ約20mの海蝕崖となり，南側と北側には，谷が入り込んでいる。現況は，山林，畑で調査区の面積は2,446m²である。

今回の調査によって確認された遺構は，古墳時代前期の方形周溝墓3基，平安時代の竪穴住居跡1軒，中世の竪穴住居跡3軒，掘立柱建物跡3棟，土坑10基，溝1条，道路跡1条，柱穴跡252基，及び時期不明の竪穴住居跡1軒，土坑26基，溝1条である。

遺物は，遺物収納箱(60×40×20cm)に24箱出土している。古墳時代の遺物は，土師器の坩，壺及びその破片，石製品の管玉，鉄製品の刀子等が出土している。平安時代の遺物は，土師器の破片，須恵器の破片，銅製品の銙帯の丸鞆が出土している。中世の遺物は，土師質土器の皿及びその破片，陶磁器片，鉄滓，古銭の永楽通寶等が出土している。

第3節　遺構と遺物

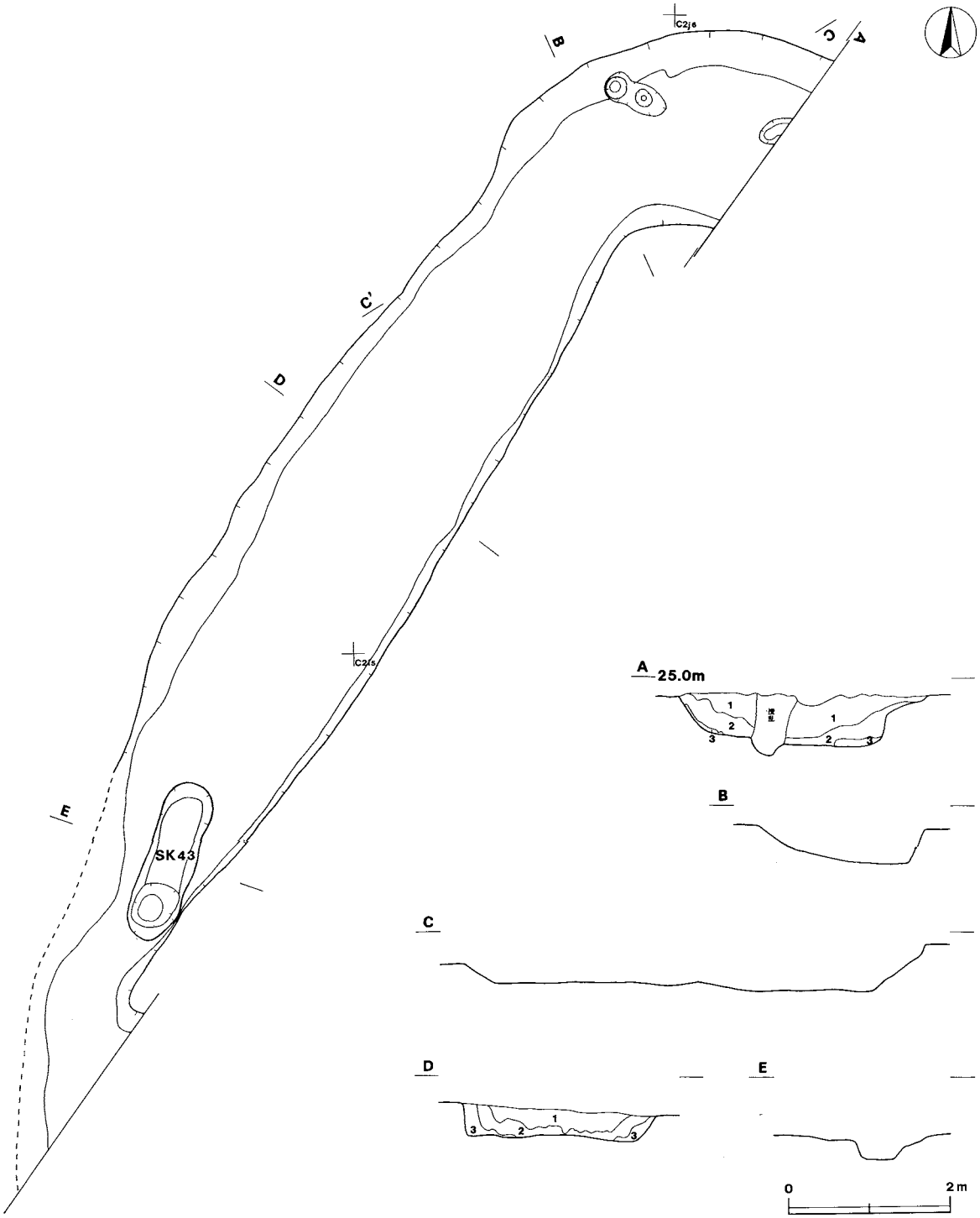
1　古墳時代の遺構と遺物－方形周溝墓

古墳時代では，前期の方形周溝墓が3基確認されている。以下，確認された方形周溝墓の特徴や主な出土遺物について記載する。

第１号方形周溝墓（第35図）

調査エリア南部のD2a$_5$区を中心に確認され，第43号土坑によって掘り込まれている。本跡の北側には第２・３号方形周溝墓が位置している。

本跡の南東部は調査エリア外となるので，北・西コーナー及び北西溝のみの調査のため，詳細については不明な点が多い。外法[17.35]m,内法(11.65)mで，平面形状は隅丸方形になるものと思われる。北西溝はN－30°－Eの傾きで，上幅2.52～1.78m，下幅1.96～0.70m，深さは最深部で45cmである。断面形は，南西部が浅い皿状で，北東部に向かうにしたがい，溝の外側の壁は緩やかに内彎しながら立ち上がり，内側の壁は急角度で立ち上

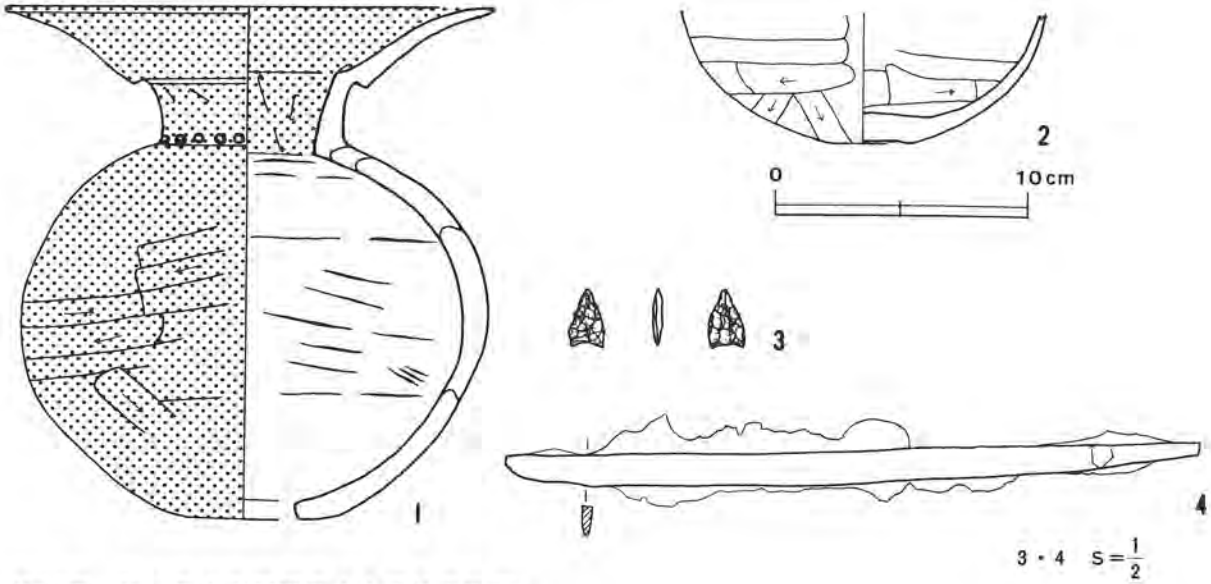


第35図　第１号方形周溝墓実測図

がるようになる。底面は，ほぼ平坦である。主体部，マウンドは確認できなかった。

覆土は，3層からなり，自然に堆積したものと思われる。1層は焼土小ブロック，ローム小ブロック・粒子を少量含む黒色土，2層は焼土粒子及び炭化粒子を極めて微量，ローム小ブロックを少量，ローム粒子を中量含む黒褐色土，3層はローム粒子を多量，黒色土粒子を少量含む褐色土である。遺物は，2層から少量出土している。

遺物は，土師器及び流れ込みと思われる縄文式土器の細片が多数出土している。1の壺は，北コーナー近くの中央部の覆土中層から横位の状態で出土している。また，その底部の破片は第2号方形周溝墓の覆土中からも出土している。2の壺は北西溝中央部の覆土中層から逆位の状態で出土している。



第36図　第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第1号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	壺 土師器	A 19.2 B 23.0 C 6.0	体部及び口縁部の一部欠損。底部は穿孔されている。体部は球状に内彎して立ち上がる。頸部は僅かに外傾して立ち上がり，口縁部は有段口縁で，大きく外反して立ち上がる。	口縁部外面下位に円形刺突文列。口縁部内・外面ハケ目整形後，ナデ。頸部内・外面ヘラ削り後，ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。体部内面を除き赤彩。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P12 80% 北コーナー付近 中央部覆土中層 及びTM-2覆土中
2	壺 土師器	B (5.2) C 3.5	底部から体部にかけての破片。上げ底気味。体部はほぼ球状に内彎して立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P13 30% 北西溝中央部覆土中層

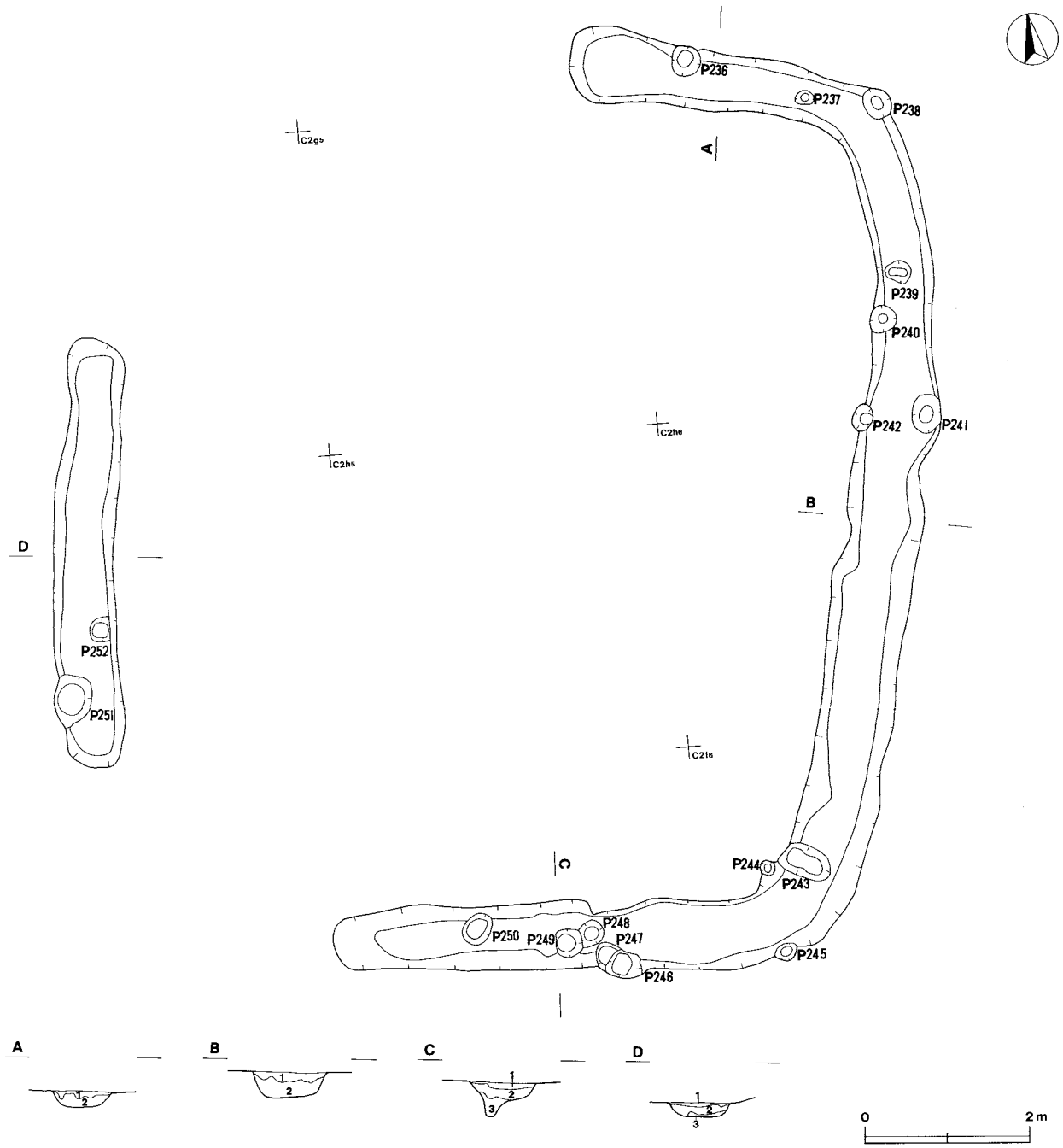
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	石鏃	1.5	0.9	0.3	0.1	チャート	北コーナー内壁際覆土上層	Q5

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	刀子	18.3	0.8	0.3	25.3	覆土下層	M15

第２号方形周溝墓（第37図）

調査エリア南部のＣ$2h_5$区を中心に確認され，Ｐ-236 ～ Ｐ-252 によって掘り込まれている。南側に第１号方形周溝墓，北東側に第３号方形周溝墓が位置している。

外法は南北方向で11.45m，東西方向で11.00m，内法は南北及び東西の両方向ともに約10.10mである。平面形状は，隅丸方形で，南北軸はＮ－15°－Ｅと東側に傾いている。溝は，北西及び南西コーナーを欠いている（なお，この欠損したコーナー部が，土橋として造り出されたのか，削平されたのかは不明である）。上幅は，0.96～0.60m，下幅0.83～0.38m，深さは33～19cmである。断面形は皿状で，底面はやや起伏があり，壁は内側・外側ともに内彎しながら立ち上がっている。主体部，マウンドは確認できなかった。



第37図　第２号方形周溝墓実測図

覆土は，5層からなり，人為的に堆積したものと思われる。各層ともに，ロームの大・中・小ブロック及び粒子を含んでいる。遺物は少量であるが各層から出土している。

土層解説

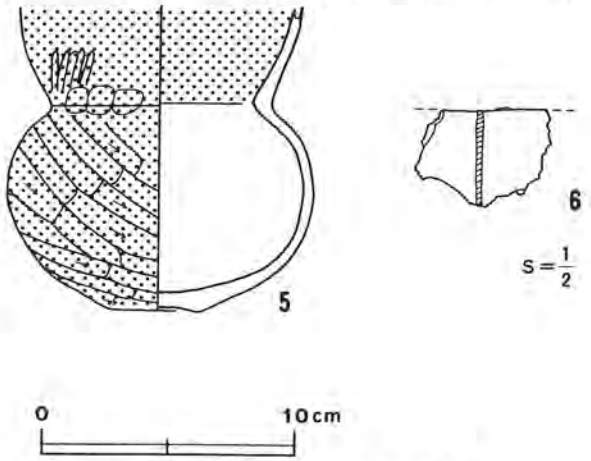
1層 暗 褐 色 ローム大ブロック微量，小ブロック・粒子中量，黒色土粒子少量。
2層 褐 色 ローム大ブロック中量・粒子多量，黒色土粒子少量，鹿沼土小ブロック微量。
3層 黒 褐 色 ローム大・中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子中量，黒色土粒子少量。
4層 褐 色 ローム大ブロック少量，ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・粒子多量，黒色土粒子少量。
5層 褐 色 ローム大・中ブロック中量，ローム粒子多量。

遺物は，土師器及び流れ込みと思われる縄文式土器の細片が少量出土している。5の坩は，南溝中央部の覆土中層から横位の状態で出土している。

第2号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 5	坩 土師器	B (12.0) C 3.4	口唇部欠損。上げ底気味。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は僅かに内彎しながら立ち上がる。	口縁部外面ヘラ磨き。頸部及び体部外面ヘラ削り後，ナデ。体部内面を除き赤彩。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P14 90% 南溝中央部覆土中層

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	不明鉄製品	(3.3)	(2.5)	0.2	(5.5)	覆土中	M16



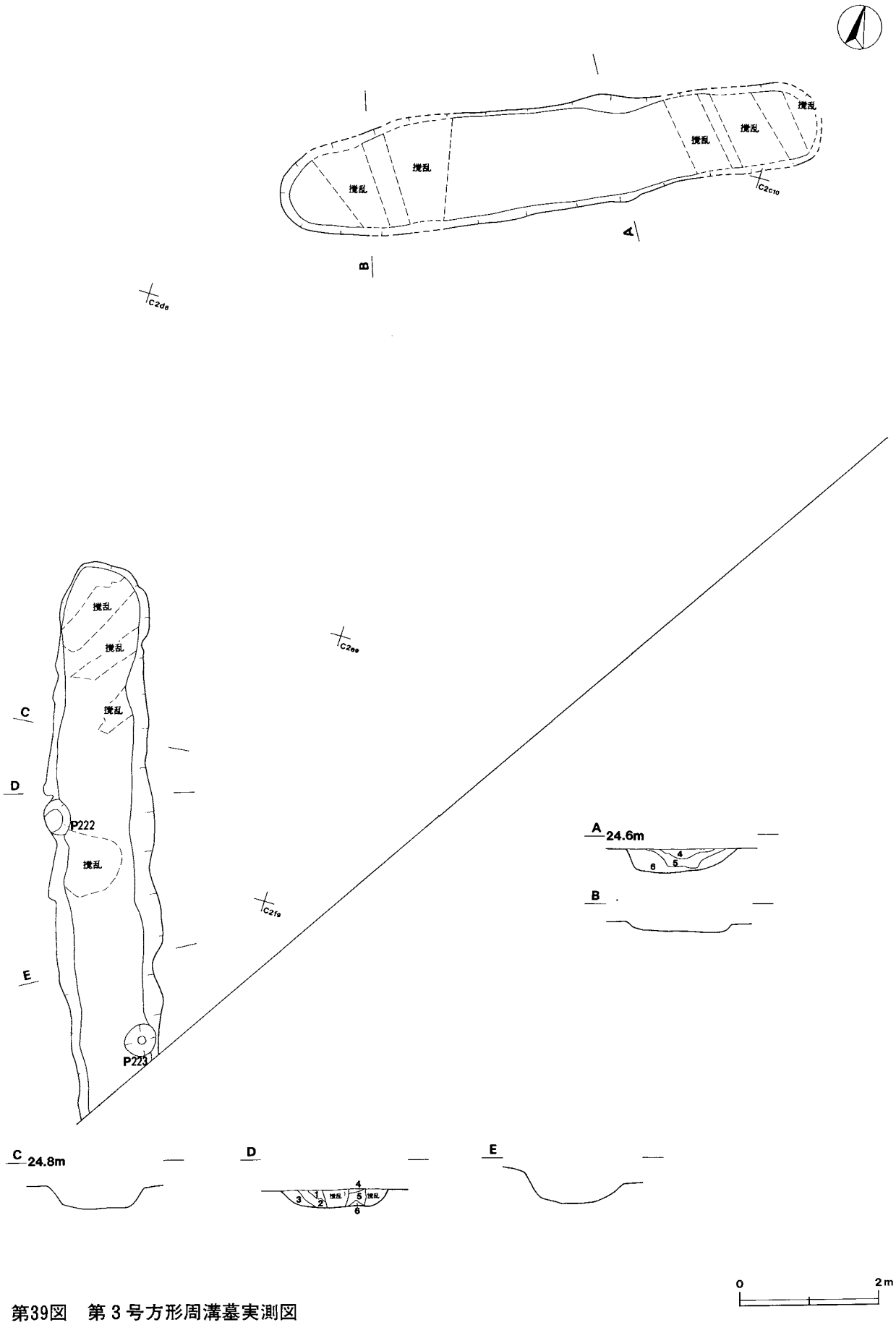
第38図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図

第3号方形周溝墓（第39図）

調査エリア中央部のC2d₉区を中心に確認され，P-222，P-223によって掘り込まれている。南側に第1・2号方形周溝墓が位置している。

北溝及び西溝の調査であり，随所に攪乱を受けているため，詳細については不明な点が多い。北西コーナーは欠損し，北溝は東方へ向かう途中で次第に消えていく(第2号方形周溝墓と同様に，土橋を造成したのか，削平されたのかは不明である)。また，西溝は，調査エリア外へ延びていく。N－15°－Wの傾きがあるものと考えられる。

北溝は，長さ[7.88]m，上幅1.65～1.25m，下幅1.45～1.15m，深さは最深部で35cmである。断面形は，ほぼ皿状で，底面は平坦である。西溝は，長さ(7.60)m，上幅1.50～1.20m，下幅1.08～0.85m，深さは最深部



第39図　第３号方形周溝墓実測図

で40cmである。断面形は，北部は逆台形状，南部は皿状で，底面はほぼ平坦である。主体部，マウンドは確認できなかった。

覆土は，6層からなり，自然に堆積したものと思われる。各層ともに，ロームの中・小ブロック及び粒子を含んでいる。遺物は少量であるが各層から出土している。

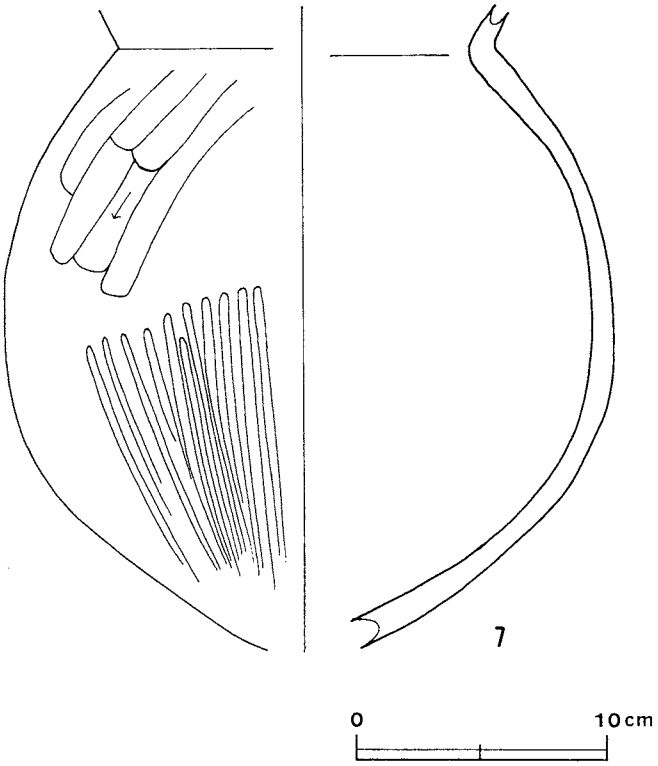
土層解説

1層　黒　褐　色　ローム小ブロック及び粒子微量。
2層　黒　褐　色　ローム中ブロック微量，ローム小ブロック・粒子少量，黒色土粒子少量。
3層　暗　褐　色　ローム中・小ブロック少量，ローム粒子中量，黒色土粒子少量。
4層　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子微量，黒色土粒子少量。
5層　黒　褐　色　ローム中・小ブロック少量，ローム粒子中量，黒色土粒子少量。
6層　暗　褐　色　ローム中・小ブロック・粒子中量。

遺物は，土師器の破片が少量出土している。その他，流れ込みと思われる縄文式土器及び陶器の細片が少量出土している。7の甕は，西溝の北西コーナー寄りの覆土中層から横位の状態で出土している。

第3号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第40図 7	甕 土師器	B（24.0）	体部から頸部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲する。	体部上位ヘラ削り後，ナデ。体部下位ヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P15　40% 西溝の北西コーナー寄りの覆土中層



第40図　第3号方形周溝墓出土遺物実測図

2　平安時代の遺構と遺物－竪穴住居跡

平安時代では，竪穴住居跡が1軒確認されている。以下，確認された竪穴住居跡の特徴や主な遺物について記載する。

第3号住居跡（第41図）

位置　B3a$_3$区。

規模と平面形　長軸3.65m，短軸［3.32］mの方形と推定される。

主軸方向　N－30°－W。

壁　壁高は最高で30cm，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部は硬く踏み固められている。北東部は，削平されている。

ピット　4か所。P_1は，長径31cm，短径25cmの楕円形で，深さは12cmである。P_2，P_4は，直径28～24cmの円形で，深さは33～11cmである。P_3は，長径35cm，短径27cmの楕円形で，深さは50cmである。P_1～P_4の性格は不明である。

竈　耕作による撹乱のために，遺存状態は非常に悪いが，半径40cmの半円形の範囲で痕跡を確認することができた。位置は，北壁の中央部付近の壁際で確認され，壁を掘り込んだ様子はない。痕跡の範囲には，焼土の大・中ブロックや粒子，炭化物や炭化粒子が堆積している。

竈土層解説

1層　褐　色　焼土大ブロック・粒子中量，焼土中ブロック及び炭化物少量，粘土大ブロック中量。
2層　赤　褐　色　焼土大・中ブロック中量。
3層　極暗褐色　焼土粒子多量，炭化物少量，ローム粒子少量。
4層　暗　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子中量，ローム中ブロック少量・粒子多量，粘土粒子少量。

覆土　5層からなる。覆土が薄いため，堆積した状況の判断はできなかった。遺物は，床面近くから多く出土している。

土層解説

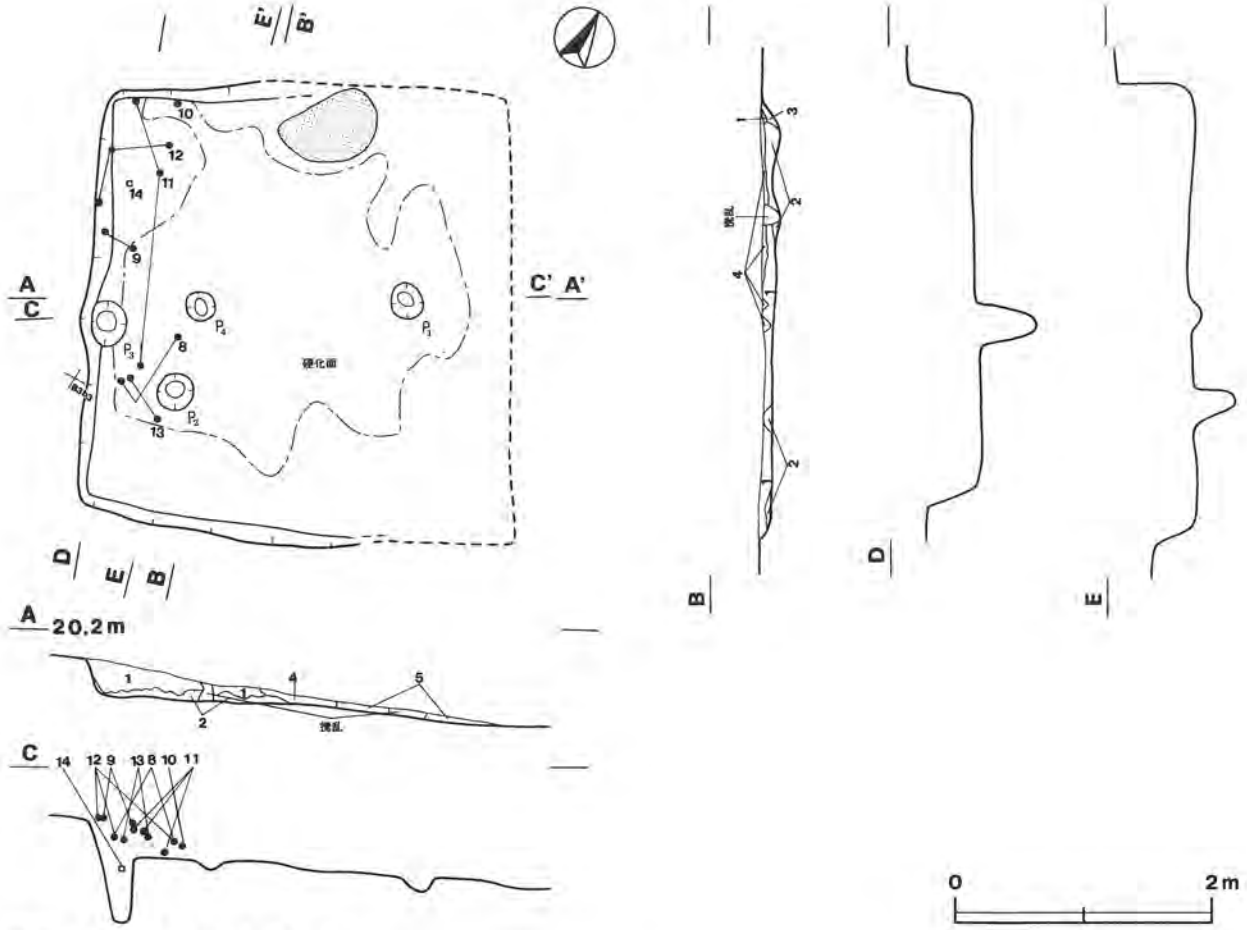
1層　黒　色　焼土小ブロック少量・粒子中量，炭化物・粒子少量，ローム大・小ブロック少量・粒子中量。
2層　黒　褐　色　ローム大・中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子中量。
3層　黒　褐　色　ローム大ブロック少量・中ブロック中量・小ブロック多量，ローム粒子多量，黒色土粒子中量。
4層　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム中・小ブロック・粒子少量。
5層　灰黄褐色　焼土小ブロック・粒子少量，ローム小ブロック少量・粒子中量，粘土中ブロック少量。

遺物　中央から西壁寄りの覆土下層及び床面から，中量の土師器や須恵器の破片が出土している。その他，流れ込みと思われる縄文式土器及び陶器の細片が少量出土している。8の高台付坏は中央から西壁寄りの覆土下層から，10の甕は北壁際の覆土下層から，11の坏は西壁沿いの覆土下層から出土している。14の銙帯の丸鞆は，北西コーナー付近の床面から出土している。

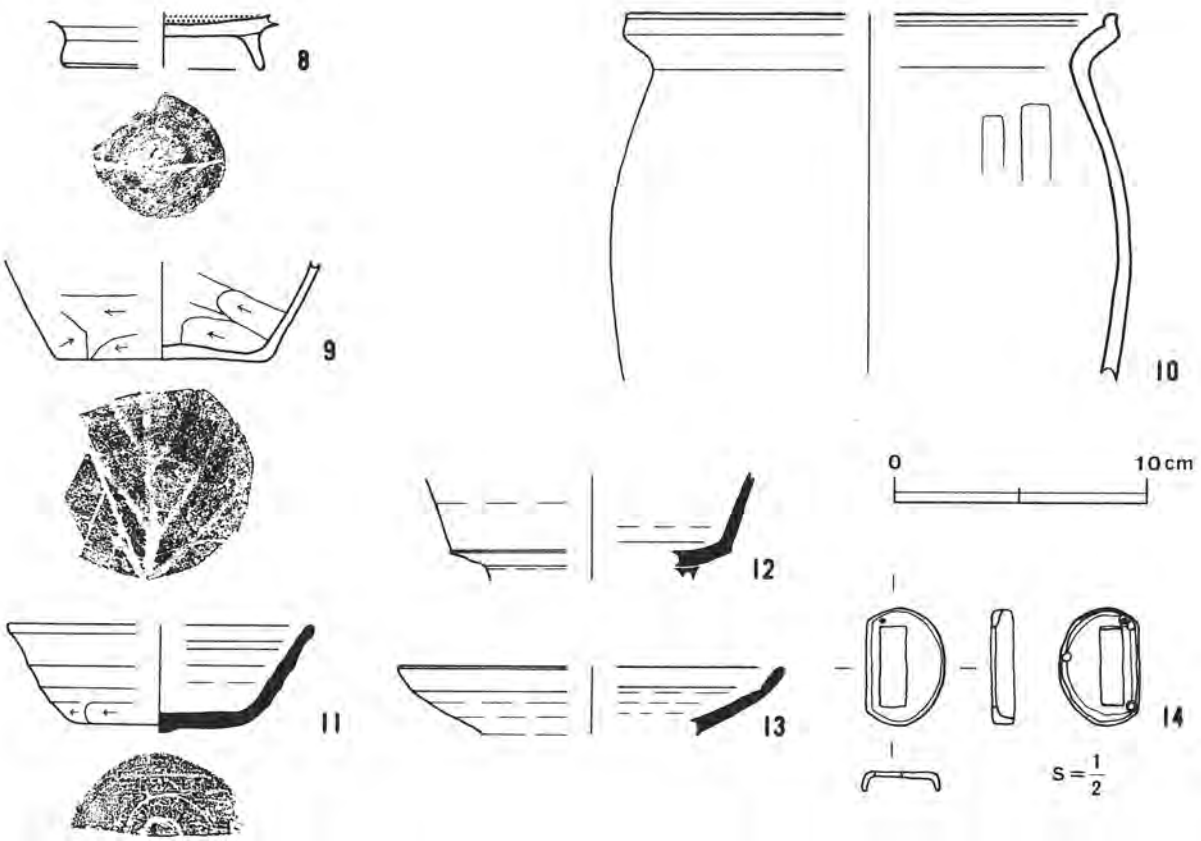
所見　本跡は，出土遺物等から9世紀前半の住居跡と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 8	高台付坏 土師器	B（2.2） D〔8.0〕 E　1.1	底部片。平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。	高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	P5 20% 西壁寄り覆土下層
9	甕 土師器	B（4.0） C〔8.2〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。底部に木葉痕。	砂粒・雲母・長石・石英 灰褐色 普通	P4 15% 西壁際覆土上層
10	甕 土師器	A〔19.2〕 B〔14.6〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し，口唇部を上方につまみ出す。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P6 20% 北壁際覆土下層
11	坏 須恵器	A〔11.8〕 B　4.1 C　6.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。体部下端ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，一方向手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰オリーブ色 普通	P7 30% 西壁沿覆土上層
12	高台付坏 須恵器	B（4.2）	底部から体部にかけての破片。平底で，高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P8 20% 北西コーナー付近覆土下層
13	盤 須恵器	A〔15.2〕 B（2.7）	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎して口縁部に至り，口縁部は上方に屈曲する。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P9 20% 南東コーナー付近覆土下層



第41図　第３号住居跡実測図



第42図　第３号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計　測　値				出　土　地　点	備　　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
14	銙帯（丸鞆）	3.1	2.1	0.5	8.5	北西コーナー付近床面	M4　銅製品

3　中世の遺構と遺物

中世では，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑，溝，道路跡，柱穴跡が確認されている。以下，確認された遺構と遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

確認された竪穴住居跡は3軒である。第1・4号住居跡は，耕作等により削平されているために，完全な姿を明らかにすることはできなかった。第2号住居跡は，比較的良好な遺存状態であった。

第1号住居跡（第43図）

位置　D2b_3区。

重複関係　本跡は，第3号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形　長軸［10.73］m，短軸［6.48］mで，やや平行四辺形に近い形になるものと思われる。

主軸方向　N－22°－E。

壁　壁高は最高で55cmである。北東コーナー部が明らかに確認できたが，北壁は西へ向かう途中で削平されて消え，東壁は壁高を低めながら南へ向かい調査エリア外へ延びていく。壁は約45°の角度で緩やかに立ち上がる。

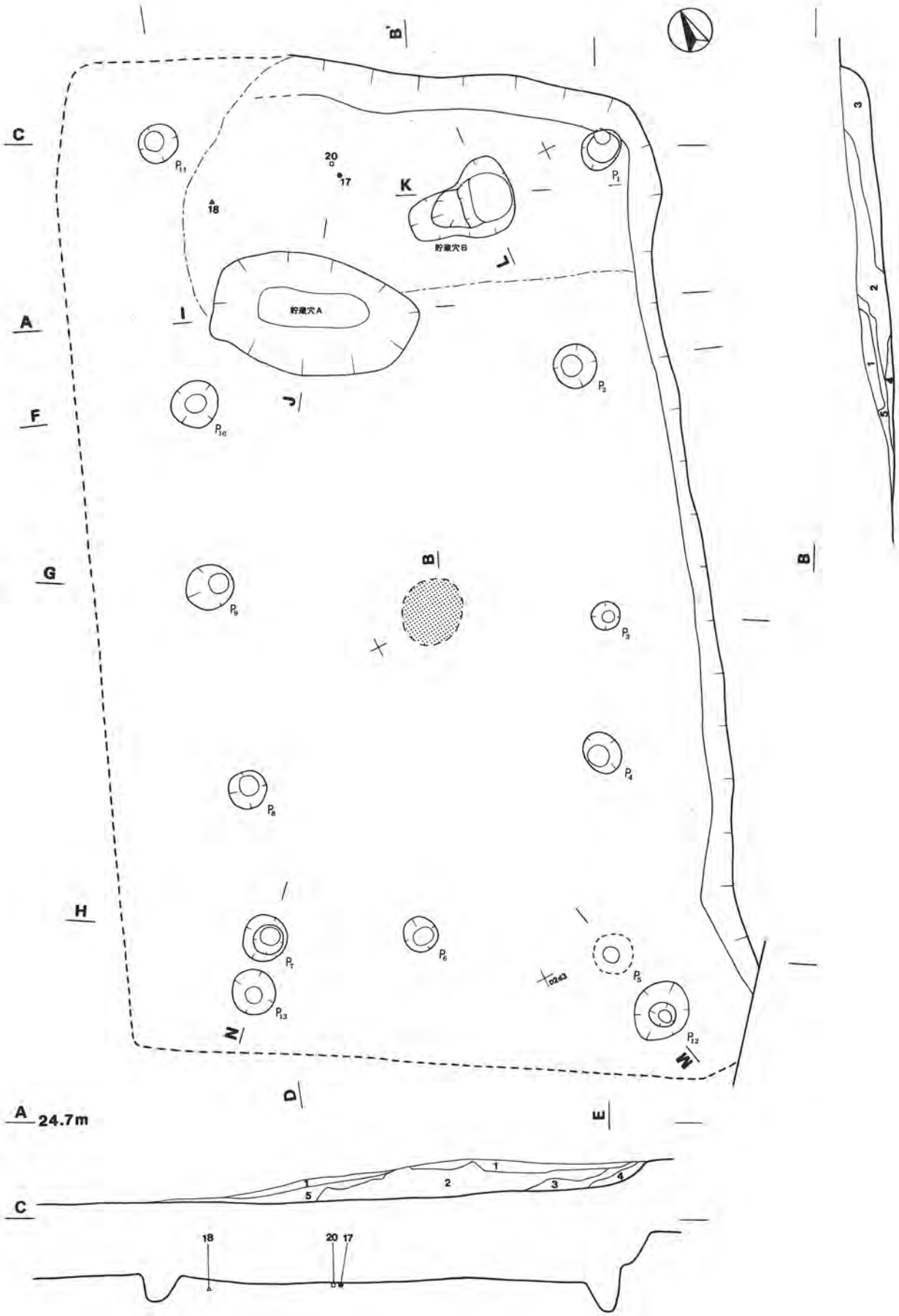
床　ほぼ平坦で，北部は北壁の際から4.80×2.00mの範囲で硬く踏み締められている。南部及び西部は，削平されている。

ピット　13か所。P_1は長径48cm，短径38cmの楕円形で，深さは45cmである。P_2は長径48cm，短径46cmの円形で，深さは45cmである。P_3は直径30cmの円形で，深さは33cmである。P_4は長径46cm，短径37cmの楕円形で，深さは85cmである。P_5は直径［45］cmの円形と推定され，深さは85cmである。P_6は直径38cmの円形で，深さは42cmである。P_7は長径51cm，短径47cmの円形で，深さは45cmである。P_8は直径41cmの円形で，深さは65cmである。P_9は長径53cm，短径48cmの楕円形で，深さは95cmである。P_{10}は長径53cm，短径48cmの楕円形で，深さは82cmである。P_{11}は長径43cm，短径40cmの円形で，深さは28cmである。P_1～P_{11}は主柱穴と考えられる。P_{12}は長径70cm，短径59cmの楕円形で，深さは60cm，P_{13}は長径50cm，短径46cmの円形で，深さは50cmである。P_{12}，P_{13}の性格は不明である。

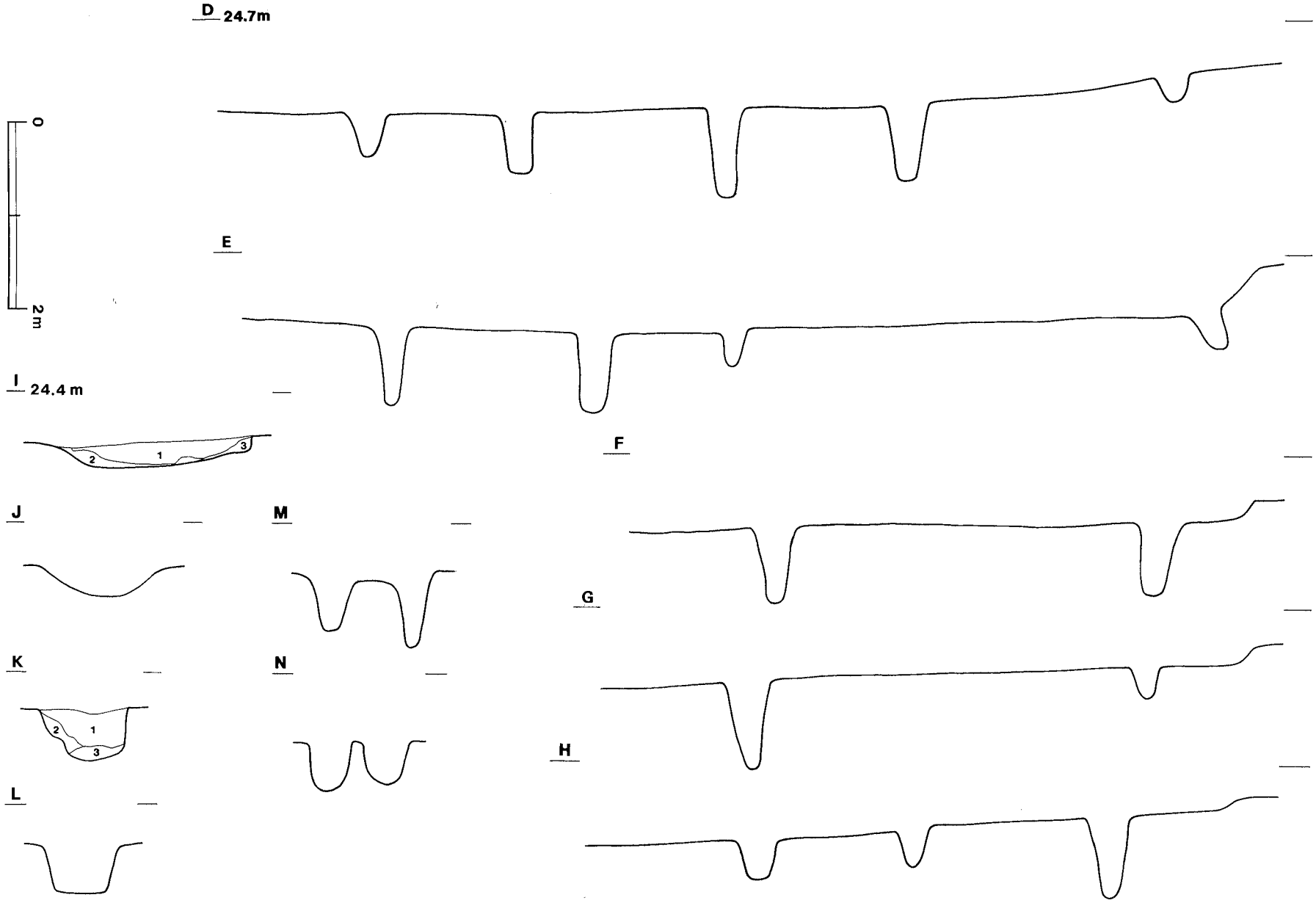
炉　中央に確認され，長径74cm，短径65cmの楕円形である。床面をわずかに掘り窪めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。

貯蔵穴　2基確認された。貯蔵穴Aは，硬化床面の南側に確認され，平面形は長軸2.15m，短軸0.80mの不整長方形で，深さは32cmである。断面形は皿状である。覆土は，3層からなり，1・2層にはロームの大・小ブロック及び粒子を少量含む黒褐色土が堆積し，1層には粘土の大ブロックが少量含まれている。3層は，褐色土である。貯蔵穴Bは，硬化床面の中央部で確認され，長軸1.16m，短軸0.86mの不定形で，深さは50cmである。断面形は，逆台形状である。覆土は，3層からなり，1層はロームの小ブロック及び粒子を少量含む黒褐色土，2層は黒色土粒子を少量含む黄褐色土，3層はローム小ブロック及び粒子を中量含む黒褐色土である。

2基の貯蔵穴は，硬化した床面の下から確認されている。ここでは，貯蔵穴として扱ったが，本跡が構築された以前に構築された土坑の可能性もある。



第43図　第１号住居跡実測図


D 24.7m
0
2m
E
I 24.4 m
1
2
3
F
J
M
G
K
N
1
2
3
H
L

覆土　5層からなり，自然に堆積したものと思われる。遺物は主に2層から出土している。

土層解説

1層　黒　褐　色　炭化粒子微量。ローム小ブロック・粒子少量。

2層　暗　褐　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量，ローム小ブロック・粒子少量。

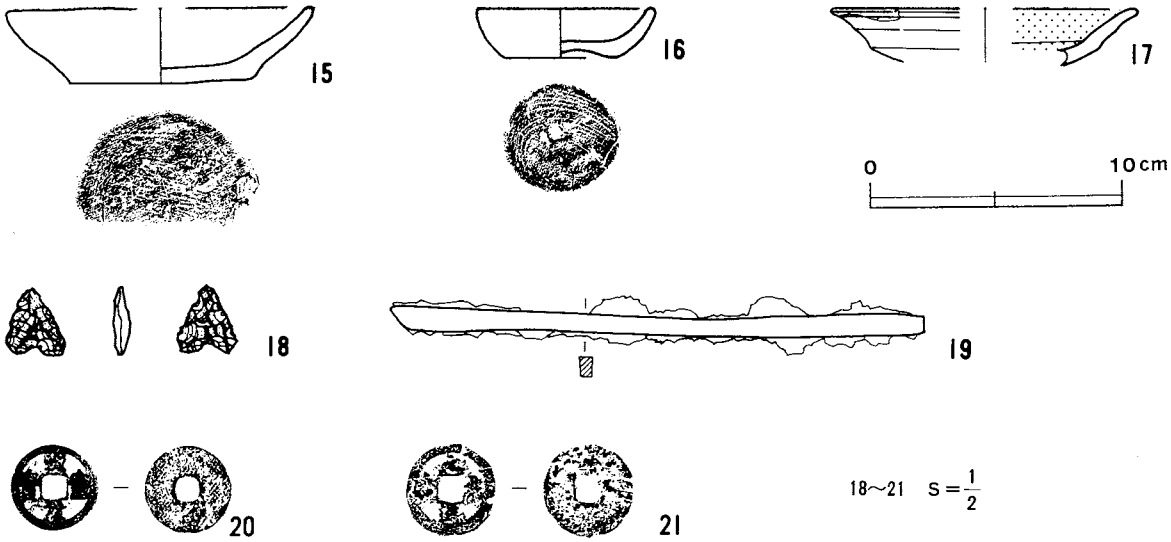
3層　黒　　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量，ローム粒子少量。

4層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量。

5層　赤　黒　色　ローム小ブロック・粒子微量。

遺物　北部及び東部を中心に出土している。16の小皿は北壁寄りの覆土中層から正位の状態で出土し，15の皿は北東コーナー近くの覆土上層から逆位の状態で出土している。17の皿は，北壁近くの覆土下層から出土している。18の石鏃は，北西コーナー近くの覆土下層から出土しているが，流れ込みと思われる。20の銅銭は，北壁近くの覆土下層から出土している。

所見　本跡は，出土遺物から15世紀後半から16世紀前半にかけてのものと考えられる。ここでは竪穴住居跡としてまとめてきたが，掘立柱建物跡として考えた方がよいかもしれない。それは，(1)壁の立ち上がりが約45°であり，一般に確認される竪穴住居跡のものとは異なる角度である。(2)床の硬化面は，中央部ではなく，北壁の際から確認されている。(3)土地の現況が傾斜地のため，平場を確保するのに東側を削り出した結果「壁」のようにみえるのではないか，という点である。ここで，本跡の上屋構造を想定してみると，硬化床面は土間として使用され，その南部は高床構造になっていて，炉跡として記述した所にはいろりがあったのではないだろうか。



第44図　第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値 (cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第44図 15	皿 土師質土器	A [11.9] B　3.0 C [7.0]	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で突き出し気味。体部，口縁部は僅かに内彎して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後，ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄橙色 普通	P 1 50% 北東コーナー付近覆土上層
16	小　皿 土師質土器	A　7.0 B　2.0 C　4.4	口縁部一部欠損。上げ底。体部，口縁部はやや内彎して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 2　95% 北壁寄り覆土中層 口縁部煤付着
17	皿 陶　器	A [12.0] B [2.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面灰釉施釉。	砂粒 (胎土)灰白色 (灰釉)灰オリーブ色 良好	P 3 10% 北壁付近覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
18	石鏃	1.8	1.7	0.5	0.7	黒曜石	北西コーナー付近覆土下層	Q 1

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
19	刀子	(14.1)	0.7	0.4	(11.8)	覆土中	M 3

図版番号	器種	初鋳年		出土地点	備考
		時代	年号		
20	熙寧元寶	北宋（中国銭）	1068年	北壁付近覆土下層	M 1
21	元豊通寶	北宋（中国銭）	1078年	P_2 覆土中	M 2

第２号住居跡（第45図）

位置　C2f$_4$区。

重複関係　本跡は，第35・36・37号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.31m，短軸4.60mの長方形。

主軸方向　N－22°－E。

壁　壁高は16cmで，ほぼ垂直に緩やかに立ち上がっていくものと思われる。

床　ほぼ平坦で，全面にわたり堅く締まっている。

ピット　10か所。P_1は長径［25］cm，短径［23］cmの円形と推定され，深さは109cmである。P_2は直径40cmの円形で，深さは82cmである。P_3は長径35cm，短径30cmの楕円形で，深さは74cmである。P_4は長径55cm，短径38cmの楕円形で深さは93cmである。P_5は直径［45］cmの円形と思われ，深さは［90］cmである。P_6は直径［40］cmの円形と思われ，深さは［98］cmである。P_7は長径46cm，短径43cmの円形で，深さは94cmである。P_8は一辺が46cmの隅丸方形で，深さは96cmである。これらP_1～P_8は，主柱穴と考えられる。P_9は長径[32]cm，短径[30]cmの円形と推定され，深さは98cm，P_{10}は直径33cmの円形で，深さは13cmである。P_9，P_{10}の性格は不明である。

炉　中央部に確認され，直径130cm，短径100cmの不正楕円形である。床面を約10cm掘り窪めた地床炉で，半径約15cmの範囲で赤褐色の焼土ブロックを確認した。

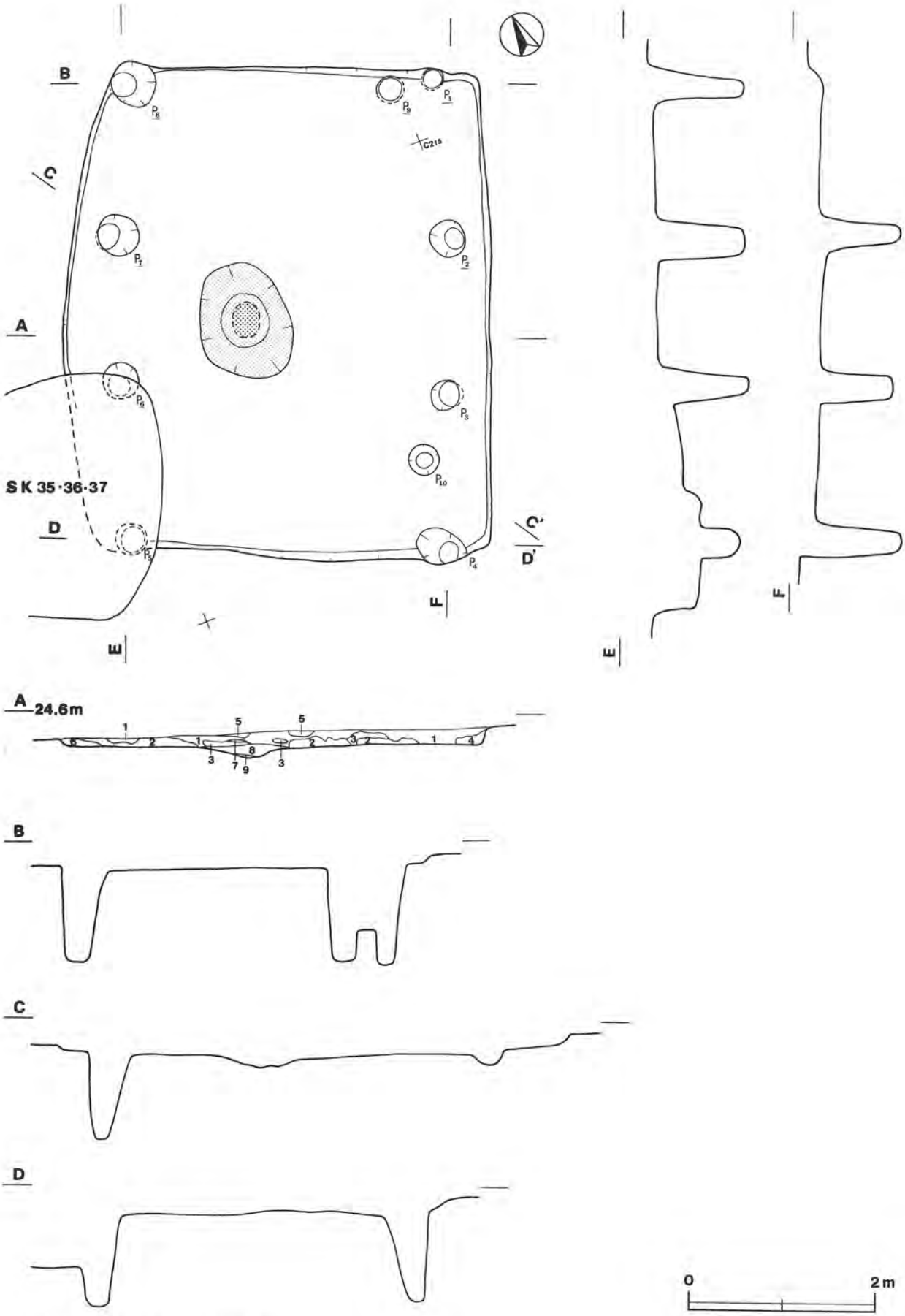
覆土　９層からなり，４・６層は自然堆積で，その他の層は人為的に堆積したものと思われる。遺物は少量ではあるが，中層から出土している。

土層解説

1層　暗褐色　焼土粒子少量。ローム大ブロック少量・中ブロック中量・小ブロック及び粒子多量。
2層　黒褐色　炭化物少量。ローム大・小ブロック少量，ローム粒子中量。
3層　褐色　ローム大ブロック多量・中ブロック少量・小ブロック及び粒子中量。
4層　黒褐色　ローム中・小ブロック少量，ローム粒子中量。
5層　黒褐色　炭化物少量。ローム中ブロック・粒子少量。
6層　黒褐色　炭化物少量。ローム大ブロック少量・中ブロック中量・小ブロック及び粒子多量。
7層　黒褐色　スコリア粒子少量。
8層　黒褐色　焼土大・中ブロック・粒子少量。炭化物少量。ローム大・中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子中量。
9層　赤褐色　焼土ブロック層。

遺物　流れ込みと思われる縄文式土器・土師器・須恵器の細片等が少量出土している。

所見　本跡は，出土遺物から15世紀後半から16世紀前半にかけてのものと考えられる。本跡は，第１号住居跡と同じように，中央部に炉があり，東壁及び西壁に沿った主柱穴列をもっている。また，床の硬化面が全面にわたるので，竪穴住居跡ではなく掘立柱建物跡として考えた方がよいかもしれない。



第45図　第２号住居跡実測図

第４号住居跡（第46図）

位置　D2a$_2$区。

規模と平面形　長軸［7.50］m，短軸［5.60］mで，やや平行四辺形に近い形になるものと思われる。

主軸方向　N－10°－E。

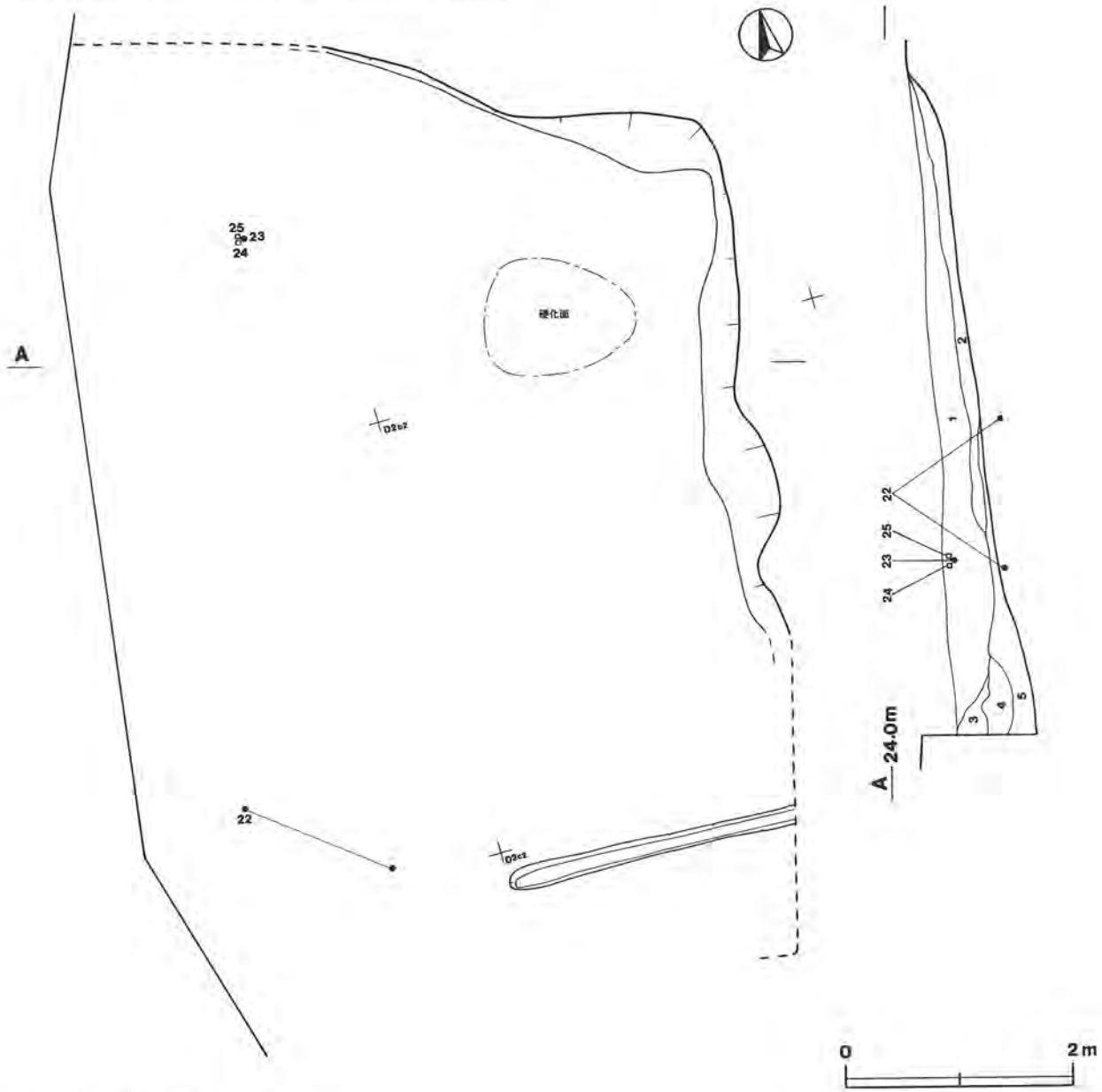
壁　壁高は最高で35cmである。北東コーナー部が明らかに確認できたが，北壁及び東壁は北東コーナーから先の方向へ向かう途中で削平されて消えてしまう。壁は，約30°の角度で緩やかに内彎しながら立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，南部及び西部は，削平されている。

覆土　５層からなり，自然に堆積したものと思われる。４・５層は黒褐色土で，４層は焼土粒子を微量含んでいる。遺物は，主に１・２層から出土している。

土層解説

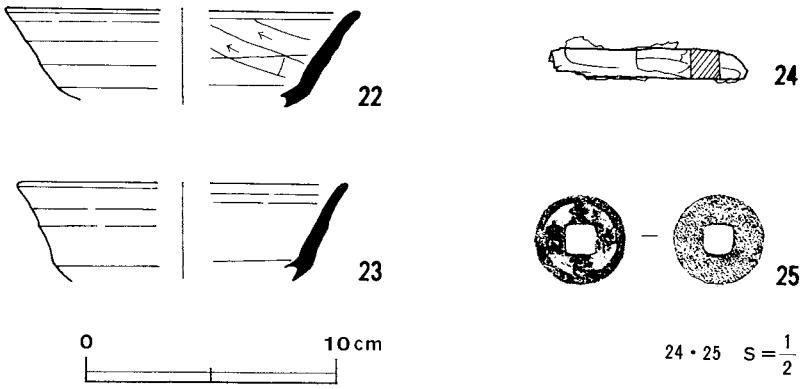
1層　暗　褐　色　炭化物微量。ローム大・中・小ブロック少量，ローム粒子中量。
2層　にぶい黄褐色　ローム大・中ブロック少量，ローム小ブロック中量，ローム粒子多量。
3層　褐　色　ローム大・中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子多量。



第46図　第４号住居跡実測図

遺物　縄文式土器・土師器・須恵器・陶器の細片，及び鉄滓・鉄製品・銅銭等が出土している。22の高台付坏は南部の床面から出土している。24の鉄製品と25の銅銭は北東コーナー近くの覆土上層から出土している。

所見　本跡の時期を明らかにすることはできなかった。本跡は，地山を明らかに掘り込んだ部分（北東コーナー）が確認され，その付近の床面の確認もでき，中世の時期の遺物も出土した。しかし，壁の立ち上がりが非常に緩やかであり，ピットや炉が確認できず，生活の跡があまり感じられない遺構である。調査では竪穴住居跡としてきたが，第1号住居跡に付属した平場と考えた方がよいのかもしれない。



第47図　第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 22	高台付坏 須恵器	A〔14.1〕 B（3.8）	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。体部内面ヘラ削り。	砂粒 灰白色 普通	P10 20% 南部床面
23	高台付坏 須恵器	A〔13.0〕 B（3.9）	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。	砂粒・長石 灰オリーブ色 良好	P11 20% 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
24	不明鉄製品	（5.2）	（0.8）	（0.8）	（7.8）	北東コーナー付近覆土上層	M5

図版番号	器種	初鋳年		出土地点	備考
		時代	年号		
25	至和元寶	北宋（中国銭）	1054年	北東コーナー付近覆土上層	M6

表5　滑川浜館遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)（長軸×短軸）	壁高(cm)	床面	ピット数			貯蔵穴	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
							総数	主柱穴	入口ピット					
1	$D2b_3$	N－22°－E	[平行四辺形]	[10.73]×[6.48]	55	平坦	13	11	…	2	炉	自然	土師質土器，陶器，刀子，銅銭	掘立柱建物跡への可能性有り，SK-3に重複
2	$C2f_4$	N－22°－E	長方形	5.31×4.60	16	平坦	10	8	…	…	炉	自然	縄文式土器，土師器，須恵器の細片	掘立柱建物跡への可能性有り，SK-35・36・37と重複
3	$B3a_3$	N－30°－W	[方形]	3.65×[3.32]	30	平坦	4	…	…	…	竈	不明	土師器，須恵器，銙帯（丸鞆）	
4	$D2a_2$	N－10°－E	[平行四辺形]	[7.50]×[5.60]	35	平坦	…	…	…	…	…	自然	須恵器，銅銭	SI-1の平場の可能性有り
5	B2j9	N－85°－W	…	…	…	平坦	4	4	…	…	炉	不明	…	SK-38，P-112・118・122・123・124・125・142・143と重複

(2) 掘立柱建物跡

確認された掘立柱建物跡は，３棟である。

第１号掘立柱建物跡（第49図）

位置　C2e_6区。

規模　柱穴数は，23か所（P_1～P_{23}）。東西４間（7.50）m・南北３間（5.76）m・西に１間（0.96）mの庇をもつ。１間は，南北方向で東第１柱列の場合1.190m，東西方向で南第１柱列の場合1.875mである。柱穴は，長径94～45cm，短径74～35cmで，円形及び楕円形である。深さは75～８cm，断面形は底面が平坦で壁がほぼ垂直に立ち上がるものが多い。

長軸方向　N－26°－E。

覆土　P_1～P_3，P_7，P_9，P_{10}，P_{13}，P_{15}，P_{16}，P_{18}～P_{23}は，炭化粒子を中～少量含む黒色土層が堆積している。P_6，P_8，P_{12}，P_{14}は，ロームの大～中ブロックを中量含む黒色土層が堆積している。

土層解説

P_6　1層　褐　色　炭化粒子少量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量。
　2層　褐　色　黒色土粒子微量。
　3層　明　褐　色　ローム大・小ブロック微量。
　4層　黒　色　炭化粒子少量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量。
P_7　1層　褐　色　ローム粒子微量。
　2層　黒　色　ローム中・小ブロック微量，ローム粒子少量。
　3層　黒　色　ローム大ブロック微量・粒子少量。
　4層　明　褐　色　黒色土粒子少量。
　5層　明　褐　色
　6層　黒　色　炭化粒子中量。貝殻粒子少量。
P_9　1層　灰　褐　色　炭化粒子少量。ローム大ブロック微量，ローム粒子少量。
　2層　黒　褐　色　ローム大ブロック多量，中・小ブロック中量。
P_{16}　1層　褐　色　ローム粒子微量。
　2層　黒　褐　色　炭化粒子少量。ローム大・小ブロック中量，ローム粒子微量。
　3層　褐　色　黒色土粒子少量。
　4層　黒　色　炭化粒子少量。ローム粒子微量。
P_{20}　1層　黒　色　炭化粒子中量。ローム大ブロック微量，ローム粒子少量。貝殻粒子少量。
　2層　黒　色　炭化粒子中量。ローム大ブロック微量，ローム粒子中量。貝殻粒子少量。
　3層　褐　色　ローム大ブロック・粒子微量。
P_{21}　1層　黒　色　炭化粒子中量。ローム極大ブロック中量，ローム大・小ブロック少量，ローム粒子微量。
　2層　黒　色　炭化粒子中量。ローム大・小ブロック少量，ローム粒子微量。
　3層　黒　褐　色　ローム大ブロック・粒子少量。
P_{22}　1層　黒　色　炭化粒子中量。ローム大・小ブロック少量，ローム粒子微量。
　2層　褐　色　黒色土粒子少量。
　3層　褐　色　ローム粒子微量。

遺物　26の鉄製品は，P_{23}の覆土中から出土したものである。P_1～P_3，P_5，P_7，P_9，P_{11}～P_{13}，P_{15}～P_{18}，P_{20}～P_{23}からは，小礫が多量に出土した。特に，P_{16}では78個（681.0g），P_{18}では53個（550.0g），P_{23}では181個（1662.0g）の小礫が出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から15世紀～16世紀にかけてのものと考えられる。本跡は，第２号掘立柱建物跡との軸線の差は２°であり，同時期の遺構と考えられる。

第１号掘立柱建物跡（P_{23}）出土遺物観察表（第48図）

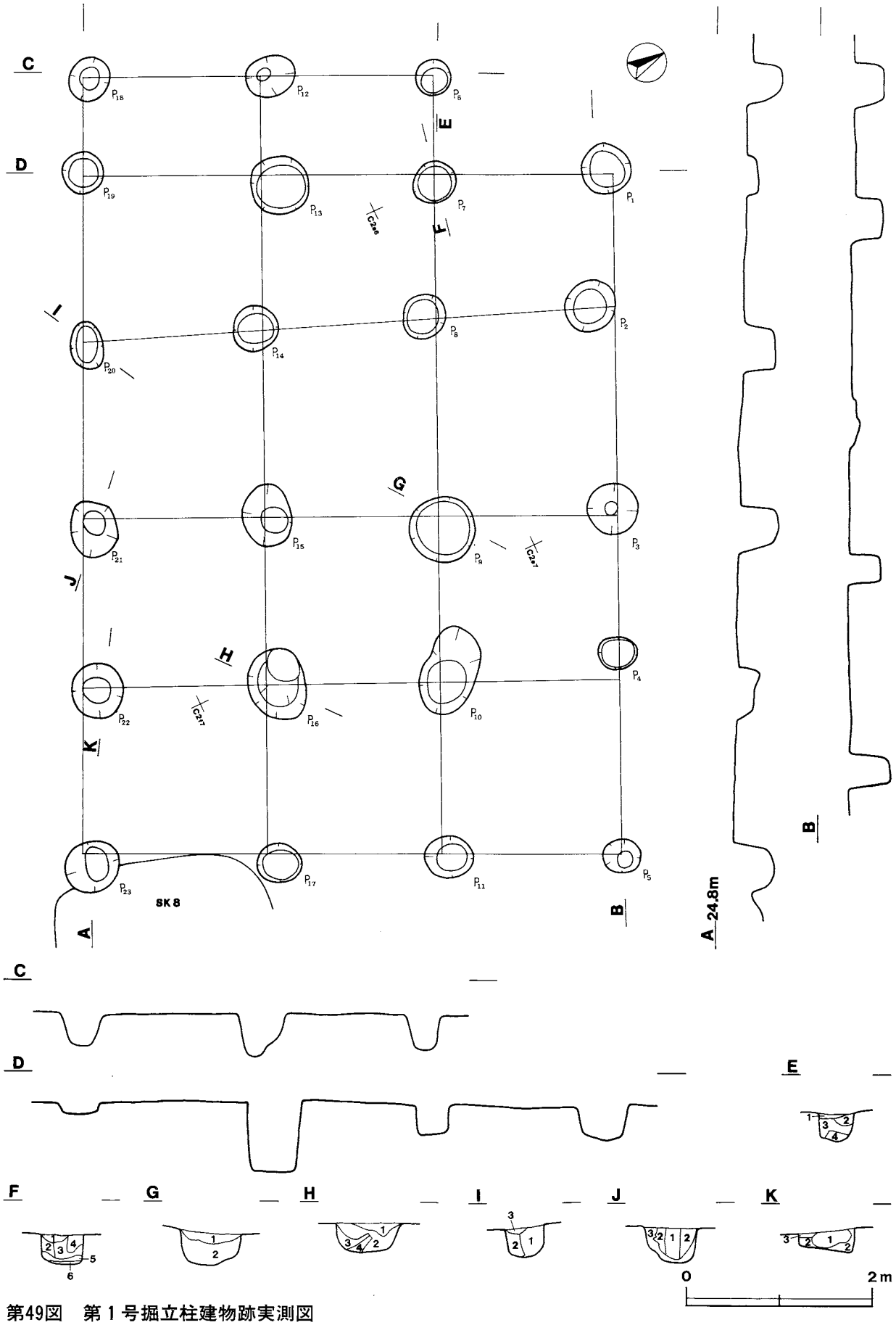
図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
26	不明鉄製品	3.4	（1.8）	0.7	（4.3）	覆土中	M7

S＝1/2

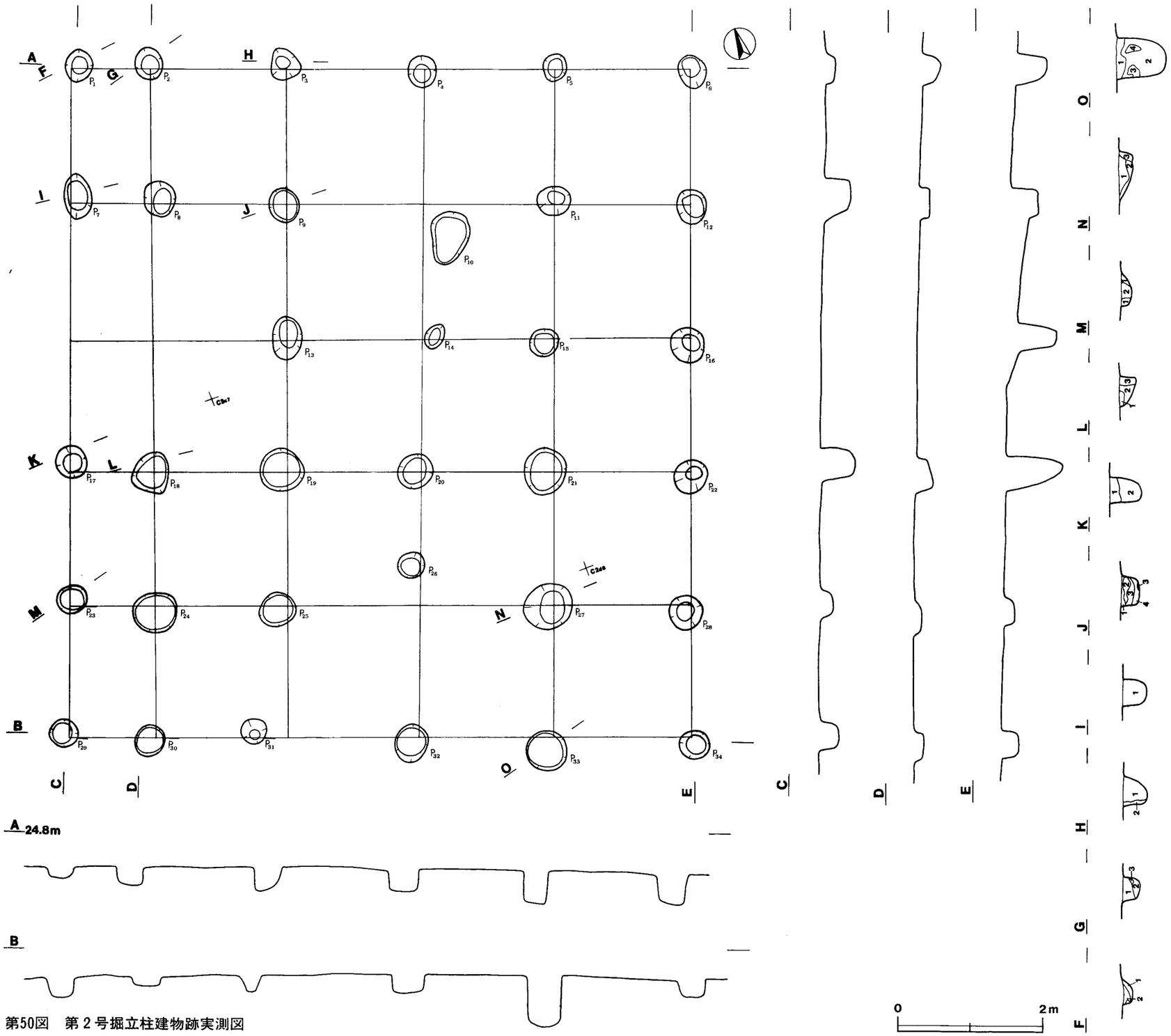
26　**第48図　第１号掘立柱建物跡出土遺物実測図**

第２号掘立柱建物跡（第50図）

位置　C2c_7区。



第49図　第１号掘立柱建物跡実測図



第50図　第２号掘立柱建物跡実測図

規模　柱穴数は，34か所（P_1～P_{34}）。東西４間（7.40）m・南北５間（9.28）m・西に１間（1.14）mの庇をもつ。１間は，南北方向で東第１柱列の場合1.856m，東西方向で南第１柱列の場合1.850mである。柱穴は，長径76～37cm，短径58～25cm，円形及び楕円形で，一部不定形のものもある。深さは77～10cm，断面形は底面が皿状で壁がほぼ垂直に立ち上がるものが多い。

主軸方向　N－24°－E。

覆土　P_1～P_4，P_7，P_9，P_{11}，P_{13}，P_{18}～P_{20}，P_{22}～P_{25}，P_{27}～P_{30}は，炭化粒子を中～少量含む黒色土層が堆積している。

土層解説

P_1	1層	黒色	炭化粒子少量。ローム大ブロック微量・粒子少量。貝殻粒子少量。
	2層	暗褐色	炭化粒子少量。ローム粒子中量。貝殻粒子少量。
P_2	1層	褐色	ローム粒子微量。
	2層	黒色	炭化粒子少量。ローム大ブロック微量・粒子少量。貝殻粒子少量。
	3層	褐色	ローム小ブロック少量。
P_3	1層	黒色	炭化粒子少量。ローム大ブロック微量・粒子少量。貝殻粒子少量。
	2層	褐色	炭化粒子微量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量。
P_7	1層	暗褐色	炭化粒子少量。ローム大・小ブロック及び粒子微量。
P_9	1層	黒色	ローム大ブロック・粒子微量。
	2層	明褐色	黒色土粒子少量。
	3層	明褐色	黒色土粒子微量。
	4層	黒色	炭化粒子少量。ローム大ブロック微量，ローム粒子少量。
P_{17}	1層	明褐色	ローム大ブロック少量。黒色土粒子少量。
	2層	褐色	
P_{18}	1層	明褐色	
	2層	黒色	炭化粒子少量。ローム大ブロック微量，ローム粒子少量。貝殻粒子少量。
	3層	褐色	ローム大ブロック微量。黒色土粒子少量。
P_{23}	1層	黒色	ローム大ブロック中量・粒子微量。
	2層	黒色	炭化粒子少量。ローム大ブロック微量・粒子少量。
P_{27}	1層	黒色	炭化粒子中量。ローム大ブロック微量・粒子少量。貝殻粒子少量。
	2層	暗褐色	ローム大ブロック中量。黒色土粒子少量。
	3層	黒色	ローム大ブロック・粒子微量。
P_{33}	1層	褐色	ローム粒子微量。
	2層	黒色	炭化粒子中量。ローム大ブロック微量・粒子少量。貝殻粒子少量。
	3層	褐色	
	4層	黒色	ローム極大ブロック多量，ローム大ブロック・粒子中量。

遺物　P_1～P_9，P_{11}～P_{14}，P_{16}～P_{19}，P_{21}～P_{30}，P_{32}，P_{33}からは，柱を固定するために使用したと思われる小礫が多量に確認された。特に，P_9では46個（549.2g），P_{18}では41個（395.3g）の小礫が出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から15世紀～16世紀にかけてのものと考えられる。本跡と第１号掘立柱建物跡との軸線の差は２°である。

第３号掘立柱建物跡（第51図）

位置　B2i_8区。

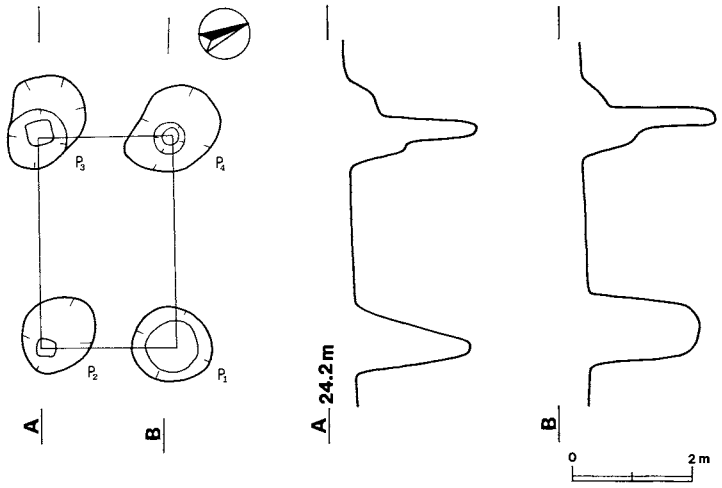
規模　柱穴数は，４か所（P_1～P_4）。東西１間（1.82）m・南北１間（1.12）mである。P_1は，長径70cm，短径66cmの円形で，深さは90cmである。P_2は，長径64cm，短径56cmの楕円形で，深さは94cmである。P_3は，長径81cm，短径64cmの不整楕円形で，深さは106cmである。P_4は，長径84cm，短径56cmの不整楕円形で，深さは111cmである。

主軸方向　N－30°－E。

覆土　P_1～P_4ともに単層で，炭化粒子中～少量・貝殻粒子少量・小礫中～少量含む黒色土が堆積している。

遺物　P_1からは，20個（237.7g）の小礫が出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から15世紀～16世紀にかけてのものと考えられる。P_2～P_4では，一辺が10～15cmの方形の柱痕が確認でき，角柱を据えていたことがわかった。本跡を，１間×１間の規模で整理したが，本跡の東側にある柱穴群との関連も予想され，もっと大きな規模の掘立柱建物跡である可能性がある。しかし，覆土の状態が共通したり，方形の柱痕が確認されたものは付近になく，明確な関連を見いだすことはできなかった。



第51図　第３号掘立柱建物跡実測図

(3)　土坑

当遺跡からは36基の土坑が確認されている。ここでは，中世と判断した10基について説明する。なお，その他の土坑については，第４項の(2)で扱った。

第５号土坑（第54図）

位置　C$2h_7$区。

規模と平面形　長軸1.85m，短軸1.33mの隅丸長方形で，深さは23cmである。

長軸方向　N－69°－W。

壁面　やや内彎しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

ピット　３か所。P_1は，長径31cm，短径28cmの楕円形で，深さは15cmであり，壁を掘り込んでいる。P_2は，長径29cm，短径24cmの楕円形で，深さは20cmであり，P_3に接している。P_3は，長径25cm，短径20cmの楕円形であり，P_2に接している。P_1～P_3の性格は不明である。

覆土　１層で，ロームの大ブロックを少量，小ブロックを中量含む黒褐色土である。

遺物　流れ込みと思われる縄文式土器・土師器の細片が少量出土している。

所見　本跡は，土坑として調査をしてきたが，小竪穴状遺構と考えた方がよいかもしれない。

第６号土坑（第54図）

位置　C$2g_6$区。

規模と平面形　長軸1.80m，短軸1.64mの隅丸方形で，深さは30cmである。

長軸方向　N－73°－W。

壁面　内彎しながら立ち上がっている。

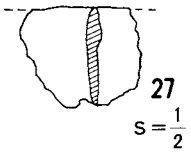
床　ほぼ平坦である。

ピット　１か所。P_1は，長径38cm，短径34cmの不整楕円形で，深さは39cmであり，壁を掘り込んでいる。

覆土　２層である。１層は，ローム粒子を多量に含む褐色土である。２層は，ローム粒子を少量，粘土粒子を少量含む黒褐色土である。

遺物　27の鉄製品は覆土中から出土している。その他,流れ込みと思われる土師器片が極少量出土している。

所見　本跡は,土坑として調査してきたが,小竪穴状遺構と考えた方がよいかもしれない。



第52図　第6号土坑出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表（第52図）

図版番号	器　種	計　測　値				出　土　地　点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
27	不明鉄製品	3.2	2.7	0.4	6.3	覆　土　中	M9

第8a号土坑（第54図）

位置　C2f_7区。

重複関係　本跡は，第8b号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸2.05m，短軸1.86mの隅丸方形で，深さは35cmである。

長軸方向　N－5°－E。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

ピット　2か所。P_1は，長径46cm，短径41cmの不整楕円形で，深さは約25cmであり，壁を掘り込んでいる。P_2は，長径27cm，短径20cmの楕円形で，深さは約10cmである。

遺物　出土していない。

所見　本跡は，土坑として調査してきたが，小竪穴状遺構と考えた方がよいかもしれない。

第8b号土坑（第54図）

位置　C2f_7区。

重複関係　本跡は，第8a号土坑を掘り込んでいる。

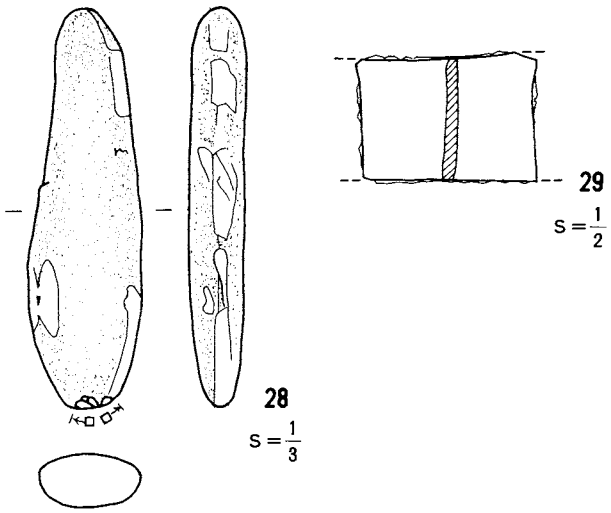
規模と平面形　長軸2.58m，短軸2.20mの隅丸台形状で，深さは26cmである。

長軸方向　N－22°－E。

壁面　南部は僅かに内彎しながら緩やかに立ち上がり，北部はほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，南西部では硬化した貼床が確認された。

ピット　2か所。P_1は，長径54cm，短径50cmの楕円形で，深さは16cmであり，壁を掘り込んでいる。P_2は，長径28cm，短径21cmの楕円形で，深さは23cmである。



第53図　第8b号土坑出土遺物実測図

覆土　4層からなり，人為的に堆積したものと思われる。4層は，貼床として使用されたと思われ，非常に硬化しており，ローム大ブロックを多量に含む暗褐色土である。

土層解説

1層　黒　褐　色　ローム粒子中量。

2層　暗　褐　色　炭化粒子微量。ローム中ブロック中量・小ブロック多量。

3層　極暗赤褐色　ローム粒子多量。

遺物　28の石器及び29の鉄製品は，覆土中から出土している。

所見　本跡は，土坑として調査してきたが，小竪穴状遺構と考えた方がよいかもしれない。

第8b号土坑出土遺物観察表（第53図）

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
28	不明石器	15.9	4.5	2.4	227.3	砂岩	覆土中	Q3

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
29	不明鉄製品	(4.8)	3.3	0.4	(19.3)	覆土中	M10

第9号土坑（第54図）

位置　C2e_5区。

規模と平面形　長軸1.83m，短軸1.79mの不定形で，深さは5cmである。

長軸方向　N－58°－W。

壁面　極めて緩やかに立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

ピット　2か所。P_1は，直径46～44cmの円形で，深さは52cmであり，壁を掘り込んでいる。P_2は，直径47～45cmの円形で，深さは34cmであり，壁を掘り込んでいる。

遺物　小礫が1点出土している。

所見　本跡は，土坑として調査してきたが，小竪穴状遺構と考えた方がよいかもしれない。

第22号土坑（第54図）

位置　C2a_7区。

規模と平面形　長軸1.70m，短軸1.38mの隅丸長方形で，深さは23cmである。

長軸方向　N－2°－W。

壁面　緩やかに立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

ピット　1か所。P_1は，長径53cm，短径43cmの楕円形で，深さは25cmであり，壁を掘り込んでいる。

覆土　5層であり，人為的に堆積したものと思われる。

土層解説

1層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量。
2層　褐　　色　ローム粒子微量。
3層　褐　　色
4層　褐　　色　黒色土粒子少量。
5層　暗　褐　色　ローム小ブロック中量。

遺物　流れ込みと思われる縄文式土器・土師器の細片が少量出土している。

所見　本跡は，土坑として調査してきたが，小竪穴状遺構とした方がよいかもしれない。

第27号土坑（第54図）

位置　C2a_0区。

重複関係　本跡は，第4号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.93m，短軸1.79mの隅丸長方形で，深さは48～40cmである。

長軸方向　N－28°－E。

壁面　やや外に開きながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。壁際には，東壁下の一部を除いて溝が回っている。上幅33～15cm，深さ3～5cmで，断面形は「U」字状である。

ピット　1か所。P_1は，長径24cm，短径20cmの楕円形で，深さは44cmである。性格は不明である。

遺物　床面から少量の炭化物が出土している。その他，流れ込みと思われる土師器の細片が少量出土している。

所見　本跡は，形状から判断すると竪穴状遺構と考えることもできる。性格は不明である。

第38号土坑（第54図）

位置　C$2a_9$区。

規模と平面形　長軸3.22m，短軸1.74mの隅丸長方形で，深さは75～90cmである。

長軸方向　N－55°－E。

壁面　内彎しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

遺物　陶器の細片が2点出土している。

所見　本跡は，覆土がロームであったため遺構確認に難航し土層セクションの観察ができなかったが，覆土には，ローム大・中・小ブロックが多量に含まれており，人為的に堆積したものと思われる。底面からは，凝灰岩の大石（約30㎠）が2個出土し，一部焼けた跡が確認できた。本跡の性格は，火葬墓の可能性も考えられるが，確定できない。

第39号土坑（第54図）

位置　C$3a_1$区。

重複関係　本跡は，第4号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸2.86m，短軸2.41mの隅丸長方形で，深さは49cmである。

長軸方向　N－31°－E。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。壁際には，溝が回っている。上幅27～19cm，深さ5～3cm，断面形は皿状である。

覆土　8層からなり，すべての層にロームブロック及び粒子を含み，人為的に堆積したものと思われる。

土層解説

1層　暗　褐　色　ローム大・中・小ブロック・粒子中量。黒色土小ブロック多量。

2層　褐　　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量。黒色土小ブロック中量。

3層　黒　褐　色　ローム大ブロック少量，ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・粒子多量。黒色土小ブロック中量。

4層　黒　褐　色　ローム大・中・小ブロック・粒子中量。黒色土小ブロック多量。

5層　褐　　色　ローム大ブロック中量，ローム中・小ブロック・粒子多量。黒色土小ブロック少量。

6層　黄　褐　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量。黒色土小ブロック少量。

7層　褐　　色　ローム大ブロック少量，ローム中・小ブロック・粒子多量。黒色土中ブロック少量。

8層　黄　褐　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量。黒色土中ブロック少量。

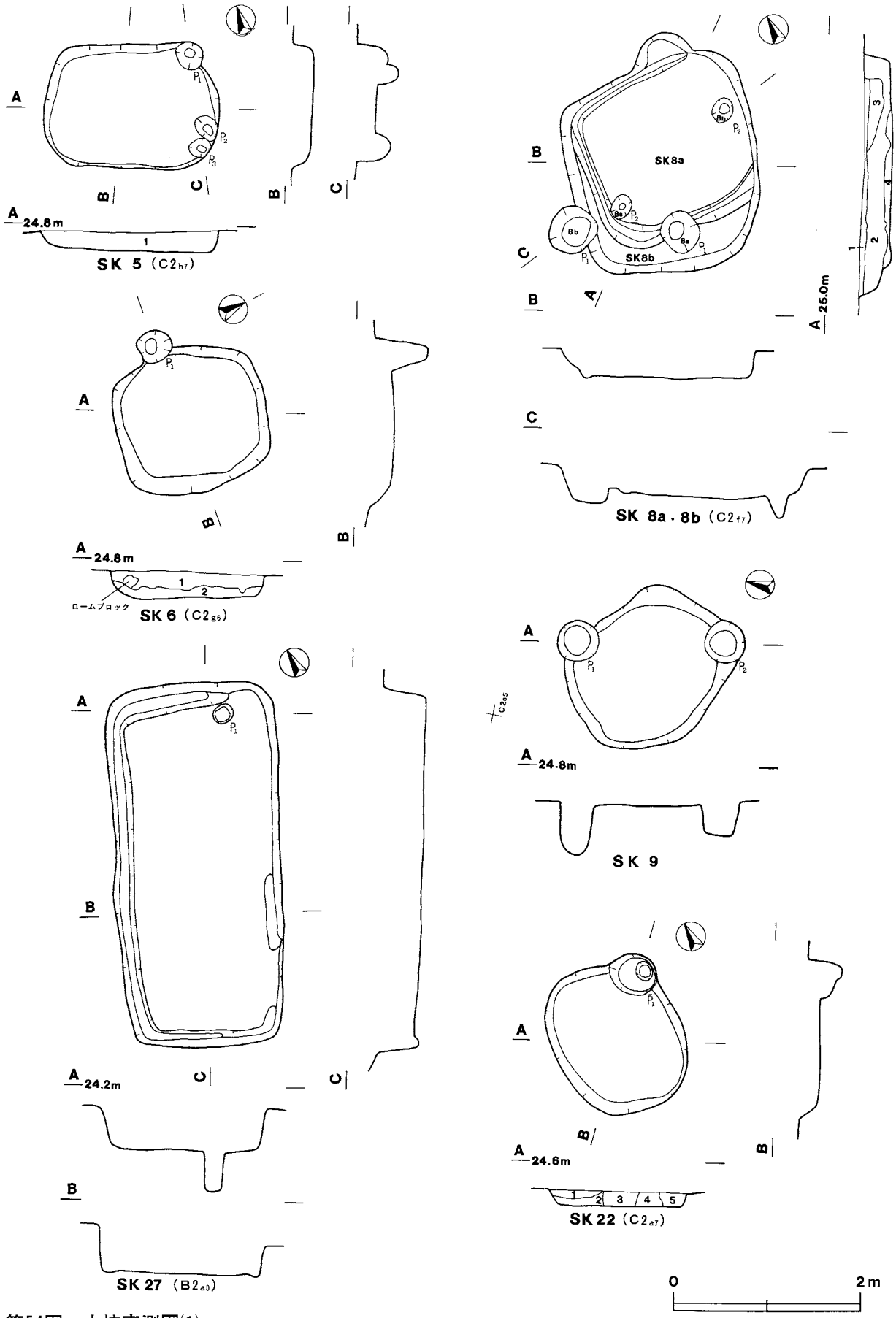
遺物　床面から少量の炭化物が出土している。

所見　本跡は，形状から判断すると竪穴状遺構と考えることもできる。

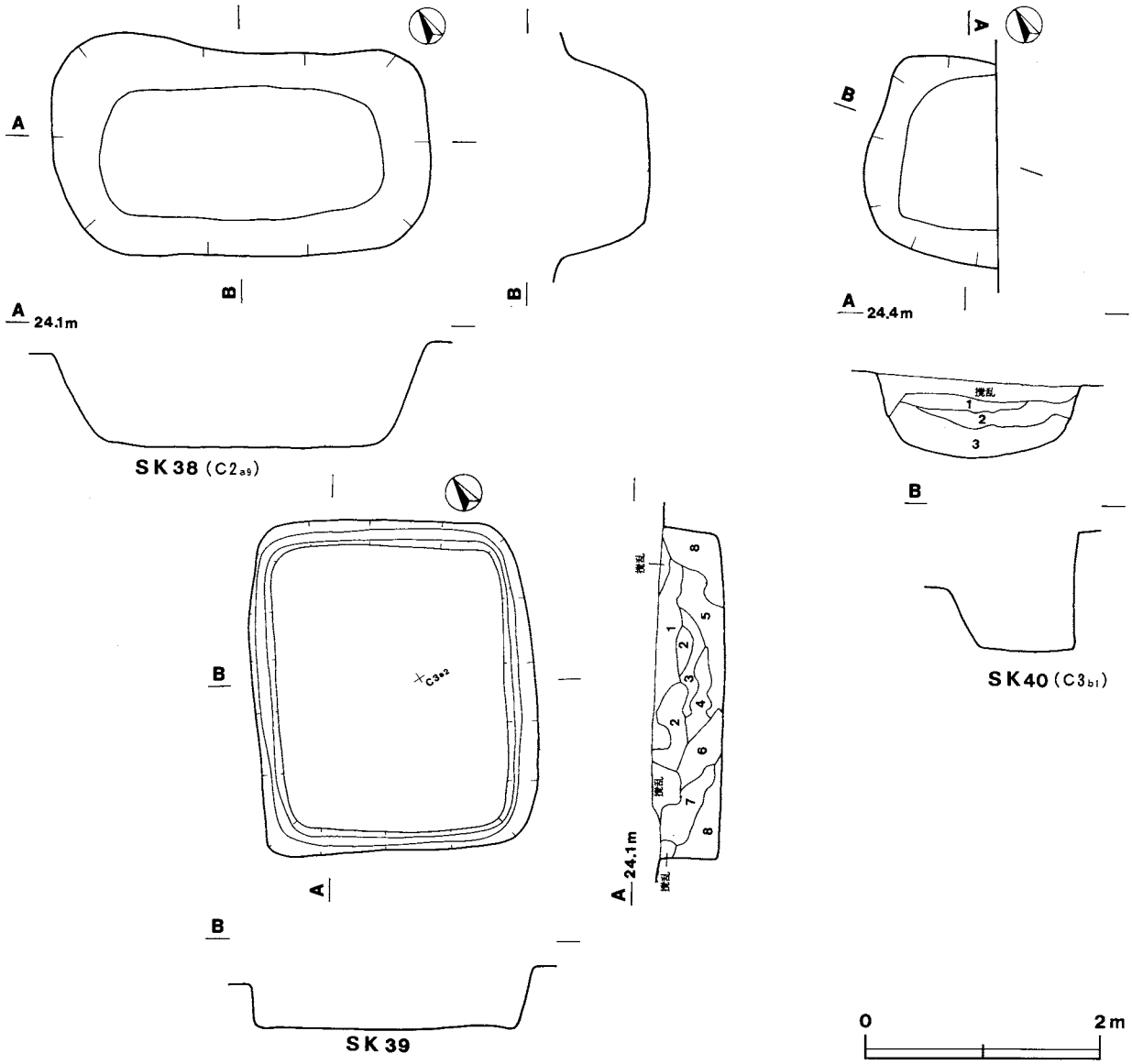
第40号土坑（第54図）

位置　C$3b_1$区。

規模と平面形　長軸［1.10］m，短軸（1.75）mで，隅丸長方形になるものと推定される。深さは，（54）cmである。


SK 5 (C2h7)
SK 8a・8b (C2f7)
SK 6 (C2g6)
ロームブロック
SK 9
SK 27 (B2a0)
SK 22 (C2a7)
SK8a
SK8b
24.8m
25.0m
24.2m
24.6m
0
2m

第54図　土坑実測図(1)



第55図　土坑実測図(2)

長軸方向　N－52°－W。

壁面　内彎しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

覆土　3層からなり，人為的に堆積したものと思われる。

土層解説

1層　黒　褐　色　焼土粒子・炭化物少量。ローム大ブロック少量，ローム中・小ブロック・粒子中量。

2層　褐　色　ローム大・中・小ブロック・粒子多量。

3層　暗　褐　色　焼土粒子・炭化物・ローム大ブロック少量。ローム中・小ブロック中量，ローム粒子多量。黒色土粒子中量。

遺物　流れ込みと思われる縄文式土器・土師器の細片が少量出土している。

所見　本跡は，調査エリア外へ延びているために全体を明らかにすることはできなかったが，確認できた範囲での形状から推定すると，第38号土坑と類似している。覆土下層及び床面から，多数の大・中礫が出土している。また，焼土粒子や炭化物が確認され，床面が焼けていたことから，火葬墓の可能性も考えられるが，確定できない。

(4) 溝

確認された溝は，１条である。

第４号溝（第56図，付図２）

位置　B2j_7区～C3b_1区。

重複関係　本跡は，第27号土坑に掘り込まれ，第39号土坑を掘り込んでいる。

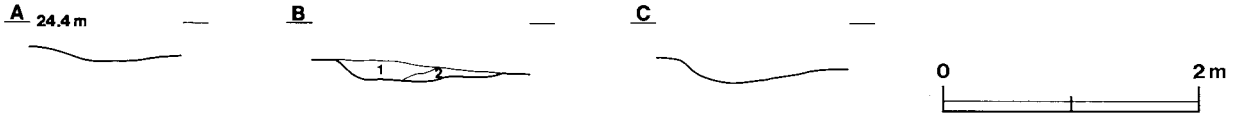
規模と形状　全長（17.72）m，発掘できた範囲の最大値は，上幅1.50m，下幅1.16m，深さ18cmで，断面は皿状である。

方向　B2i_8区から東南東方向へ，ほぼ直線的に延び，調査区外へさらに延びていく。

覆土　２層からなる。１・２層ともに褐色土で，１層は炭化物・ローム中ブロックを少量，ローム小ブロック・粒子を中量含み，２層は炭化粒子・ローム中ブロックを少量，ローム小ブロック・粒子を多量に含んでいる。

遺物　陶器の細片が１片出土している。その他，流れ込みと思われる土師器片・須恵器片が少量出土している。

所見　本跡は，重複関係から中世のものと考えられる。



第56図　第４号溝断面・土層実測図

(5) 道路跡

確認された道路跡は１条であるが，中央部は削平されて２条に分かれている。南部を第１号道路跡《A》とし，北部を第１号道路跡《B》として，調査を進めてきた。

第１号道路跡（第57・58図，付図２）

位置　《A》はB3f_1区～B3d_2区，《B》はB3c_3区～B3b_5区である。

規模と形状　全長は，《A》は（8.80）m，《B》は（8.50）m，中央部の削平された部分を含めると（25.00）mである。発掘できた範囲の最大値は，上幅3.09m，下幅1.10m，深さ37cm，断面は大きく開いた「V」字状である。

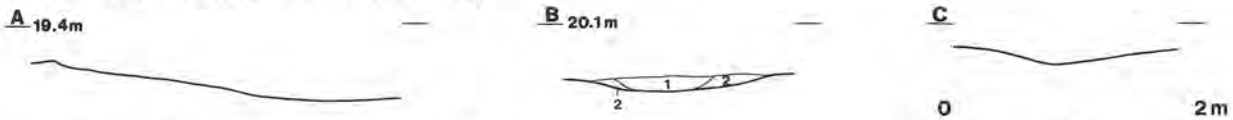
方向　B3f_1区から北東方向へ，大きな弧を描きながら，しかも緩やかに傾斜しながら延び，B3b_5区で調査エリア外へ延びていく。

覆土　２層からなり，自然に堆積したものと思われる。１層は，ローム小ブロックを少量・ローム粒子を微量含む黒色土である。２層は，ローム大ブロックを微量，ローム粒子を中量含む黒褐色土である。遺物は各層から出土している。

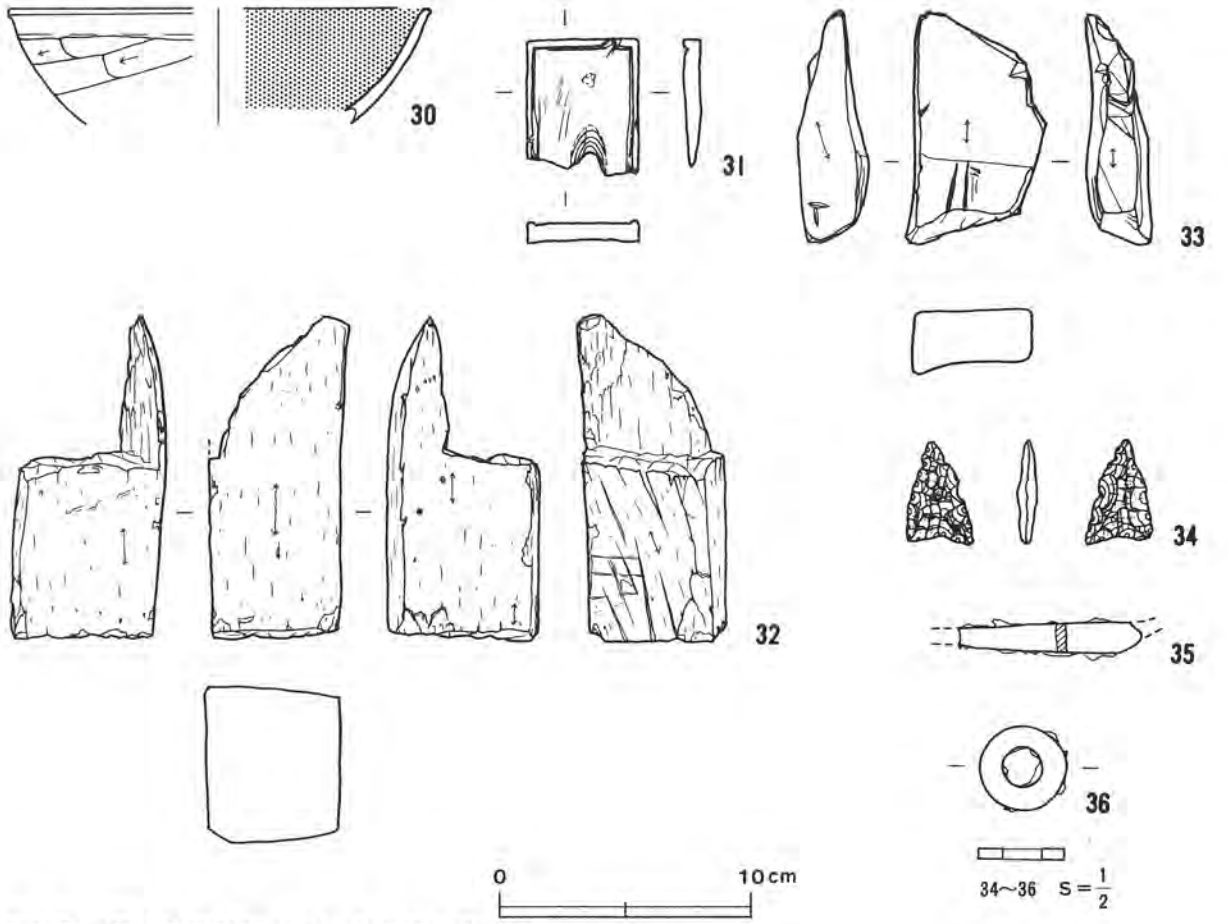
遺物　陶磁器の細片・石製品・鉄製品が出土し，その他流れ込みと思われる縄文式土器・土師器・須恵器の細片が出土している。31の硯石，32・33の砥石，35・36の鉄製品は《A》の覆土中から出土している。

所見　本跡は，出土遺物から中世の道路跡と考えられる。本跡の下幅部分は，非常に硬化しており，長期間にわたって使用されたものと考えられる。

第57図　第１号道路跡《Ａ》断面実測図



第58図　第１号道路跡《Ｂ》断面実測図



第59図　第１号道路跡《Ａ》出土遺物実測図

第１号道路跡《Ａ》出土遺物観察表

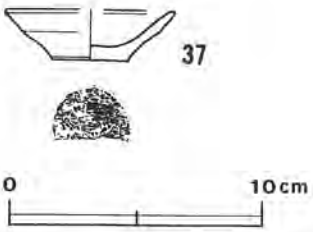
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 30	坏 土師器	A〔16.5〕 B（4.6）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口唇部は僅かに外反する。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P16 20% B区の覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
31	硯石	(5.4)	4.4	0.9	(45.9)	粘板岩	《Ａ》の覆土中	Q8
32	砥石	(13.0)	5.5	6.2	(525.2)	硬砂岩	《Ａ》の覆土中	Q6
33	砥石	(9.2)	5.2	2.4	(124.9)	硬砂岩	《Ａ》の覆土中	Q12
34	石鏃	2.8	1.8	0.4	(2.2)	チャート	《Ａ》の覆土中	Q7

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
35	不明鉄製品	(4.8)	0.8	0.3	(3.6)	《Ａ》の覆土中	M17
36	不明鉄製品	2.2	2.2	0.3	3.9	《Ａ》の覆土中	M19

(6) 柱穴跡（第73図，付図２）

調査エリア中央部から南部にかけて（第１号掘立柱建物跡の南側，第３号掘立柱建物跡の東側），252基の柱穴跡が確認された。柱穴跡間の関連は把握できなかったが，何らかの施設があったことは確実である。時期は，規模・形状・覆土等から判断して，第１・２・３号掘立柱建物跡と同時期，あるいは近い時期の柱穴跡と考えられる。



第60図　第177ピット出土遺物実測図

平面形　188基が円形，28基が楕円形，４基が隅丸方形，１基が不整楕円形である。

長径　最長160cm（P-251），最短22cm（P-114），平均44.8cmである。

深さ　最深122cm（P-141），最浅12cm（P-208），平均59.0cmである。

覆土　ロームの大～中ブロックを中量含む黒色土層が堆積する柱穴跡－90基（そのうち，小礫が堆積する柱穴跡が13基），ローム粒子を中量含む黒色土層が堆積する柱穴跡－18基（小礫が堆積する柱穴跡が５基），炭化粒子を中～少量含む黒色土層が堆積する柱穴跡－１基（小礫を堆積している）である。

遺物　37の小皿は，P-177の覆土上層から正位の状態で出土したものである。

第177号ピット出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 37	小皿 土師質土器	A〔6.5〕 B 2.0 C 3.0	底部から口縁部にかけての破片。平底で突出気味。体部及び口縁部は僅かに内彎して立ち上がる。	水挽き成形。	雲母・長石 にぶい黄橙色 普通	P17 45% 覆土上層

(7) 城館跡

当遺跡の現況を観察すると，北西側の傾斜地は，自然地形ではなく，人為的に掘り込まれた可能性があった。そこで，傾斜地に３本のトレンチを入れて土層の観察をおこなった。

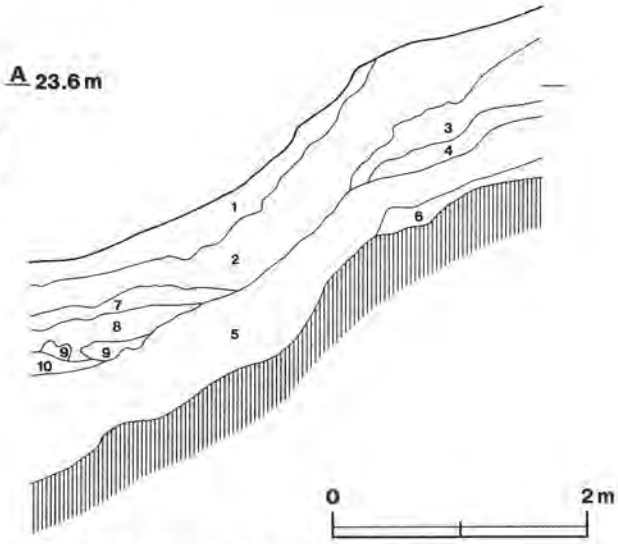
Aトレンチ（第61図，付図２）

D1a$_0$区～D2e$_1$区に，1.0mの幅で設定した。

７層～８層は，ローム中・小ブロックを中量含む褐色系の土であり，５層の黒褐色土の上に堆積しており，何らかの人為的な意図の下で堆積したものと考えられる。

土層解説

1層　にぶい黄褐色　ローム粒子微量。
2層　黒褐色　焼土粒子微量。ローム小ブロック微量・粒子少量。砂粒少量。
3層　黒褐色　ローム粒子微量。
4層　暗褐色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量。
5層　黒褐色　焼土粒子微量。ローム小ブロック微量・粒子少量。
6層　黒褐色　ローム小ブロック少量・粒子中量。
7層　灰黄褐色　炭化物微量。ローム中・小ブロック中量，ローム粒子中量。砂粒中量。
8層　褐色　ローム大ブロック少量，中・小ブロック中量，ローム粒子中量。砂粒中量。
9層　褐色　焼土粒子微量。ローム大ブロック少量，ローム中・小ブロック中量，ローム粒子多量。砂粒中量。黒色土粒子中量。
10層　にぶい黄褐色　焼土粒子微量。ローム粒子少量。黒色土粒子少量。砂粒中量。小礫少量。



第61図　Aトレンチ土層実測図

Bトレンチ（第62図，付図２）

C1i_0区～C2j_1区に，1.0mの幅で設定した。

４層と７層とはほぼ垂直に分けることができる。この２つの層が接するところから下方の地山は，その形状が複雑であり，人為的に掘り込まれて形成された可能性が高い。また，６層は，非常に硬く締まった暗褐色土であり，やはり，何らかの人為的な意図があったものと考えられる。

土層解説

1層　黒　褐　色　炭化物微量。ローム小ブロック微量・粒子中量。貝殻細片微量。
2層　黒　褐　色　ローム粒子微量。
3層　黒　褐　色　焼土粒子微量。ローム粒子中量。
4層　褐　　色　ローム小ブロック多量・粒子多量。砂粒少量。
5層　黒　褐　色　ローム小ブロック微量・粒子少量。中・小礫少量。
6層　暗　褐　色　ローム粒子少量。
7層　黒　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量。貝殻細片少量。大礫少量。

Cトレンチ（第62図，付図２）

C2a_4区～C2a_5区に，1.0mの幅で設定した。

２層の褐色土が離れて位置することや，地山の形状が複雑なことから，人為的に掘り込まれた可能性が高い。

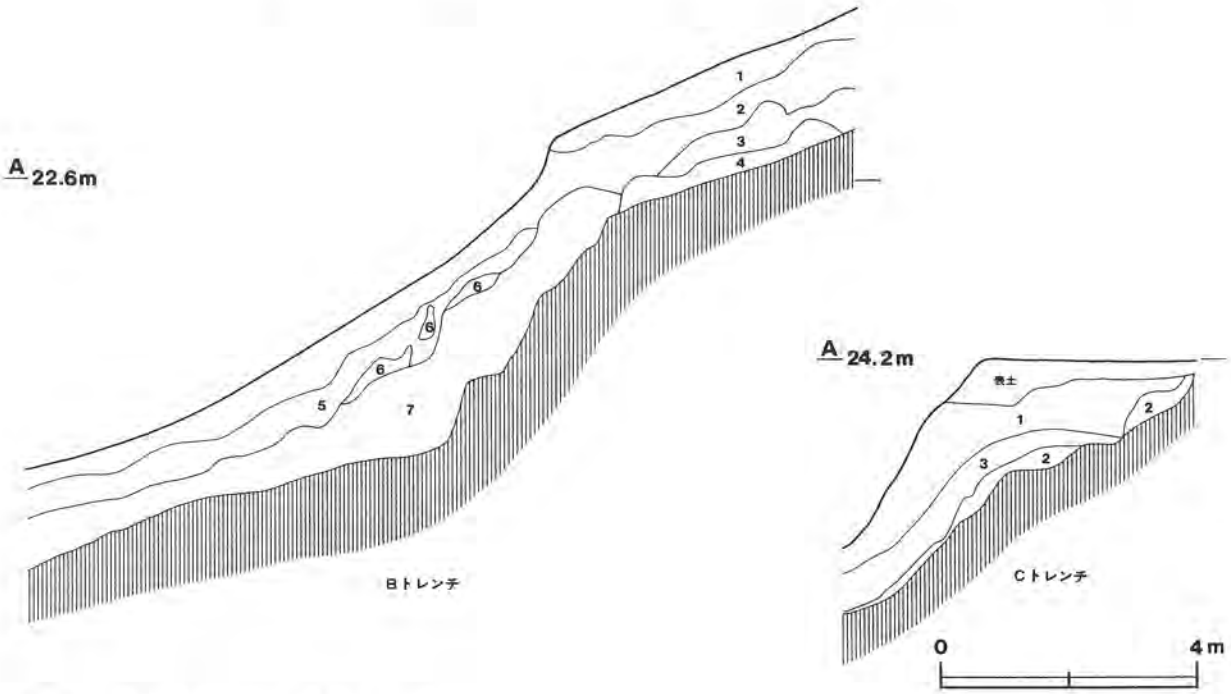
土層解説

1層　黒　褐　色　ローム中ブロック少量・小ブロック中量・粒子中量。鹿沼粒子少量。
2層　褐　　色　ローム中ブロック中量・小ブロック多量・粒子多量。鹿沼粒子少量。
3層　褐　　色　ローム粒子中量。

トレンチ調査をした位置は調査区の端の部分であり，遺構と思われる箇所の一部分の状態しか確認することができなかったが，明らかになった事柄についてまとめておきたい。

まず，A～Cの各トレンチの土層観察で共通する事柄は，自然堆積ではなく，人為的に掘り込まれた可能性が高いということである。

Cトレンチの部分は，土層から判断すると堀切と考えられ，調査エリア外の方向へ掘り窪められていくことがわかる。したがって，調査エリアの西側にほぼ南北にはしる窪みも堀切の可能性が強いといえる。また，Bトレ



第62図　B・Cトレンチ土層実測図

ンチの土層を観察すると，段を付けたように地山が掘り窪められており，帯曲輪の可能性が強いといえる。なお，Aトレンチの辺りも帯曲輪の可能性が強いと思われたが，土層観察の結果からは，人為的な堆積状況が確認できたのみで，遺構の確認まではできなかった。

4　その他の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

第5号住居跡（第63図）

位置　B2j_9区。

重複関係　本跡は，第38号土坑及び，P-112・118・122・123・124・125・142・143によって掘り込まれているものと思われる。

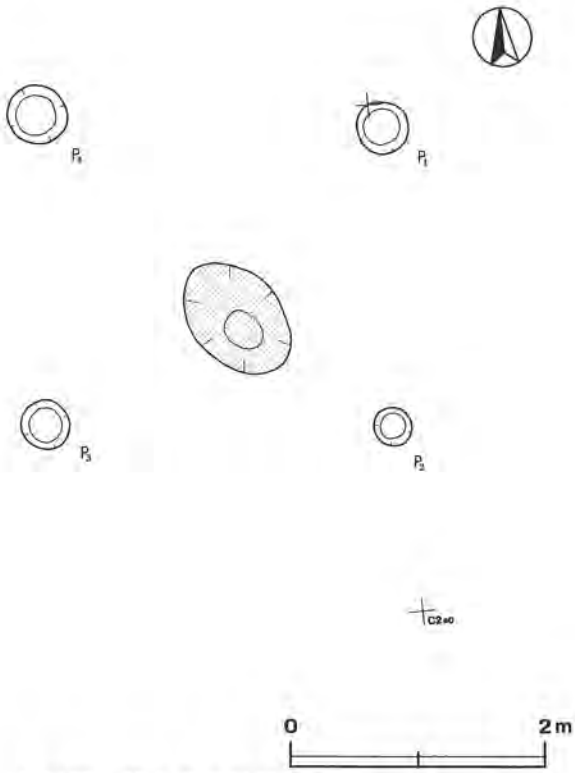
規模と平面形　削平されており，壁の確認ができなかったため不明であるが，主柱穴と思われるP_1～P_4を結んでできる形は長方形（2.75×2.42m）である。

長軸方向　［N－85°－W］。

床　炉跡の周囲に一部分が確認でき，ほぼ平坦である。

ピット　4か所。P_1は直径40cmの円形で，深さは80cm，P_2は直径30cmの円形で，深さは66cm，P_3は長径40cm，短径36cmの楕円形で，深さは62cm，P_4は直径48cmの円形で，深さは70cmである。これらP_1～P_4は，主柱穴と思われる。

炉　中央部のややP_2寄りの所に確認され，長径1.02m，短径0.70mの楕円形である。床面を僅かに掘り窪めた地床炉である。



第63図　第5号住居跡実測図

遺物　遺物は出土していない。

所見　本跡は，遺構の形態から判断すると，古墳時代中期以前の住居跡と考えられる。

(2)　土坑

当遺跡からは，36基の土坑が確認されたが，出土遺物が少なく時期や性格について不明なものが26基ある。ここでは，不明土坑26基のうち特徴がある第41・42号土坑について説明し，その他については一覧表（表6）にした。

第41号土坑（第65図）

位置　D2a_3区。

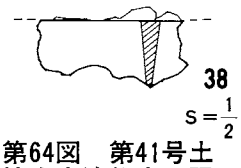
規模と平面形　長軸1.27m，短軸0.64mであり，南半分は長方形，北半分は不整円形である。深さは23cmである。

長軸方向　N－21°－E。

壁面　南半分は垂直に立ち上がり，北半分は大きく外傾している。

床　ほぼ平坦である。

覆土　3層からなる。



第64図　第41号土坑出土遺物実測図

土層解説

1層　灰オリーブ色　粘土大ブロック多量。
2層　灰オリーブ色　粘土中ブロック多量。
3層　黄　褐　色　粘土中ブロック中量。

遺物　38の鉄製品は覆土中から出土している。その他，流れ込みと思われる縄文式土器の細片が2点出土している。

所見　本跡は，切石（凝灰岩）と粘土によって構築されている。第42号土坑とほぼ同じ軸線や規模であり，構築材料も同じであり，同時期のものと思われる。出土遺物は極めて少なく，マウンドがなかったので，表土を剝ぐことで初めて確認できた遺構であるので明言はできないが，石棺墓の可能性が強い。

第41号土坑出土遺物観察表（第64図）

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
38	不明鉄製品	（3.9）	（1.8）	0.5	（6.5）	覆　土　中	M14

第42号土坑（第65図）

位置　C2j_2区。

規模と平面形　長軸1.05m，短軸0.55mの隅丸長方形で，深さは28cmである。

長軸方向　N－27°－E。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。

覆土　3層からなる。

土層解説

1層　黒　褐　色　ローム小ブロック少量，ローム粒子中量。粘土粒子少量。
2層　暗　褐　色　炭化物少量。ローム中・小ブロック少量，ローム粒子中量。粘土大ブロック中量。
3層　褐　色　ローム大ブロック少量，ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・粒子多量。粘土中ブロック多量。

遺物　土師器の細片が一片のみ出土している。

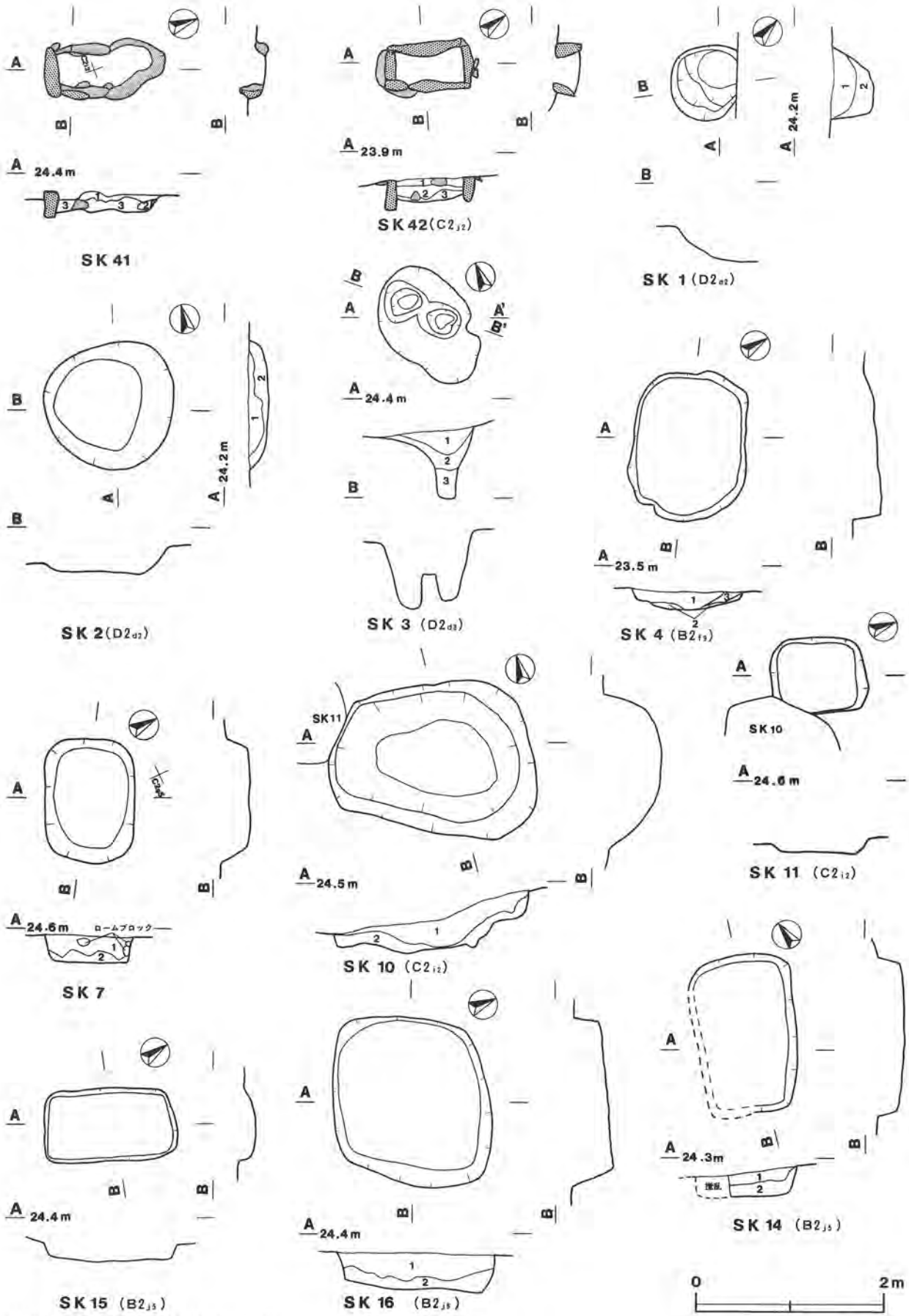
所見　本跡は，切石（凝灰岩）と粘土によって構築されている。第41号土坑と同時期のものと考えられ，第41号土坑と同様に石棺墓の可能性が強い。

第4号土坑出土遺物観察表（第67図）

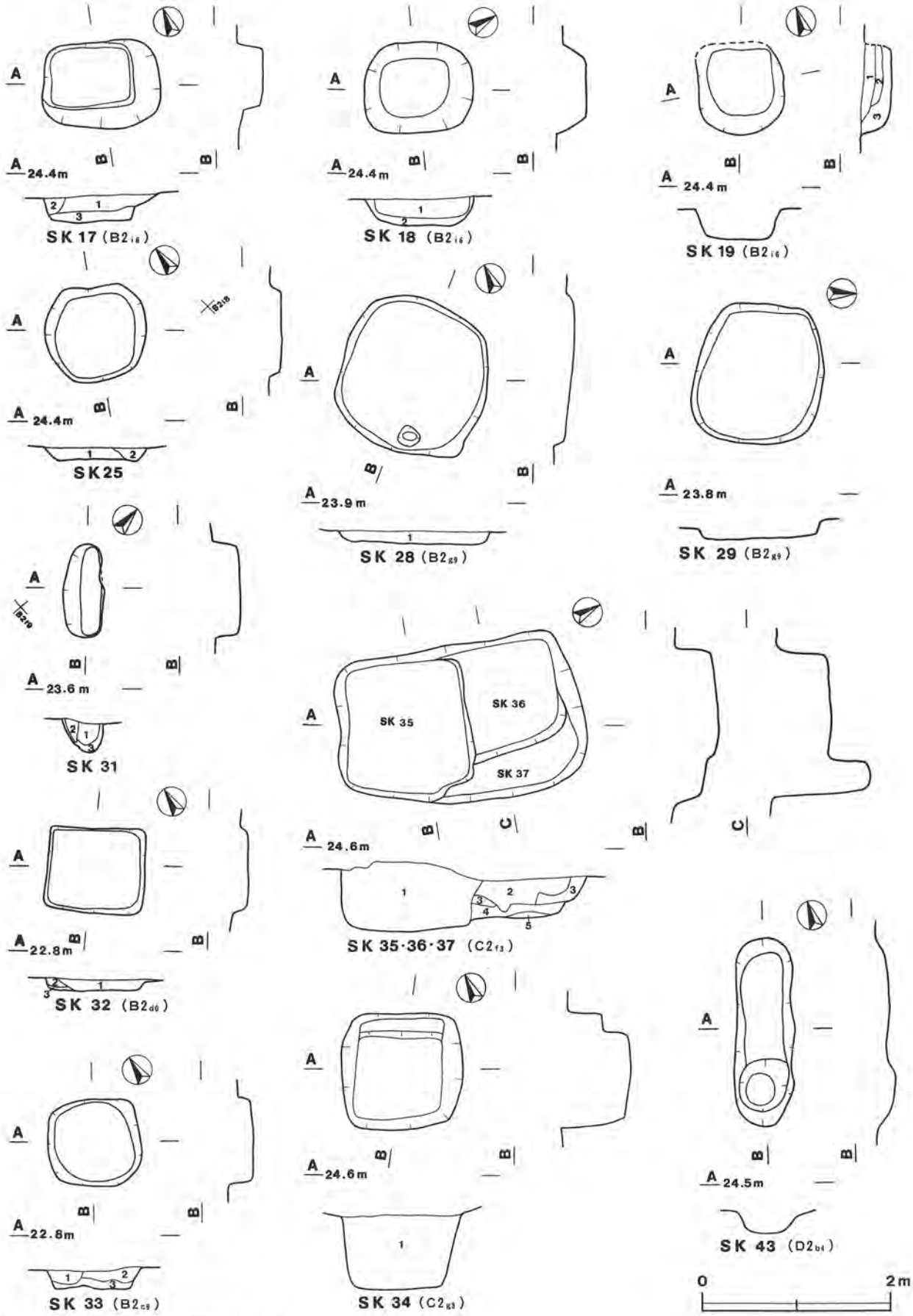
図版番号	器　種	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
39	石　鏃	（2.2）	1.8	0.9	（2.0）	チャート	覆　土　中	Q2

第13号土坑出土遺物観察表（第67図）

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
40	不明鉄製品	2.8	2.7	0.3	5.1	覆　土　中	M11



第65図　その他の土坑実測図(1)



第66図　その他の土坑実測図(2)

第1号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム大ブロック微量・粒子少量。

2層　にぶい黄褐色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量。

第2号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量。

2層　褐　　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量。

第3号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量。

2層　暗　褐　色　ローム大ブロック多量・小ブロック中量。

3層　黒　褐　色　ローム小ブロック少量。

第4号土坑　土層解説

1層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量。

2層　褐　　色

3層　褐　　色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子少量。

第7号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム大ブロック少量・粒子多量。鹿沼土小ブロック少量。

2層　黒　　色　ローム小ブロック少量・粒子少量。

第10号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　焼土粒子微量。炭化粒子少量。ローム小ブロック少量・粒子少量。

2層　褐　　色　ローム小ブロック多量・粒子多量。

第14号土坑　土層解説

1層　褐　　色　焼土中ブロック少量。ローム大・中・小ブロック中量，粒子多量。

2層　黒　褐　色　焼土小ブロック少量・焼土粒子少量。ローム大・中・小ブロック少量，粒子中量。

第15号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム中ブロック微量・小ブロック少量。

第16号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量。

2層　暗　褐　色　ローム大・小ブロック微量，粒子少量。

第17号土坑　土層解説

1層　暗　褐　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量・粒子少量。

2層　黒　褐　色　炭化粒子微量。ローム小ブロック少量。

3層　暗　褐　色　炭化粒子微量。ローム中ブロック少量・粒子少量。

第18号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム大ブロック中量，ローム中・小ブロック少量，粒子少量。

2層　黒　　色　ローム大ブロック少量・粒子中量。

第19号土坑　土層解説

1層　褐　　色　ローム小ブロック微量・粒子微量。

2層　暗　褐　色　ローム中ブロック少量・粒子少量。

3層　褐　　色　ローム中・小ブロック少量。

第25号土坑　土層解説

1層　黒　　色　ローム小ブロック微量・粒子微量。

2層　褐　　色　ローム粒子中量。

第28号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　ローム大・小ブロック少量，粒子少量。

第31号土坑　土層解説

1層　暗　褐　色　炭化粒子微量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子微量。

2層　黒　褐　色　ローム大ブロック微量・粒子少量。

3層　褐　　色　ローム大ブロック微量・粒子中量。

第32号土坑　土層解説

1層　黒　褐　色　焼土粒子微量。ローム大ブロック微量・小ブロック少量・粒子中量。

2層　黒　褐　色　ローム大ブロック微量・小ブロック中量。

3層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量・粒子少量。

第33号土坑　土層解説

1層　極暗褐色　ローム小ブロック微量・粒子中量。

2層　黒　褐　色　ローム中ブロック微量・小ブロック少量。

3層　黒　褐　色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量。

第34号土坑　土層解説

1層　暗　褐　色　ローム大ブロック微量・小ブロック少量。

第35・36・37号土坑　土層解説

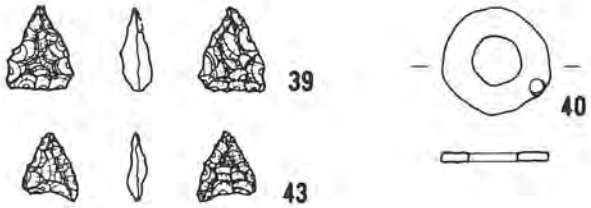
1層　黒　褐　色　焼土粒子少量。炭化物微量。ローム大ブロック微量・中ブロック少量・粒子中量。

2層　黒　褐　色　ローム中ブロック微量・粒子少量。

3層　黒　褐　色　焼土粒子微量。炭化粒子微量。ローム中ブロック微量・粒子中量。

4層　暗　褐　色　焼土粒子少量。炭化物微量。ローム中ブロック中量・粒子多量。

5層　黒　褐　色　焼土中ブロック少量・粒子中量。炭化物少量。ローム小ブロック・粒子中量。



$S = \frac{1}{2}$

第67図　その他の土坑出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物観察表（第67図）

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
41	不明鉄製品	（3.8）	0.6	0.4	（2.3）	覆土中	M12

第20号土坑出土遺物観察表（第67図）

図版番号	器　種	計測値				出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
42	不明鉄製品	（3.1）	（2.0）	0.4	（6.8）	覆土中	M13

第29号土坑出土遺物観察表（第67図）

図版番号	器　種	計測値				石質	出土地点	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
43	石　鏃	1.8	1.5	0.4	0.4	凝灰岩	覆土中	Q4

表6 滑川浜館遺跡土坑一覧表（第65・66図）

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	$D2e_2$	N－14°－W	[楕円形]	0.90 × 0.79	37	緩斜	皿状	自然	…	
2	$D2d_2$	N－20°－W	楕円形	1.42 × 1.35	30	緩斜	平坦	自然	…	
3	$D2d_3$	N－6°－E	楕円形	1.38 × 0.94	75	垂直	皿状	自然	土師器の細片	SI－1と重複
4	$B2f_9$	N－32°－E	楕円形	1.58 × 1.21	30	垂直	凹凸	自然	縄文式土器・土師器の細片，鉱滓	
7	$C2g_4$	N－40°－E	隅丸長方形	1.34 × 0.95	26	緩斜	平坦	人為	陶器の細片	
10	$C2i_3$	N－22°－E	不正楕円形	2.24 × 1.77	58	緩斜	皿状	自然	土師器の細片，鉱滓	SK－11，SD－5と重複
11	$C2i_2$	N－19°－W	隅丸長方形	1.02 × 0.81	13	外傾	平坦	不明	土師器の細片	SK－10，SD－5と重複
14	$B2j_5$	N－25°－W	[隅丸長方形]	1.61 ×[1.07]	28	垂直	平坦	自然	陶器の細片	
15	$B2j_5$	N－16°－W	隅丸長方形	1.41 × 0.79	16	緩斜	皿状	自然	土師器・須恵器・かわらけの細片	
16	$B2j_6$	N－19°－W	楕円形	1.70 × 1.77	44	垂直	平坦	自然	…	
17	$B2i_6$	N－50°－E	楕円形	1.22 × 0.90	26	垂直	平坦	自然	…	
18	$B2i_6$	N－25°－W	楕円形	1.16 × 0.96	30	緩斜	平坦	自然	縄文式土器・土師器・陶器の細片	
19	$B2i_6$	N－12°－W	隅丸方形	[0.99]× 0.90	32	緩斜	平坦	自然	…	
25	$B2h_7$	N－27°－W	不整円形	1.07 × 0.99	12	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片	
28	$B2g_9$	N－45°－W	不整円形	1.63 × 1.60	12	緩斜	平坦	自然	縄文式土器・土師器・須恵器の細片	
29	$B2g_9$	N－7°－W	隅丸台形	1.51 × 1.43	16	緩斜	平坦	不明	縄文式土器・土師器の細片，石鏃	
31	$B2e_9$	N－34°－E	隅丸長方形	1.00 × 0.44	28	垂直	皿状	人為	縄文式土器・土師器の細片	
32	$B2d_0$	N－17°－E	正方形	1.03 × 0.91	14	緩斜	平坦	自然	土師器の細片	
33	$B2c_9$	N－42°－E	隅丸方形	1.00 × 0.92	28	垂直	平坦	自然	土師器・陶器の細片	
34	$C2g_3$	N－26°－W	隅丸方形	1.31 × 1.24	68	垂直	平坦	人為	陶器の細片	SD－5と重複
35	$C2f_3$	N－23°－W	隅丸方形	1.55 × 1.38	56	垂直	平坦	人為	縄文式土器・土師器・陶器の細片	SI－2，SK－36・37，SD－5と重複
36	$C2f_3$	N－17°－W	[長方形]	(1.21)× 1.00	40	垂直	平坦	自然	土師器・陶器の細片	SI－2，SK－35・37と重複
37	$C2f_3$	N－20°－W	[隅丸長方形]	[2.59]× 1.68	31	垂直	平坦	不明	…	SI－2，SK－35・36と重複
43	$D2b_4$	N－19°－E	隅丸長方形	2.05 × 0.61	24	緩斜	平坦	不明	…	TM－1と重複

(3) 溝

第5号溝（第68図）

位置　$C2f_3$区～$C2i_3$区。

重複関係　本跡は，第10・11・34・35号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　全長（10.60）m，上幅2.20～1.40m，下幅0.69～0.34m，深さ39～14cmで，断面はロート状である。

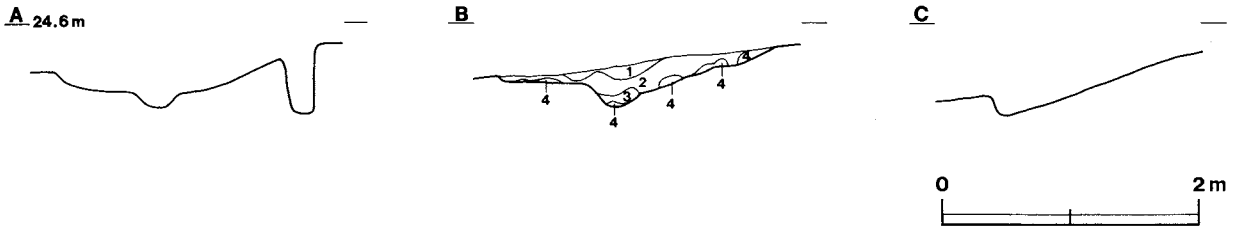
覆土　4層からなり，人為的に堆積したものと思われる。遺物は各層から少量出土している。

土層解説

1層　黒　褐　色　ローム小ブロック少量・粒子微量。
2層　暗　褐　色　炭化粒子微量。ローム大・小ブロック微量。
3層　暗　褐　色　ローム中ブロック・粒子少量。
4層　褐　　色　ローム大ブロック微量。

遺物　土師器・陶器・磁器の細片が少量出土している。

所見　本跡の時期及び性格は，不明である。



第68図　第5号溝断面・土層実測図

(4) 遺構外出土遺物

当調査区の遺構外から出土した遺物について，縄文式土器については拓影図で紹介し，他の遺物については一覧表で紹介する。

縄文式土器拓影図（第69・70図）

1～10は縄文時代早期後葉の土器片である。

44・45・46は茅山下層式である。44は口縁部片で，口唇部の両端に刻み目を施し，表側は刻み目を施した隆帯を垂下させ，裏側は貝殻条痕文を施した後に一部を磨り消している。45は口縁部片で，口唇部は内削ぎ状，表側は垂下する隆帯及び水平に巡る隆起線に刻み目を施し，裏側は横方向の貝殻条痕文を施している。46は胴部片で，表は刻み目を施した隆帯を巡らせ，上方に沈線文を施している。

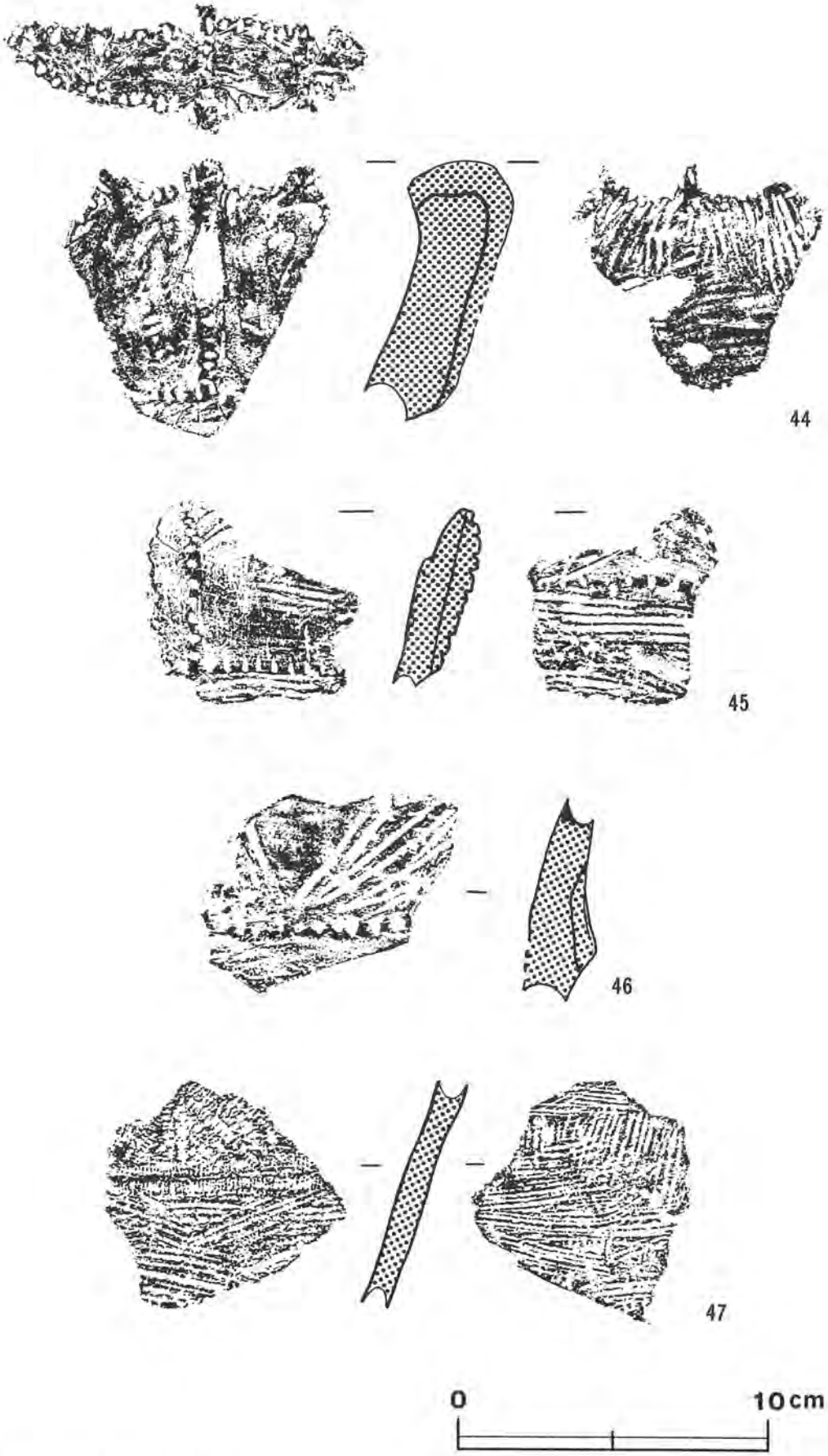
47・48・49は胴部片で常世2式である。47は，表は絡条体圧痕文及び貝殻条痕文を施し，裏は貝殻条痕文を施している。48は，表は絡条体圧痕文，裏は貝殻条痕文を施している。49は，表裏ともに貝殻条痕文を施している。

50・51は口縁部片である。50は，口唇部に刺突文を施し，表裏ともに貝殻条痕文を施している。51は，口唇部に刻み目を施し，表は縄文，裏は貝殻条痕文を施している。52・53は胴部片で，表は縄文を施している。

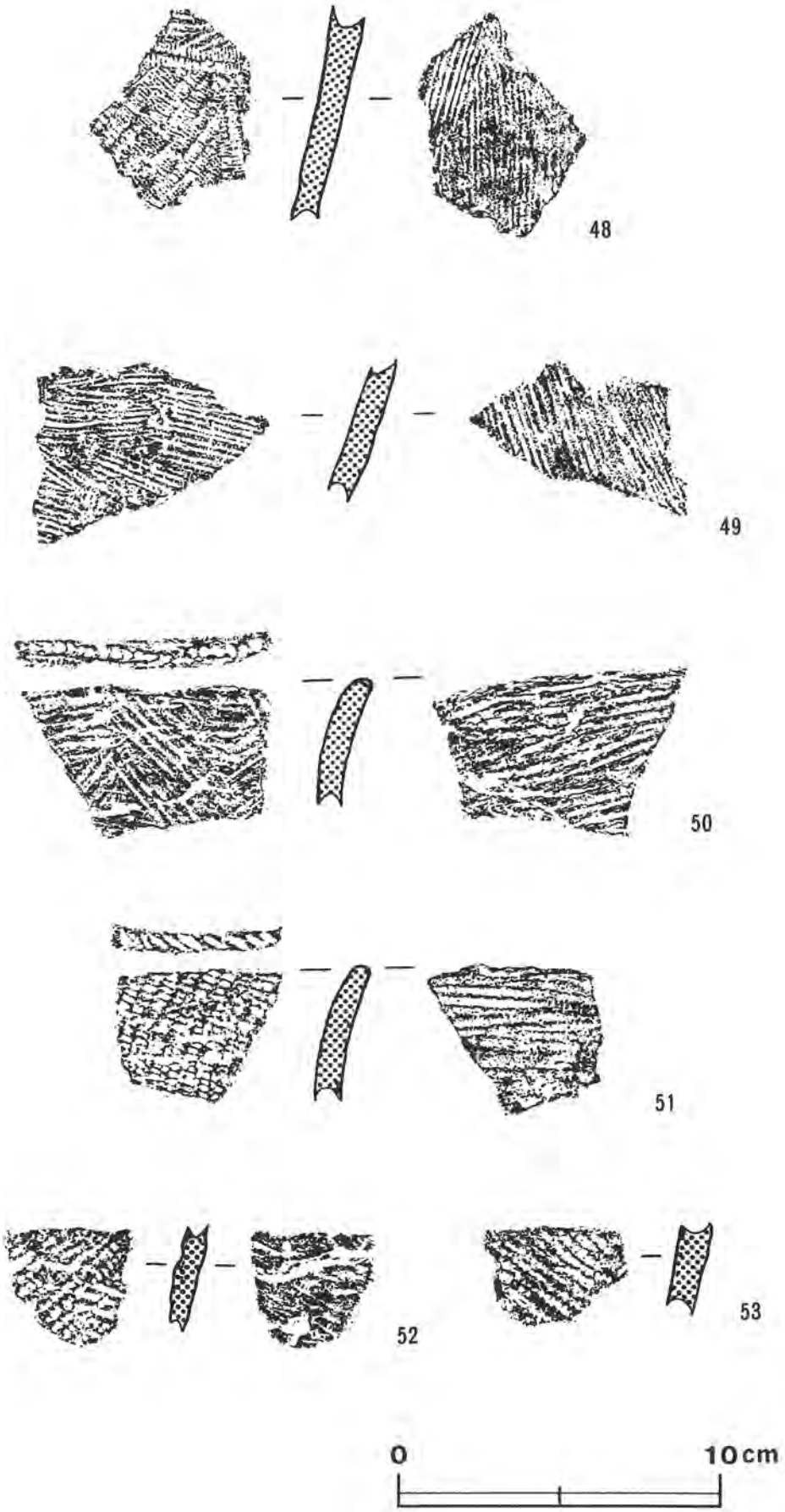
遺構外出土遺物観察表（第71・72図）

図版番号	器種	計測値（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 54	内耳鍋 土師質土器	A〔30.4〕 B（5.9）	口縁部片。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P18 5％ 西側表土中
55	高台付皿 陶器	A〔13.8〕 B 3.0 D〔7.3〕 E 0.5	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で，体部は内彎気味に大きく外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部及び体部内・外面横ナデ。体部外面下端及び底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ナデ。内面及び口縁部外面灰釉施釉。	(胎土) 灰白色 (灰釉) 浅黄色 普通	P19 40％ 西側表土中
56	天目茶碗 陶器	A〔11.6〕 B（2.6）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形。	砂粒 (胎土) 浅黄色 (釉) 赤黒色 普通	P20 5％ 表採

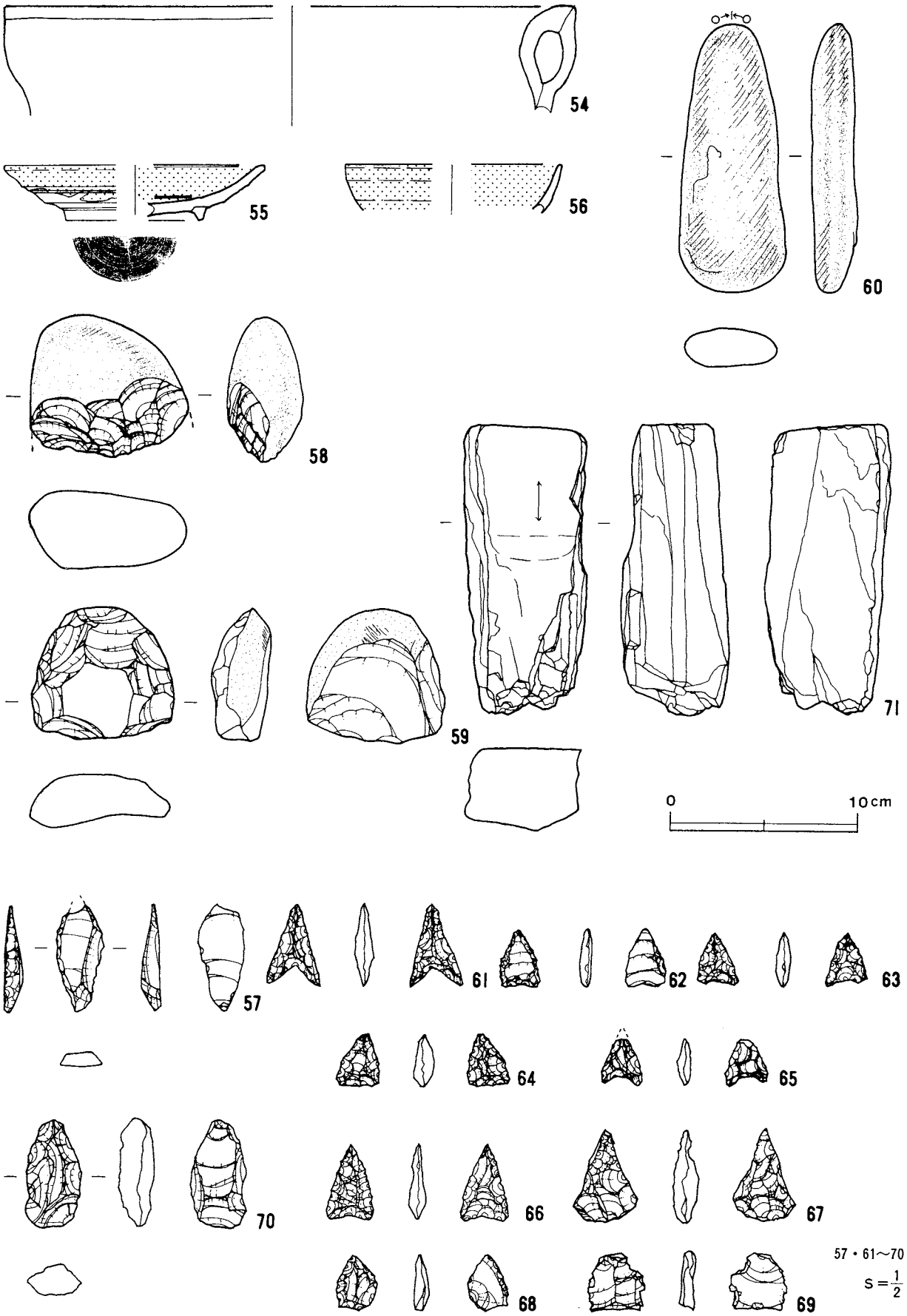
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
57	ナイフ形石器	(3.8)	1.7	0.7	(4.1)	緻密安山岩	表採	Q13
58	チョッパー	(7.7)	8.4	4.1	(327.9)	凝灰岩	表採	Q9
59	打製石斧	(7.1)	7.6	2.1	(187.4)	砂岩	表採	Q10
60	磨製石斧	14.1	5.6	2.3	280.2	砂岩	表採	Q22
61	石鏃	3.0	1.9	0.7	2.0	頁岩	表採	Q15
62	石鏃	2.1	1.5	0.5	1.3	凝灰岩	表採	Q16
63	石鏃	1.9	1.5	0.5	0.8	凝灰岩	表採	Q18
64	石鏃	1.9	1.5	0.7	1.3	凝灰岩	表採	Q17
65	石鏃	(1.7)	1.5	0.5	(1.0)	チャート	表採	Q19
66	石鏃	2.7	1.7	0.6	1.8	メノウ	表採	Q25
67	剝片	3.3	2.3	0.9	4.4	チャート	南部表土中	Q26
68	剝片	2.0	1.5	0.5	1.3	メノウ	表採	Q20
69	剝片	2.1	1.9	0.5	2.3	黒曜石	表採	Q21
70	剝片	3.8	1.9	1.2	9.7	石英	表採	Q14
71	砥石	15.5	6.5	5.6	814.0	凝灰岩	表採	Q11



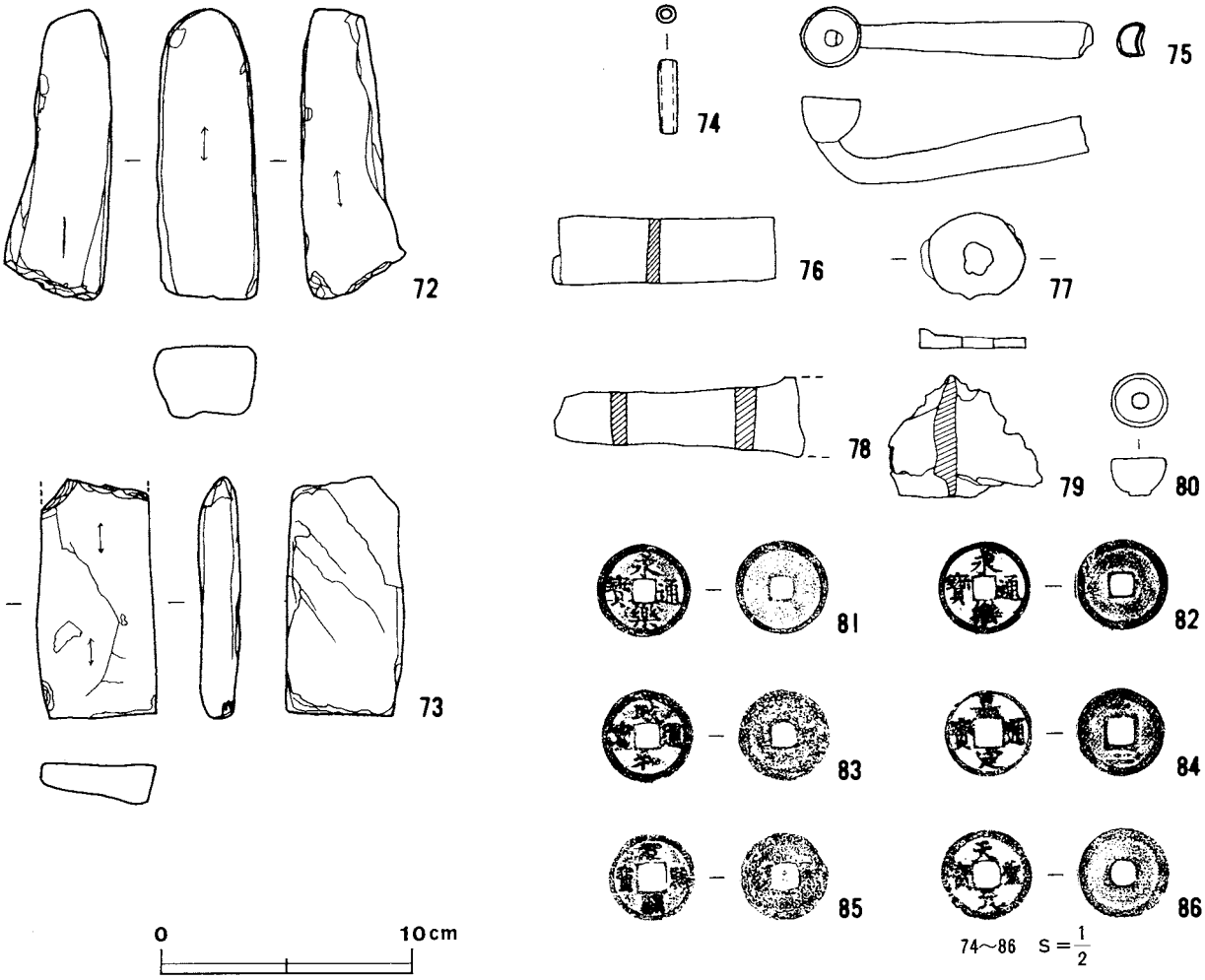
第69図　遺構外出土遺物拓影図(1)



第70図　遺構外出土遺物拓影図(2)



第71図　遺構外出土遺物実測図(3)



第72図　遺構外出土遺物実測・拓影図(4)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
72	砥石	(11.7)	3.9	4.0	(259.9)	砂岩	表採	Q23
73	砥石	(9.7)	4.7	1.7	(98.7)	凝灰岩	表採	Q24
74	管玉	2.0	0.5	(孔径)0.3	0.9	滑石	表採	Q27

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
75	煙管	(7.7)	2.3	1.1	(9.1)	東部表土中	M29 銅製品
76	不明銅製品	(6.1)	2.0	0.3	(3.0)	南部表土中	M31
77	不明鉄製品	2.8	2.3	0.5	4.3	北部表土中	M32 孔径0.8cm
78	不明鉄製品	(6.8)	2.2	0.6	(21.9)	北部表土中	M34
79	不明金属製品	4.0	3.3	0.6	18.7	北部表土中	M35 鉄に銅を貼っている。
80	煙管	(1.5)	(1.0)	(1.5)	(2.4)	北部表土中	M30 銅製品

図版番号	器種	初鋳年		出土地点	備考
		時代	年号		
81	永樂通寶	明 (中国銭)	1408年	西部表土中	M20
82	永樂通寶	明 (中国銭)	1408年	西部表土中	M21
83	政和通寶	北宋 (中国銭)	1111年	表採	M22
84	嘉定通寶	南宋 (中国銭)	1208年	表採	M23
85	元祐通寶	北宋 (中国銭)	1086年	表採	M24
86	天盛元宝	(西夏銭)	1158年	表採	M25

第4節　まとめ

今回の調査によって，当遺跡は古墳時代，平安時代，中世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは，各時期ごとに概観し，まとめとしたい。

古墳時代

第1～3号方形周溝墓が当該期の遺構で，調査区の中央部から南部にかけて確認された。3基の方形周溝墓は，主軸方向・規模・断面形等で一致する点を見いだすことはできない。しかし，出土遺物をみると，第1号方形周溝墓の（1の壺）の破片は，第2号方形周溝墓の覆土中からも出土しており，第1号と第2号の方形周溝墓は同時期のものと考えることができる。第1・2号方形周溝墓は，古墳時代前半（4世紀後半）のものと考えられる。第3号方形周溝墓の時期は不明である。

第1～3号方形周溝墓に伴う集落は，第5号住居跡が僅かに可能性をもつのみで，明らかにはできなかった。

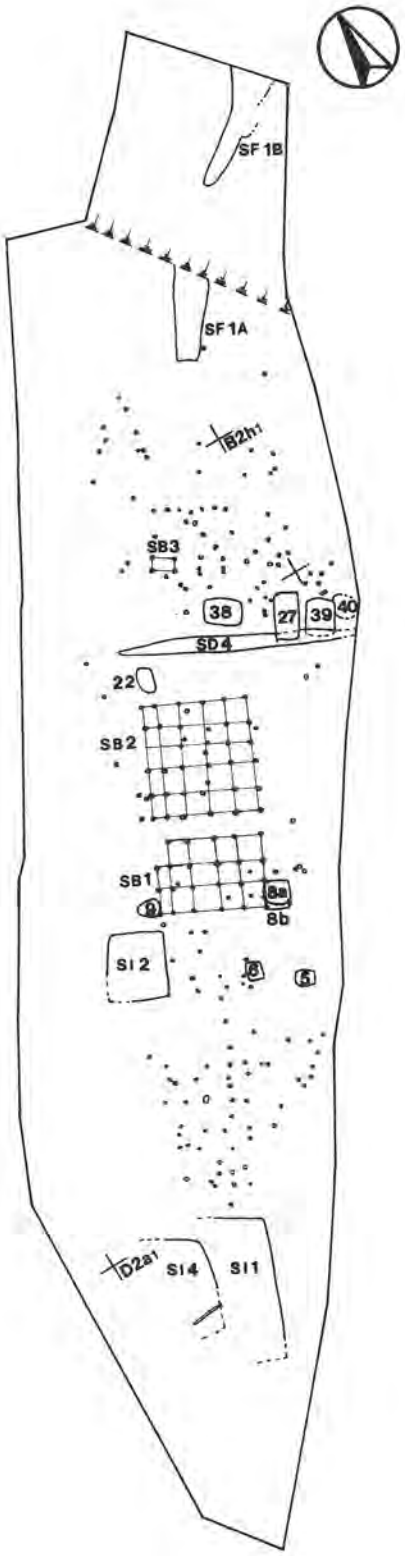
平安時代

第3号住居跡が当該期の遺構で，調査区の北部で確認され，時期は9世紀前半と考えられる。床面からは丸鞆が1点出土している。銙帯の一部品である丸鞆の1点だけの出土とはいえ，奈良時代から平安時代にかけての身分を示す銙帯の部品の出土は重要なものである。なお，当遺跡の北方約500m地点の金木場遺跡[1]でも銅製の銙帯（巡方）が1点出土している。

中世（第73図）

第1・2・4号住居跡，第1～3号掘立柱建物跡，第5・6・8a・8b・9・22・27・38・39・40号土坑，第4号溝，第1号道路跡，柱穴跡が当該期の遺構で，調査区の全面から確認された。これらの遺構の時期は，15～16世紀にかけてのものと考えられる。第1号道路跡は，第4号溝とほぼ直角に交わり，第1～3号掘立柱建物跡の軸線ともほぼ一致している。さらに，第1・2・4号住居跡の軸線ともほぼ一致するので，これらの遺構は，互いに関連をもつもので，同時代のものと考えることができる。なお，土坑との関連は不明である。

第5・6・8a・8b・9・22号土坑は，平面形が「隅丸」で，壁を掘り込むピットをもつ共通点がある。いずれも，土坑として調査をしてきたが，小竪穴状遺構とした方がよいと思われる。なお，屋代B遺跡[2]では，平面形が「隅丸」で，壁を掘り込むピットをもち，当遺跡の土坑とほぼ同じ規模の「墓壙及び墓壙と思われる土坑」が6



第73図　中世の遺構配置図

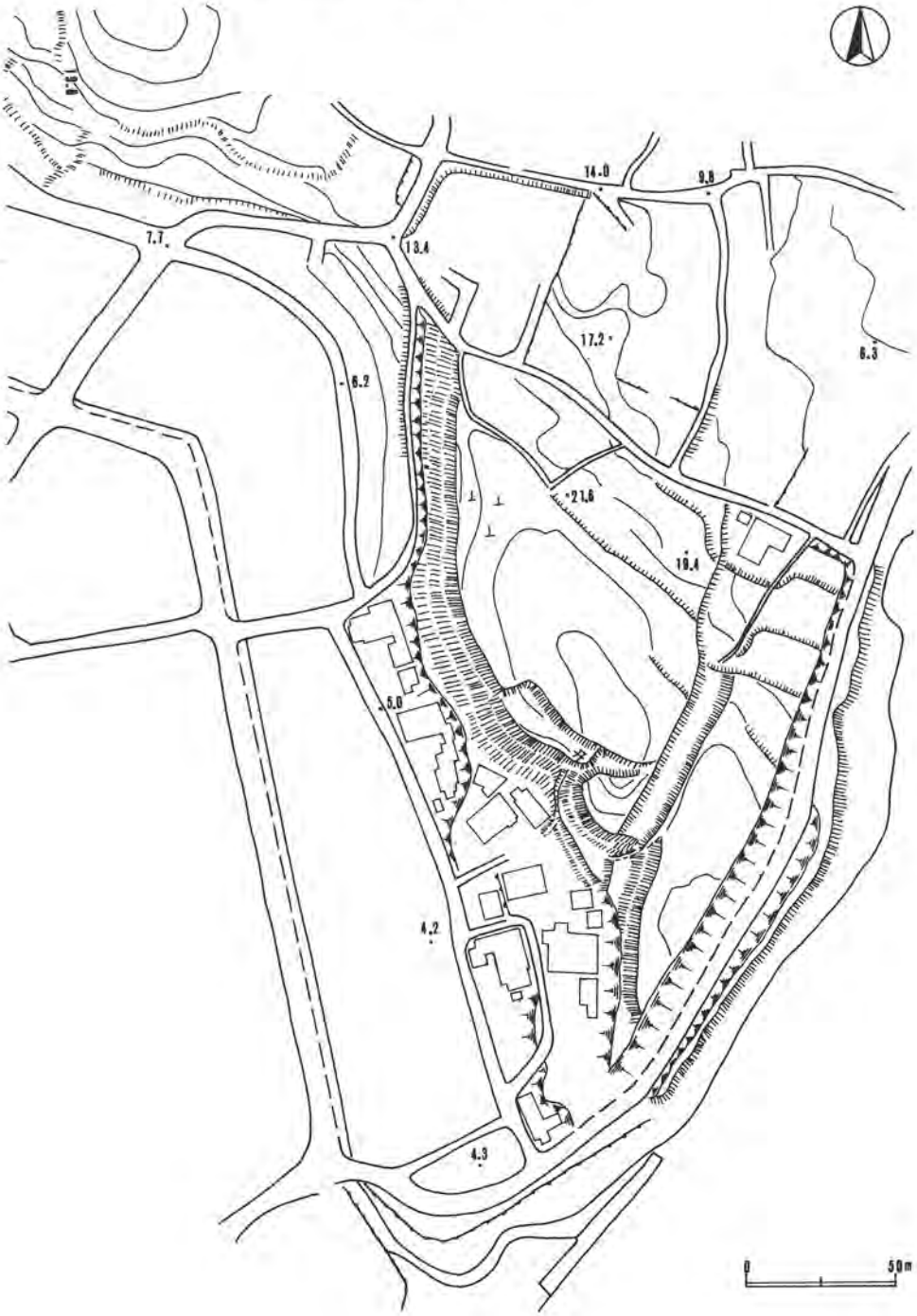
基（ＳＫ-437・446・453・466・519・601）発掘されている。当遺跡の土坑からは，墓壙と判断できる遺物の出土はなかったが，形状及び覆土の人為的な堆積状況からすると墓壙の可能性がある。

調査区の西端には，堀切及び帯曲輪が造られていた可能性が強い。第74図は，市村高男氏が作成した縄張り図である。この図には，今回の調査範囲の西側にほぼ南北に走る堀切があり，その堀切の西側に別の郭が位置している。

注

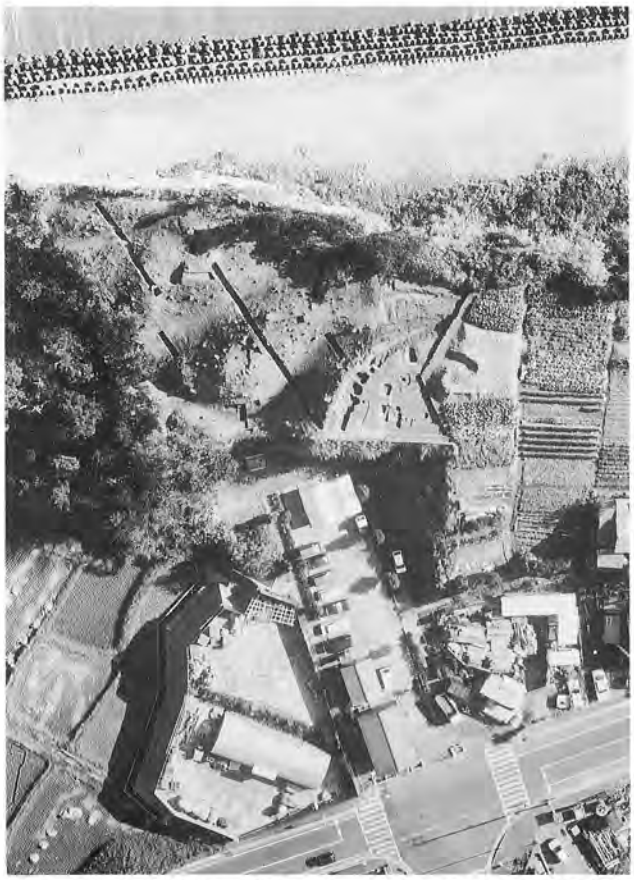
(1) （財）茨城県教育財団 「金木場遺跡・向畑遺跡」1990年３月

(2) （財）茨城県教育財団 「屋代Ｂ遺跡」1987年３月



第74図　滑川浜館遺跡要図（市村高男氏作図）

写　真　図　版



上　調査前遠景（北から），下左　A地区調査後全景，下右　B地区調査後全景

上　第1号住居跡，下　第1号住居跡竈掘方土層断面

上　第3号住居跡，下　第1号竪穴状遺構

上　第1号堀土層断面，下左　第1号堀，下右　第2号堀

上　Gトレンチ土層断面，下　北部調査終了状況

上　第1号道路跡，下　第1・2号土坑

1

2

3

4

6

7

16

5

17

18

住居跡出土土器（ＳＩ－１・２・３）

19

20

23

27

28

24

29

30

第3号住居跡出土土器

21

25

31

26

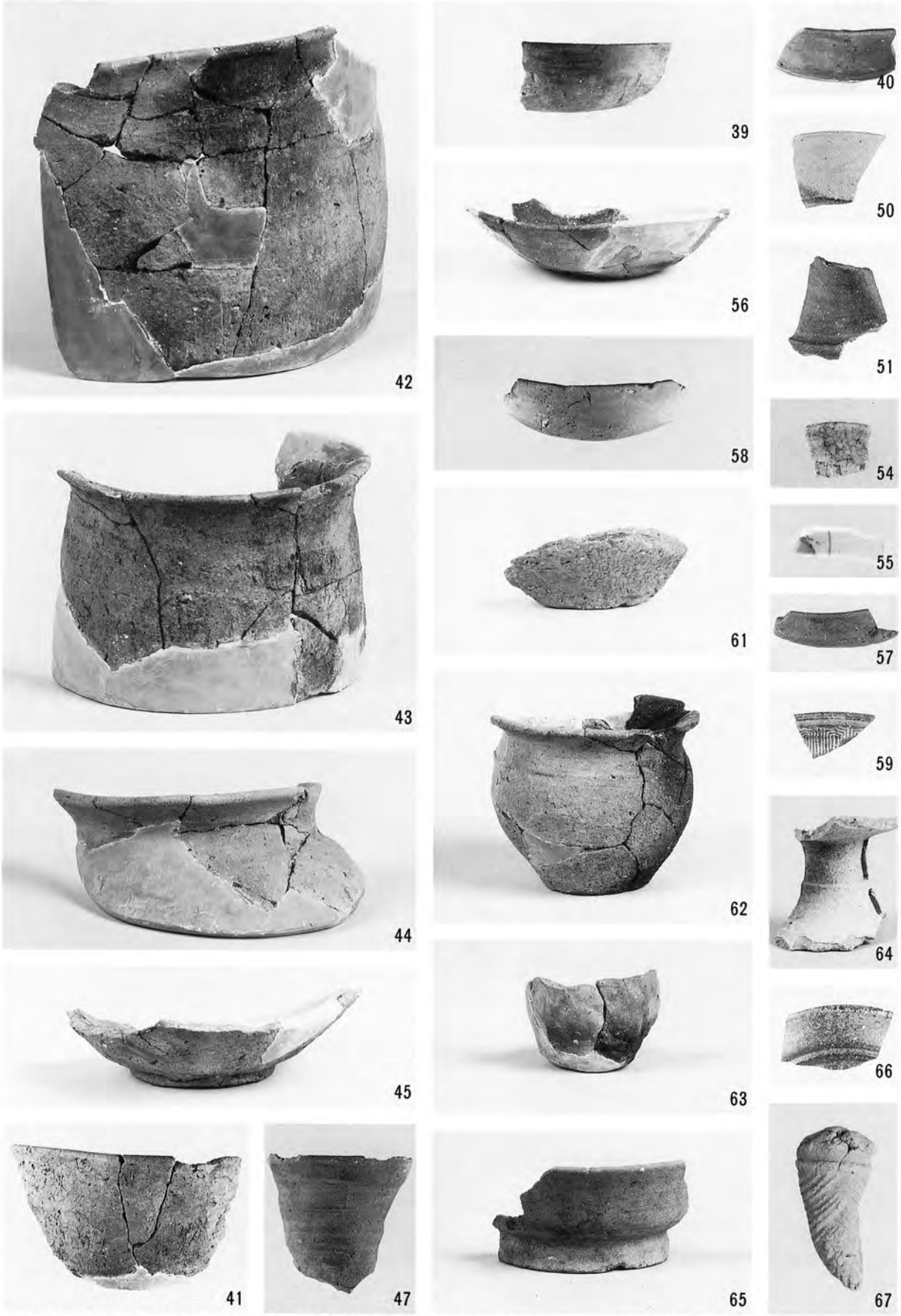
22

37

36

38

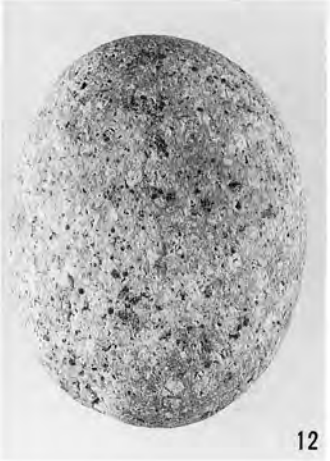
出土土器（Ｓ Ⅰ－3，第１号竪穴状遺構）



出土土器・土製品（第１号竪穴状遺構．ＳＤ－１・２，ＳＦ－１，ＳＫ－６・11，遺構外）

8

11


12

9

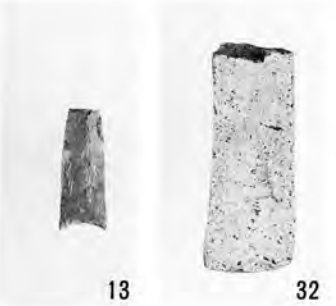
33

34

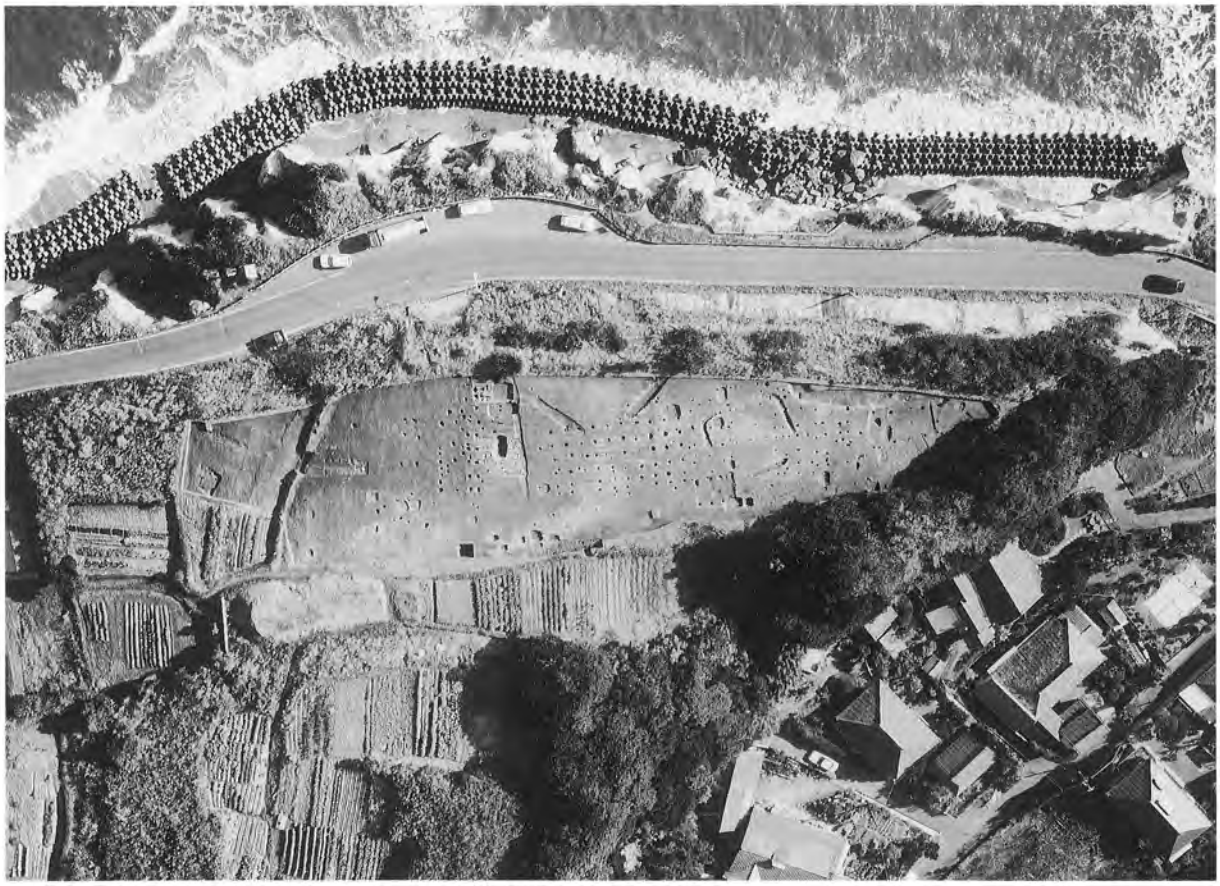
49

10

48


13　32

出土石器・石製品（ＳＩ－１・３，第１号竪穴状遺構）

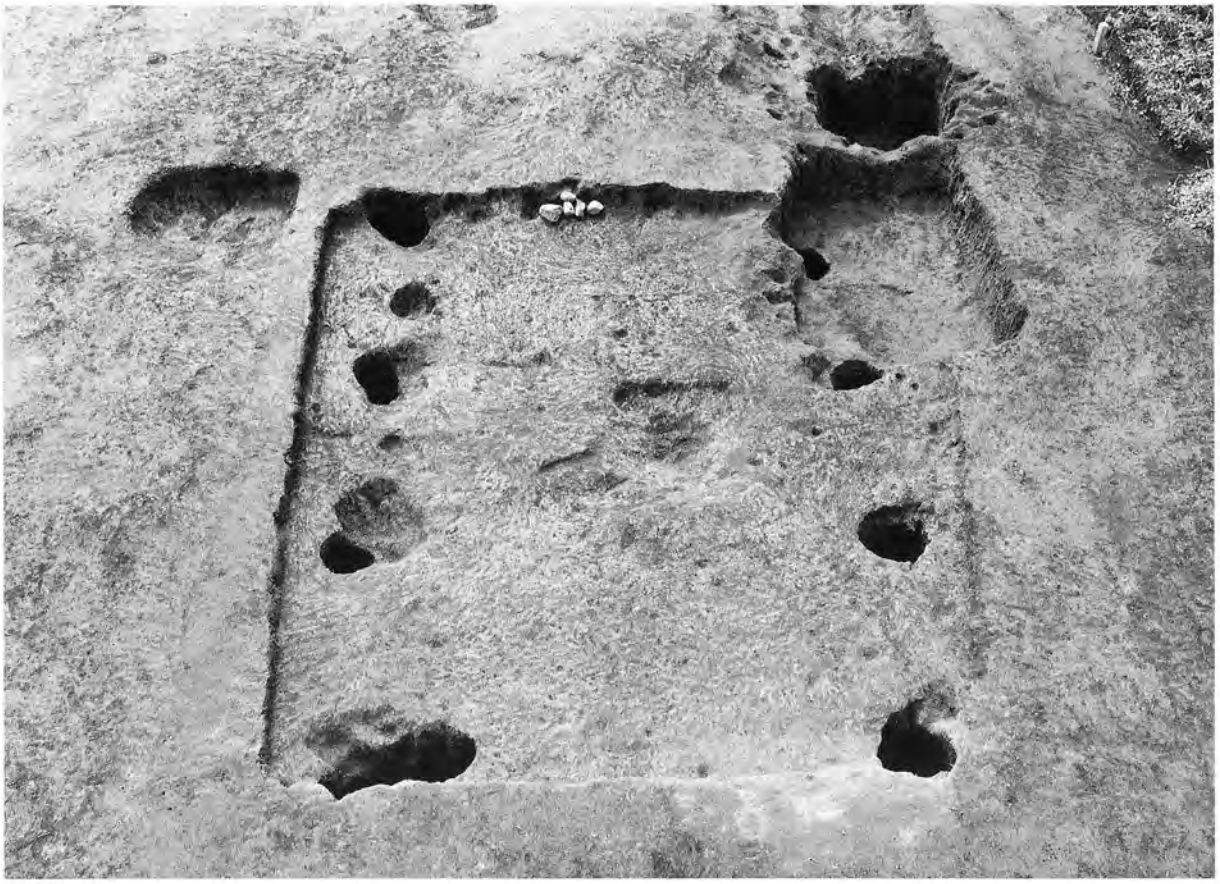


上　調査前遠景（南から），下　調査後全景

上　第2号方形周溝墓，下左　土師器壺出土状況（第1号方形周溝墓），下右　第1号方形周溝墓

上　第3号方形周溝墓，下　第3号住居跡

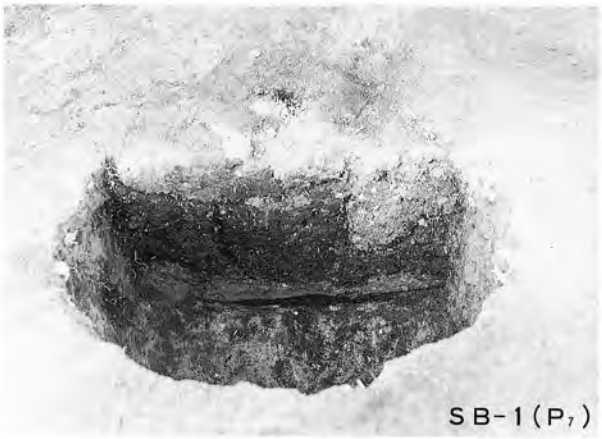
上　第1号住居跡，下　第1号住居跡貯蔵穴B

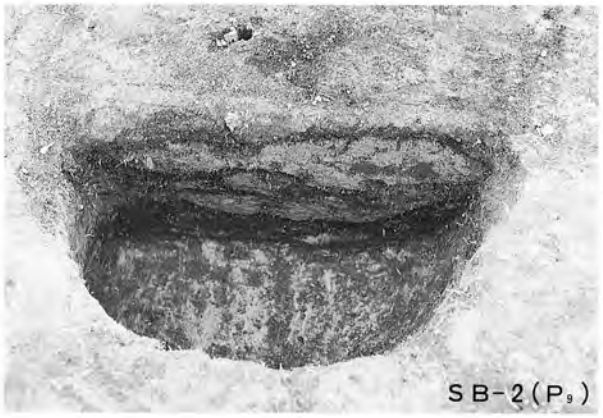


上　第2号住居跡，下　第2号住居跡出入口部石組

上　第4号住居跡，下左　第1号道路跡《A》，下右　第1号道路跡《B》

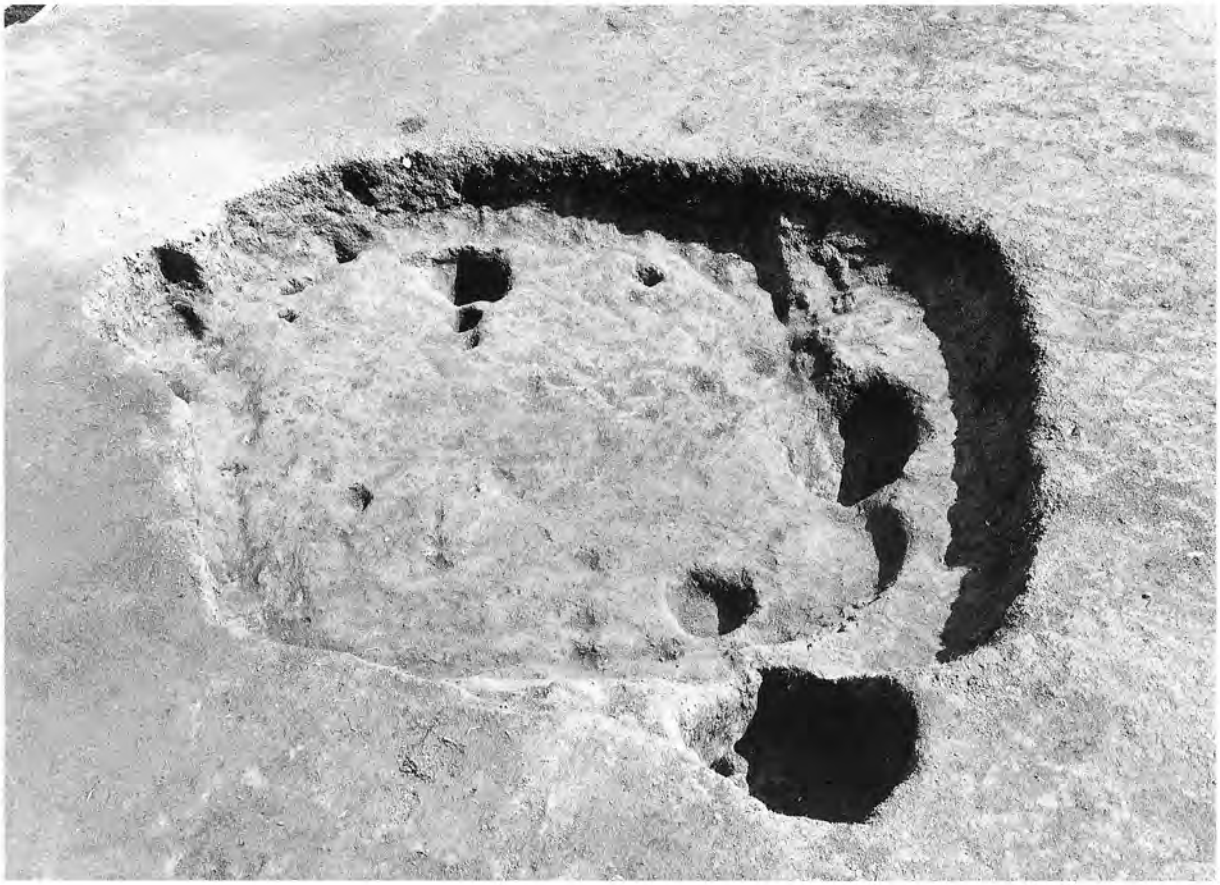
上　第1・2号掘立柱建物跡，下　第3号掘立柱建物跡

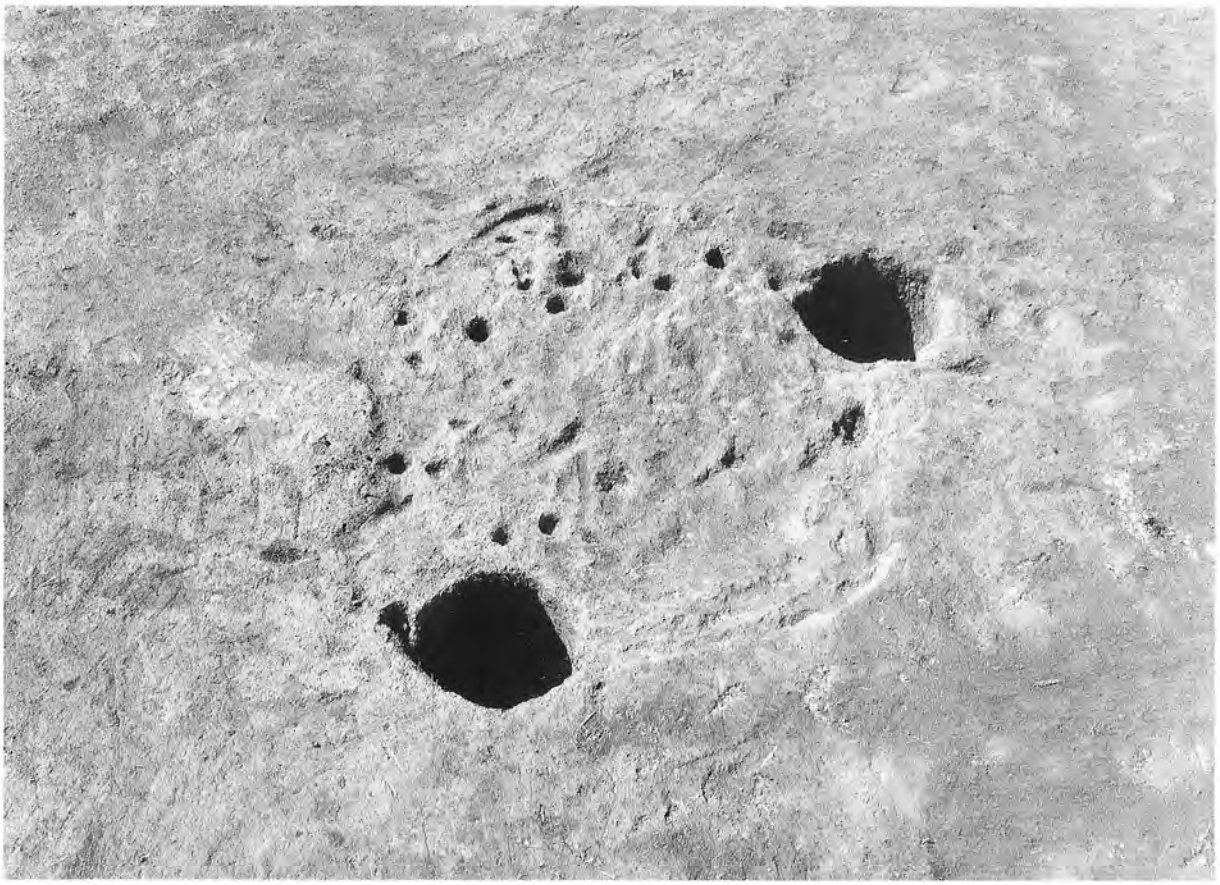




土層断面（SB-1・2，P-16，P-27）

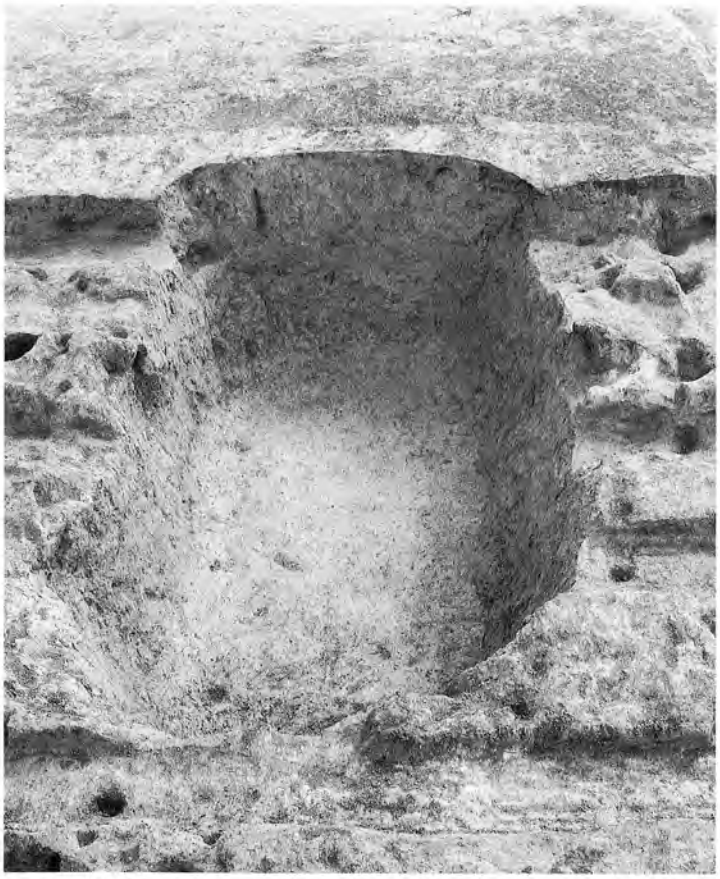
上　第5号土坑，下　第6号土坑



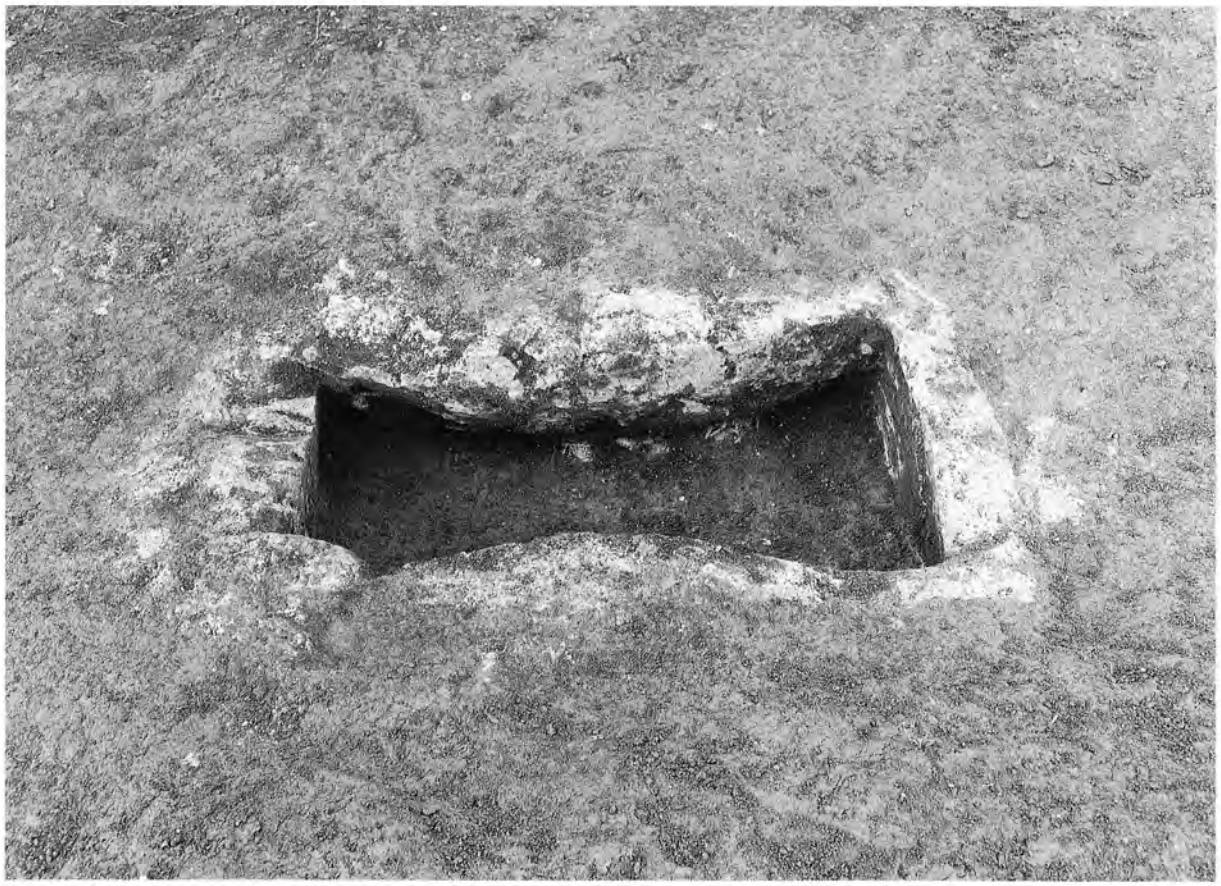


上　第8a・8b土坑，下　第9号土坑

上　第22号土坑，下左　第39号土坑，下右　第27号土坑



上　第40号土坑土層断面，下左　第38号土坑，下右　第４号溝

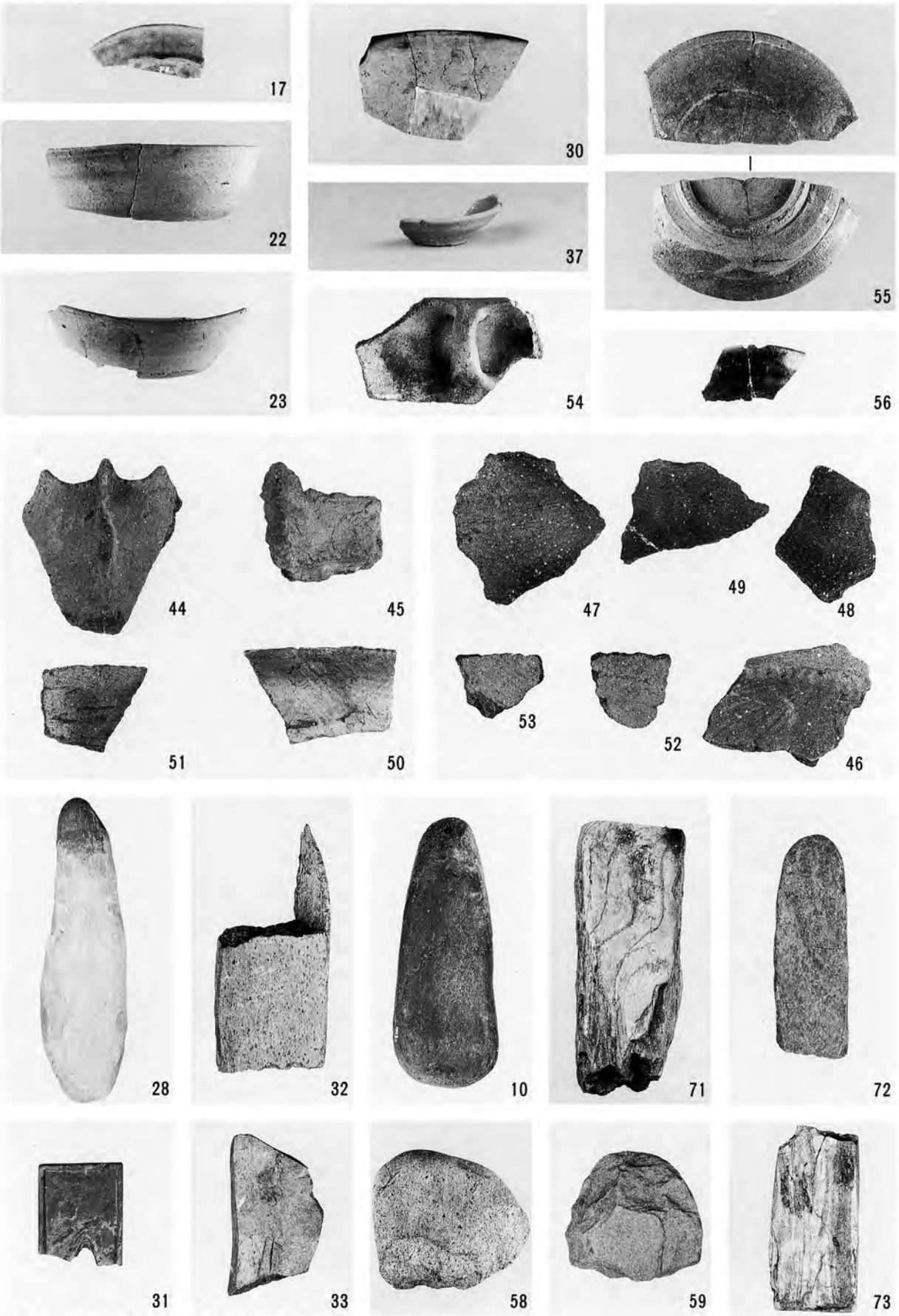


上　第41号土坑土層断面，下　第42号土坑

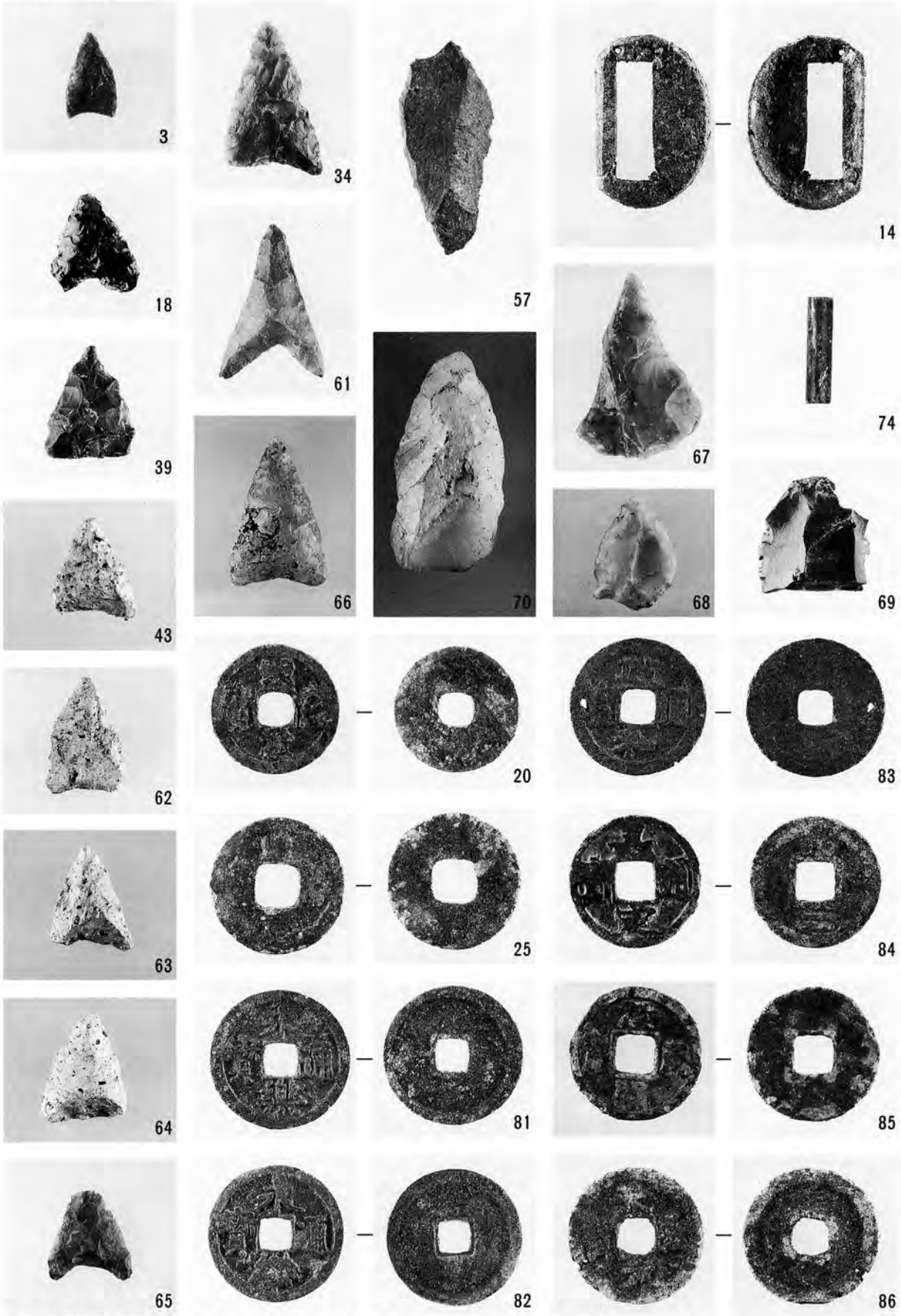
上　Bトレンチ土層断面，下　Cトレンチ土層断面

調査終了状況（上　南部，下　北部）

出土土器（TM-1～3，SI-1・3）

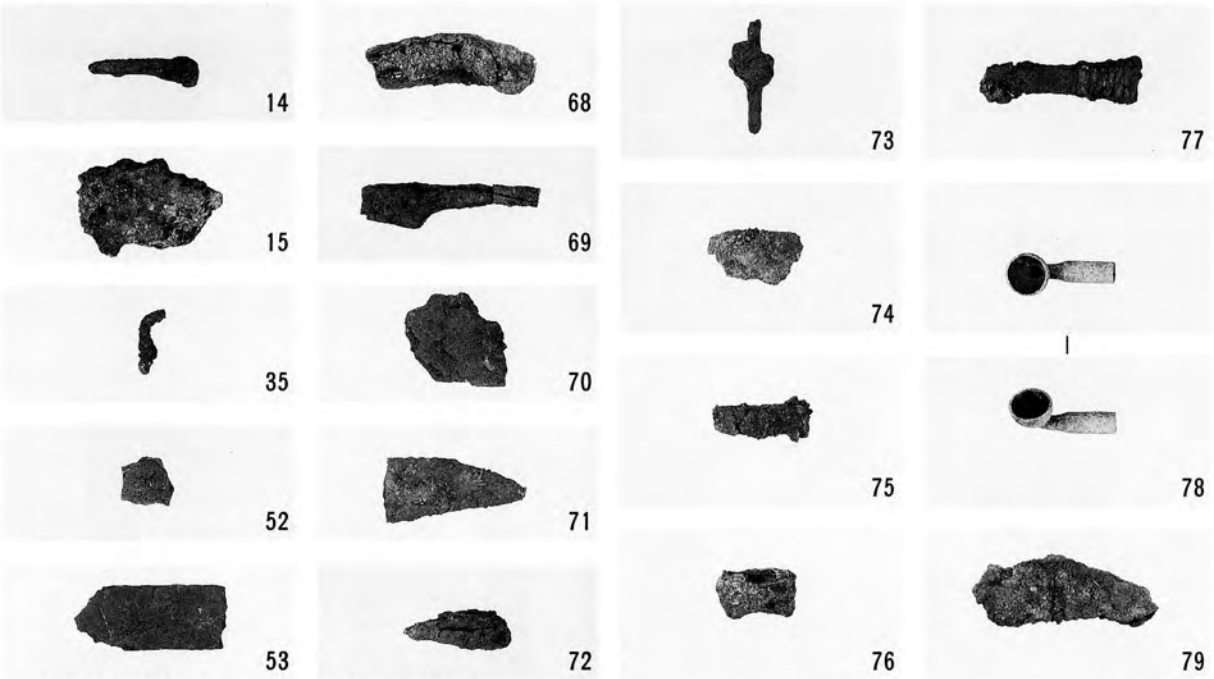


出土遺物（ＳＩ-１・４，ＳＦ-１，Ｐ-177，ＳＫ-38，遺構外）



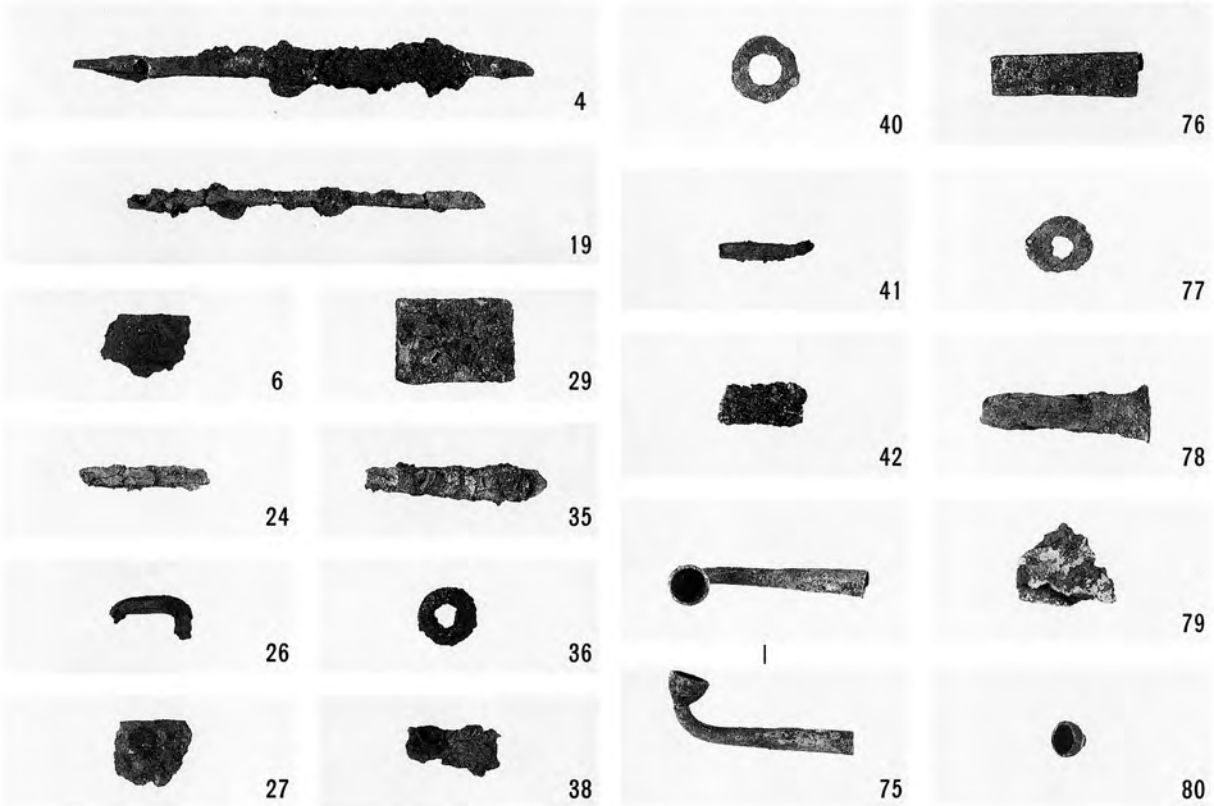
出土遺物（TM-1，SI-1・3・4，SK-4・6・29，SF-1，遺構外）

山崎遺跡



出土遺物（ＳＩ-1，ＳＤ-1，遺構外）

滑川浜館遺跡



出土遺物（ＴＭ-1・2，ＳＩ-1・3・4，ＳＢ-1，ＳＫ-8ｂ・13・15・20・41，ＳＦ-1，遺構外）

茨城県教育財団文化財調査報告第92集

一般国道6号（日立バイパス）改
築工事地内埋蔵文化財調査報告書

山　崎　遺　跡
滑川浜館遺跡

平成6（1994）年9月25日印刷
平成6（1994）年9月30日発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
〒310　水戸市見和1丁目356番地2号
茨城県生涯学習センター内
ＴＥＬ 0292－25－6587
印　刷　株式会社　三栄印刷
〒311－41　水戸市谷津町1－50
ＴＥＬ 0292－52－6501

(山崎遺跡A地区)
Fトレンチ
Bトレンチ
Dトレンチ
第1号竪穴状遺構
Hトレンチ
SI3
Aトレンチ
Gトレンチ
B3f5
B3f0
SI2
Iトレンチ
Cトレンチ
Eトレンチ
SI1
第1号堀
第2号堀
第3号堀
SF1
E2g4
E2h2
(山崎遺跡B地区)
0
20m

付図1　山崎遺跡全体図

付図２　滑川浜館遺跡全体図